

筑波大学博士(国際日本研究)学位請求論文

認知意味論からみる基本色彩語の豊語化  
— 中国語との対照 —

陳 祥

2021 年度

## 目 次

第1章 序論.....	1
1.1 研究背景.....	1
1.2 研究目的と研究課題.....	4
1.3 本論文の用語定義と研究方法.....	6
1.3.1 基本色彩語.....	6
1.3.2 畳語.....	8
1.3.3 研究方法と研究対象.....	11
1.4 本論文の構成.....	16
第2章 先行研究.....	18
2.1 色彩語に関する研究.....	18
2.1.1 機能・意味・使用に関する先行研究.....	18
2.1.2 色彩語に関する日中対照研究.....	21
2.2 畳語に関する先行研究.....	24
2.2.1 機能・意味・使用に関する先行研究.....	24
2.2.2 畳語に関する日中対照研究.....	27
2.3 先行研究のまとめと本論文の位置づけ.....	31
第3章 理論的枠組みと本論文の視点.....	35
3.1 認知意味論.....	35
3.2 スキーマ、プロトタイプと拡張事例.....	37
3.3 五感を介しての外界認知と相互作用.....	39
3.4 本論文の視点.....	41
第4章 日中両言語における基本色彩語の畳語の使用実態.....	44
4.1 はじめに.....	44
4.2 基本色彩語の畳語の構造的特徴.....	45
4.3 基本色彩語の畳語の文法機能.....	52
4.4 基本色彩語の畳語の使用特性.....	61
4.5 まとめ.....	64
第5章 相互作用による日中両言語における基本色彩語の畳語の特徴.....	68
5.1 『分類語彙表』による調査について.....	68

5.2	語基「白」を含む基本色彩語の畳語.....	72
5.3	語基「黒」を含む基本色彩語の畳語.....	82
5.4	語基「赤」を含む基本色彩語の畳語.....	90
5.5	語基「青」を含む基本色彩語の畳語.....	96
5.6	まとめ.....	103
第6章	視覚を介した基本色彩語とその畳語の意味関係及び認知プロセス.....	107
6.1	はじめに.....	107
6.2	語基「白」を含む日中両言語における基本色彩語とその畳語.....	108
6.3	語基「黒」を含む日中両言語における基本色彩語とその畳語.....	118
6.4	語基「赤」を含む日中両言語における基本色彩語とその畳語.....	127
6.5	語基「青」を含む日中両言語における基本色彩語とその畳語.....	136
6.6	まとめ.....	144
第7章	本論文の総括.....	148
7.1	本論文のまとめ.....	148
7.2	今後の課題.....	153
	各章との既発表論文及び学会発表との関連.....	155
	謝辞.....	157
	参考文献.....	158
	日本語文献.....	158
	外国語文献.....	164
	辞典・辞典（年代順）.....	165
	コーパスデータベース・参照したサイト.....	166

# 第1章 序論

本論文は、同一語基を持つ基本色彩語<sup>1</sup>の豊語化に関する認知プロセスについて論じるものである。本章では、まず、同一語基で、かつ繰り返しの形式上の類像性を示している日中両言語における基本色彩語の豊語に着目する理由を説明し、研究課題を設定する。次に、本論文で取り扱う用語を定義し、目的と研究方法を論じる。最後に、本論文の構成について述べる。

## 1.1 研究背景

認知言語学のアプローチの1つである類像性に基づき、同じ言語形式が表される意味には何らかの規則が存在する。言語における類像性は、単語レベルでの音と意味との対応に限らず、文法や言語要素の配列にも反映される(大堀 1991、Ungerer & Schmid 1996)とされ、野呂 (2016)では、同一語句の反復という言語形式と意味内容が何らかの類似関係を認める類像性が反映した表現は様々であると述べている。例えば、「山々」、「人々」のように名詞が指す対象が相当数存在し、「拭き拭き」、「食べ食べ」のように事態が相当回数反復することを表す。しかし、「国境の長い、長いトンネルを抜けると、また、トンネルだった。」は形容詞の繰り返しが程度の強調を表す表現も見られる<sup>2</sup>。すなわち、同じ語句の繰り返しが表せる内容は、現実世界における事物や出来事に限らず、話者がどのように対象を捉えるかの違いにも反映される(野呂 2016:20-23)。

山梨 (2010) は認知意味論のアプローチを用い、話者が対象を捉える能力を次の3つとして取り上げている。話者はある複数の対象の間に類像性を認知して共通のスキーマを抽出していく能力と、一般的なスキーマを背景にしてこのスキーマの条件を満たす具体的な対象を事例化していく能力と、プロトタイプとしてのある典型的な対象を背景にして、これに関連する拡張事例を取り込んでいく能力である。こういったスキーマからの事例化、典型事例からの拡張などの可能性に言及する研究が数多くなされている(Lakoff & Johnson 1999、深田・仲本 2008、山梨 2012、辻 2013 など)。

---

<sup>1</sup> 1.3.1節では、本論文で取り扱う基本色彩語の定義について詳しく論じる。

<sup>2</sup> これらの用例は益岡・田窪 (1992:172) から引用し、用例の説明は野呂(2016:23)から引用したものである。

本論文では、山梨 (2010) が指摘している話者が対象を捉える 3つの能力を用い、野呂 (2016) が言及されていない話者の捉え方を明示することが可能だと考えられる。また、野呂 (2016) の他、秋元 (2005)、石井 (2007) では、「白々」、「黒々」は形容詞の語幹を重ね、強調の意を表すとしている。しかし、「白々」、「黒々」という基本色彩語の疊語のように、構成要素の品詞は名詞「白」、形容詞「白い」が決まらず、品詞別による疊語の意味変化を考察することが困難だと考えられる。実際には、コーパスでは、「白々」は「非常に白い」の意を表さない用例 (2) が見出される。

- (1) a. 舟の下にある仄暗い水のゆらめきや萍の根の白々としたかそけき揺れ<sup>3</sup>が見えるようだ。(NLT<sup>4</sup>)
- b. 舟の下にある仄暗い水のゆらめきや萍の根の非常に白いかそけき揺れが見えるようだ。(作例<sup>5</sup>)
- (2) a. 町家(ちょうか)の者であろう、十八九になる娘とその乳母とも思える老女の二人が、白々とした秋風の道を藤沢の宿から江ノ島へ向って歩いていた。(NLT)
- b.\* 町家(ちょうか)の者であろう、十八九になる娘とその乳母とも思える老女の二人が、非常に白い秋風の道を藤沢の宿から江ノ島へ向って歩いていた。(作例)

(1a) における「白々」は (1b) 「非常に白い」に置き換えられるため、(1a) における「白々」は繰り返し前の「白い」という色の意味を表しつつ、「甚だしさ」としての<強調>の意をも表す。それに対して (2a) における「白々」は (2b) 「非常に白い」に置き換えられないため、繰り返し前の「白い」という色の意味が変化しつつ、<強調>の意として表さないことが確認できる。用例 (1) と (2) から、「白々」の意味には形容詞の<強調>で説明しきれず、先行研究で取り上げた疊語の用法を検討する必要があると考えられる。

本論文は、日本語にみられる同一語基、かつ繰り返しの疊語という言語現象に注目している。また、田 (2014) では、疊語は中国語においても日本語においても、新しい単語を生産する手段として常に重要であることと述べているため、以下では中国語との比較を含め、日本語と中

<sup>3</sup> 下線は筆者によるものである。考察の対象となる語彙には下線を引き、修飾する対象には二重下線を引くこととする。

<sup>4</sup> 筑波大学が公開している『筑波ウェブコーパス』は、日本語のウェブサイトから収集して構築した約 11 億語のコーパスである。

<sup>5</sup> コーパスの実例に基づき、筆者による加筆の用例である。以下作例と称する。

国語における畳語の用法を考察する。日本語と中国語における畳語の用法について、日本語の畳語用法は大里（2013）、田（2014）、禹（2015）、陳（2000）の論述、中国語の畳語用法は田（2014）、陳（2021）の論述を参考にして、表1のように再整理した。

表1 日・中両言語における畳語用法

用法	（一）原義を保持しているもの			（二）畳語形式で初めて意味を有するもの	
	I	II	III	IV	V
	反復・継続 の動作	ものの複 数・多数	強調の意	ものの音	色に関わる状態
日 本 語	泣く泣く、休 み休み	日々、家々	深々、高々	チクタク、ちりん ちりん	白々、白々しい
中 国 語	反反复复(fǎn fǎn fù fù; 繰り返す)、来来去去(lái lái qù qù; 行ったり来たりする)	天天(tiān tiān; 日々)、家家户户(jiā jiā hù hù; 家々)	深深(shēn shēn; 深々)、高高(gāo gāo; 高々)	滴滴答答(dī dī dá dá; チクタク)、铃铃当(líng líng dāng; ちりんちりん)	白白(bái bái; 白々)、白茫茫(bái máng máng; 真っ白)

表1に示すように、畳語の用法はまず大きく（一）原義を保持しているものと、（二）畳語形式で初めて意味を有するものに分けられる。さらに、（一）原義を保持しているものは、（I）反復・継続の動作を描写する、（II）ものの複数・多数を表す、（III）強調の意を表す、3つの用法に細分類できる。そして、（二）畳語形式で初めて意味を有するものは（IV）ものの音を描写すると（V）色に関わる状態を描写する<sup>6</sup> 2つの用法にさらに細分類できる。

また、表1から次のことが読み取れる。1つ目は、日本語と中国語における畳語は（I）～（V）のような共通用法を持つため、形式と意味との間に何らかの類像性を見出すことが可能

<sup>6</sup> 大里（2013）では、日本語、インドネシア語などは畳語が表す意味の種類が比較的豊富であるに対し、英語やフランス語は畳語の意味の種類が少ないとしている。比較的少ない言語の中で、英語においては、色に関わる状態を描写する場合は色彩語ではない他の語彙（青々とした芝生が続いている。「The lawn is spreading lush.」（『講談社和英辞典』1979: 6））、動物的描写など（西の空に赤々夕日が沈む。「The sun is setting aglow in the western sky.」（『講談社和英辞典』1979: 7））を使用することが確認される（下線は筆者によるものである）。

だと考えられる。2つ目は、管見の限り、従来の研究では、(I)～(IV)に焦点を当てて論じたものが多いが、(V)の「色の疊語」に関する研究は極めて少ない。3つ目は、(二)疊語形式で初めて意味を有するものの中で(V)色に関わる状態を描写する形式は反復する要素の基本形式「白、白い」、「白(bái)”が存在し、繰り返しの形式「白々、白々しい」、「白白<sup>7</sup>(bái bái)、白茫茫<sup>8</sup>(bái máng máng)”も存在する。

以上、本論文では、「白・白い・白々・白々しい」といった同一語基で、かつ繰り返しの基本色彩語の形式が表される意味に何らかの類像性を持つという仮説を立てて論を進めていく。まず、同一語基を繰り返すものと同一語基に後接する接辞を付け加えるものを研究対象とし、構成要素との関連性や類似表現との相違点についての考察を行いながら、構成要素などから十分に予測できない日中両言語における基本色彩語の疊語の使用実態を究明する。そして、日中両言語における基本色彩語の疊語が共起する対象の性質を考察することで、話者(認知主体)と対象(共起語)との相互作用によって得られた、視覚にかかわる身体的な経験が話者の主観的な判断に関わる叙述に比喩的に表現することを明らかにする。また、山梨(2010)が提案した認知意味論のアプローチを用い、日中両言語における基本色彩語の疊語について、構成要素である基本形式との意味拡張についての考察を行いながら、母語話者が視覚による同一語基を持つ基本色彩語の関連性をどのように反映させ、視覚を介した認知プロセスを明確にする。総括的に言うと、認知言語学のアプローチの1つである類像性の観点から日中両言語における基本色彩語の対照研究を行うことによって、語彙研究の新しい可能性を広げられることに期待する。

## 1.2 研究目的と研究課題

本論文では、日中両言語における基本色彩語とその疊語を体系的に分析して、(V)色に関わる状態を描写する疊語の用法を導き出すことを目的とする。具体的には、同一語基を持つ基本色彩語(「白・白い・白々・白々しい」)においては、表される意味内容に何らかの類像性を持つという仮説を立てて論を進めていく。

まず、基本色彩語の疊語は1種類として認識できるかを明らかにするため、辞書とコーパスより基本色彩語の疊語のデータを網羅的に収集し、基本色彩語の疊語の構造的特徴、文法機能、使用特性は、先行研究で述べている他の疊語の特徴と比較し、相違点を明確にする必要がある。

---

<sup>7</sup> 「白々。」(筆者訳)

<sup>8</sup> 「真っ白である。」(筆者訳)



そして、基本色彩語はなぜ畳語化になるか、基本色彩語と異なる基本色彩語の畳語の何かの特徴が見られるかを見出す必要がある。

児玉（2010）では、経験による知識と言語表現による文脈は相互に影響を与え合い、影響を受ける関係にある。その過程で語義は創造的に意味を拡大したり、縮小したりしながらも、コロケーションによっても共起する語に制限を受けている。ここでは、基本色彩語の畳語「白々」を挙げて説明する。例えば、典型例として、「白々と夜が明ける」または「白々とした夜明け」などの例から明らかのように、基本的には、外部世界の対象の文字通り、視覚による対象の特徴を直接把握できる表現として使われる。しかし、それに対し、「白々とした空虚感」、「白々とした気分」の例のように、主体の判断に関わる意味としても用いられる。ただし、この場合には、視覚に基づく外部世界の対象に関する何らかの視覚がかかわっていると思われる。よって、基本色彩語の畳語の対象の特徴は、『分類語彙表』を用いて、基本色彩語の畳語が共起する対象の性質を分類し、畳語の分布特徴を明確にする。

そして、外界との相互作用により、基本色彩語の畳語は認知主体が外部世界に視点を投げかけ、その世界の対象や関係を主観的に概念化していく結果の反映としてとらえ直すことが可能になると考えられる。その動機付けをより一層掘り下げて、基本色彩語の畳語について、構成要素である基本形式との意味拡張についての考察を行いながら、母語話者が視覚による同一語基を持つ基本色彩語とその畳語の関連性をどのように反映させ、視覚を介した認知プロセスを明らかにする。

このように、同一語基、かつ繰り返しの形式を持つ基本色彩語とその畳語の関係については、未だ取り組まれていない課題が残されている。本論文では、認知言語学のアプローチの1つである類像性の観点から基本色彩語とその畳語の関係性を一端でも明らかにするために、以下の研究課題に取り組む。

【研究課題1】日中両言語における基本色彩語の畳語の使用実態（構造的特徴、文法機能、使用特性）に相違点があるのか。

【研究課題2】日中両言語において知覚者が基本色彩語の畳語をどのように概念化しているのか。

【研究課題3】日中両言語における基本色彩語とその畳語に関連性があるのか。同じ語基を持つ基本色彩語とその畳語の間には意味拡張があるのか。母語話者は視覚を介した認知プロセスにおいて、同一語基を持つ基本色彩語とその畳語の関連性をどのように反映させているのか。



### 1.3 本論文の用語定義と研究方法

基本色彩語と畳語については、これまで厳密な定義がなされてこなかったため、研究者によって基本色彩語と畳語についての認識の違いが見られる。以下では、基本色彩語と畳語に関する先行研究を取り上げ、本論文で取り扱う用語について述べる。

#### 1.3.1 基本色彩語

本論文では、色彩語の使用順位頻度を調べ、上位語として使用する色彩語を基本色彩語と定義する。まず、『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊：総記および語彙表』と『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌』を調べ、日本語における色彩語の使用頻度を考察する。

『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊：総記および語彙表』によると、色彩語の使用度順位は表2のようになる。「白、白い」(0.0831%) > 「黒、黒い」(0.0733%) > 「赤、赤い」(0.0308%) > 「青、青い」(0.0099%) > 「黄色、黄色い」(0.0046%) の順である。

表2 日本語における色彩語の使用順位と出現頻度 (一)

使用順位	1	2	3	4	5
色彩語	白、白い	黒、黒い	赤、赤い	青、青い	黄色、黄色い
出現頻度	0.0831%	0.0733%	0.0308%	0.0099%	0.0046%

『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌』によると、色彩語の使用度順位は表3のようである。「白、白い」(0.04348%) > 「黒、黒い」(0.04281%) > 「赤、赤い」(0.03035%) > 「青、青い」(0.01178%) > 「黄色、黄色い」(0.00295%) の順である。

表3 日本語における色彩語の使用順位と出現頻度 (二)

使用順位	1	2	3	4	5
色彩語	白、白い	黒、黒い	赤、赤い	青、青い	黄色、黄色い
出現頻度	0.04348%	0.04281%	0.03035%	0.01178%	0.00295%

表2と表3から分かるように、日本語においては、使用順位の上位3語としては「白」、「黒」、「赤」であることが確認できる。その次は、「青」となっている。

一方、中国語における色彩語の使用頻度はどうであろうか。《北京語言学院出版社现代汉语频率词典》によると、色彩語の使用順位と出現頻度は表4の通りである。

表4 中国語における色彩語の使用順位と出現頻度

使用順位	1	2	3	4	5
色彩語	红 (赤)	白 (白)	黑 (黒)	绿 (緑色)	蓝 (青)
出現頻度	0.04504%	0.03530%	0.03112%	0.01027%	0.00784%

表4に示すように、中国語においても、“红 (hóng)”、“白 (bái)”、“黑 (hēi)”は上位3語として使用されていることが確認できる。また、中国語の“蓝 (lán)”より“绿 (lǜ)”の出現頻度が高いことが確認できる。

以上の考察から、日本語と中国語においては、出現順位の上位語としては「白」・“白 (bái)”、「黒」・“黑 (hēi)”、「赤」・“红 (hóng)”であることが確認できる。その次は、日本語は「青」、中国語は“绿 (lǜ)”または“蓝 (lán)”となっている。

また、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)では、「白々」、「黒々」、「赤々」、「青々」の疊語は見出し語として記述されているが、「黄々」は記述されていない。一方、『講談社中日辞典第3版』(2010)と『小学館中日辞典第3版』(2016)では、“白白 (bái bái)”のみは見出し語として記述されているが、『北京大学中国语言学研究中心 CCL 语料库检索系统』を調べたところ、“白白 (bái bái)”、“黒黒 (hēi hēi)”、“红红 (hóng hóng)”、“绿绿 (lǜ lǜ)”、“蓝蓝 (lán lán)”の疊語の使用例が見られる。

西口・吉岡 (2016:47)では、「白」、「黒」、「赤」、「青」のみが「い」を付け、形容詞となることができるため、最も基本的な色だとしている。郭 (2014)では、中国の伝統的な思想五行説に従い、中国の基本的な五色を「白」、「黒」、「赤」、「青」、「黄」、としている。一方、日本神話『古事記』、『日本書紀』、『風土記』などに現れる色名は数色に限られており、主に「赤」、「白」、「青」、「黒」の4色である。よって、郭 (2014)では、日中両言語が共通している「白」・“白 (bái)”、「黒」・“黑 (hēi)”、「赤」・“红 (hóng)”、「青」・“绿 (lǜ)”を研究の対象とし、研究を行った。

本論文では、語彙表や辞書などで調べた使用順位と出現頻度、かつ、西口・吉岡 (2016)が

述べている「い」をつける色、郭（2014）が述べている中国の伝統的な思想五行説に現れる色も参考にし、日本語の「白」、「黒」、「赤」、「青」と中国語の“白 (bái)”、“黒 (hēi)”、“紅 (hóng)”、“绿 (lǜ)”を基本色彩語と定義し、論を進めていく。

### 1.3.2 畳語

本論文で取り扱う研究対象である畳語を定義するにあたり、まず日本語の語構成の基本概念を見る。語構成の研究においては、意味を有する最小の言語単位は形態素である。形態素の中には、語基<sup>10</sup>と接辞がある。語の表す語彙的意味の中核を担い、それだけで自立して語を構成できるものが語基であり、常に語基と結合して語を形成するものが接辞である。接辞は語基に付いて新しい別の語を形成するものである。

玉村（2005）では、単純語に対し、2つ以上の構成要素からなる語を合成語というが、合成語はさらに複合語と派生語に分類されるとしている。本論文の研究対象である畳語は2つの語基からなるため、合成語の中にある複合語の1種であると考えられる。語構成からみた語の種類は図1のように分類できる。

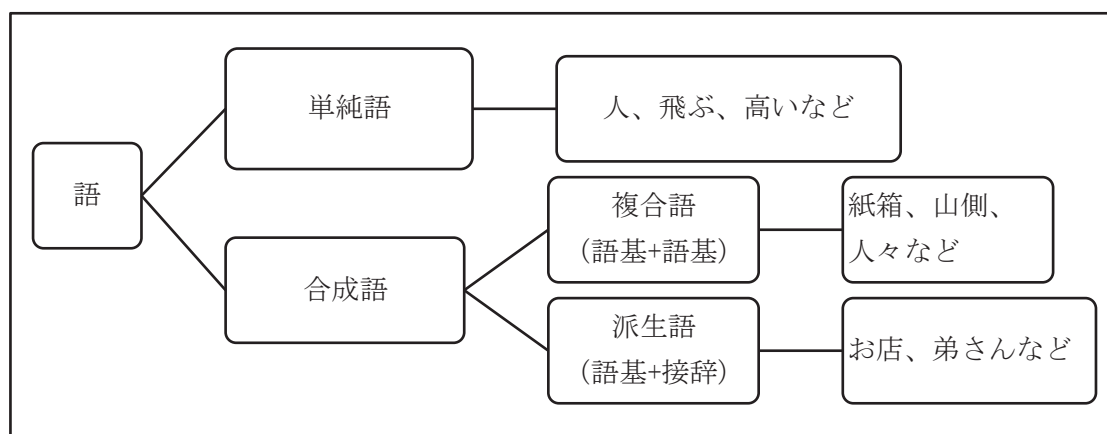


図1 語構成と語の種類（玉村 2005:87 を参考にして筆者が作成した）

図1に示すように、複合語には「紙箱」のように前項と後項の要素が異なっているものと、

<sup>9</sup> 日本語の「青」に対応する中国語の色彩語は“藍 (lán)”、“青 (qīng)”、“绿 (lǜ)”があるが、本論文では、時（2015）を参考にし、畳語のバリエーションが最も豊かである“绿 (lǜ)”を対象とする。詳細は1.3.3 研究方法と研究対象をご参照ください。

<sup>10</sup> 語基とは、共時的観点から見て語の意味的基幹になるもので、例えば「汗ばむ」「か弱い」「お酒」の下線部が語基である（田村2006:19）。

「人々」のように前項と後項の要素が同じものが含まれている。玉村（2005）では、「人々」、「国々」、「泣き泣き」、「ほのぼの」のように同一の語基を重ねてできている畳語は、前項と後項の品詞が一致すると指摘している。さらに、語基の品詞は名詞の場合が複数性を示し、語基の品詞は動詞の場合が動作の継続、反復を示すと述べている。

田村（2006）では、同じ形式が繰り返されているだけでは畳語とは認定できず、重複される前の形式が発話の中である意味を担っているということと、重複された後の形式の意味が重複前の意味と関連をもちつつも意味的に分化していることが条件づけられるとしている。よって、田村（2006）の定義では、意味をもたない要素が音声上繰り返されている擬音語及び擬態語は畳語に含まれていないことになる。

基本色彩語の「白」、「黒」、「赤」、「青」には「白々」、「黒々」などのような畳語がある以外に、「白々しい」、「黒々しい」などのような畳語もある。「白々しい」、「弱々しい」、「たどたどしい」などのような語については、研究者によって名付けが異なっている。まず、飯田（2005）、荒川（2006）、田（2014）では、「白々しい」、「弱々しい」、「たどたどしい」などのような語に焦点を当てて、これらの語を重複形容詞と名付けるが、晋（1995）、田（2014）では、これらの語を畳語形容詞と称する。それに対し、田村（2006）、沖森（2012）、大里（2013）では、「白々しい」、「弱々しい」、「たどたどしい」などのような語に、「白々」、「黒々」などのような語を加えて、重ねて形成するものを包括的に畳語と名付けて考察を行った。

以上の先行研究を踏まえ、本論文で取り扱う研究対象は「白々」、「白々しい」のような基本色彩語であるため、沖本（2012）と大里（2013）の畳語定義を参考に、本論文における畳語とは、語の要素を2回繰り返してできた語のことであり、複合語の一種であると定義し、論を進めていく。

次に、本論文で取り扱う中国語の畳語についてみる。朱（1995）、田（2014）では、すべての語は形態素から構成されているとみなすことができる。1つの形態素によって構成された語を単純語と呼び、2つまたはそれ以上の形態素から構成された語を合成語と呼んでいる。現代中国語の合成語の構成方法には重畳、付加、複合という3つの大きなタイプが存在する。まずは同じ語を重ねる重畳という造語法を用いて作られた合成語を重畳語という。そして、語根であ

る“我<sup>11</sup>(wǒ)、桌<sup>12</sup>(zhuō)、酸<sup>13</sup>(suān)”に接辞である“们<sup>14</sup>(men)、子<sup>15</sup>(zi)、性<sup>16</sup>(xìng)”を付け加えるという造語法を用いて作られた合成語を派生語という。また、2つまたは2つ以上の語を組み合わせる複合という造語法を用いて作られた合成語を複合語という。以上で述べたように、語の種類は図2のように分類できる。

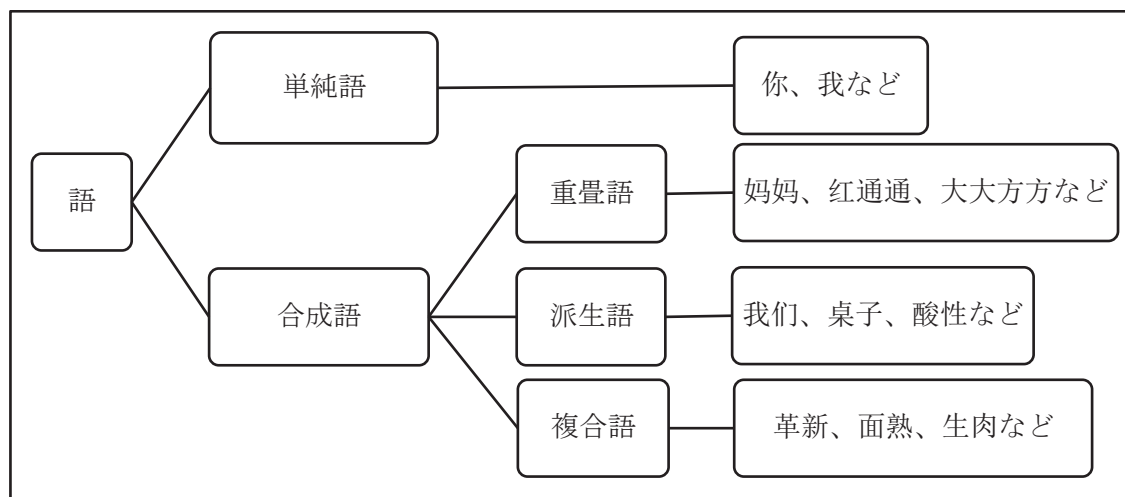


図2 語構成と語の種類<sup>17</sup> (朱 1995 : 22-38 を参考にして筆者が作成した)

合成語である重疊語は日本語の疊語と同様に、2つまたは2つ以上の語が形成されたものである。重疊語はAA型、AAB型、ABB型、AABB型などの疊語パターンに分けられる。基本色彩語の疊語では、AA型、ABB型、AABB型という3つのパターンが見られる。単純語“白(bái)”を例として説明する。語基である“白(bái)”を繰り返すと“白白<sup>18</sup>(bái bái)”というAA型が生じる。語基である“白<sup>19</sup>(bái)”を接辞“茫茫<sup>20</sup>(máng máng)”に付け加えると“白茫

<sup>11</sup> 「私。」(筆者訳)

<sup>12</sup> 「机。」(筆者訳)

<sup>13</sup> 「酸っぱい。」(筆者訳)

<sup>14</sup> 「たち。」(筆者訳)

<sup>15</sup> 意味がない接辞であり、名詞の後ろに付け加える。

<sup>16</sup> 「性質。」(筆者訳)

<sup>17</sup> 図2では、“你(nǐ)”は「あなた」、「我(wǒ)」は「わたし」、「妈妈(mā mā)」は「お母さん」、「红通通(hóng tōng tōng)」は「赤々」、「大大方方(dà dà fāng fāng)」は「落ちついて上品」、「我们(wǒ men)」は「わたしたち」、「桌子(zhuō zi)」は「机」、「酸性(suān xìng)」は「酸性」、「革新(gé xīn)」は「改良し新しくする」、「面熟(miàn shú)」は「見覚えがある」、「生肉(shēng ròu)」は「生の肉」である(筆者訳)。

<sup>18</sup> 「白白。」(筆者訳)

<sup>19</sup> 「白。」(筆者訳)

<sup>20</sup> 「ぼんやりしてはつきりしない。」(筆者訳)

茫 (bái máng máng)” という ABB 型が形成される。AABB 型は“明白<sup>21</sup> (míng bái)”、“清白<sup>22</sup> (qīng bái)” を繰り返すと“明明白白<sup>23</sup> (míng míng bái bái)”、“清清白白<sup>24</sup> (qīng qīng bái bái)” のように語基の構造は2字語彙となり、慣用句的な四字熟語として使用されている。本論文では、同一語基の基本色彩語と同一語基、かつ繰り返しである基本色彩語の関連性を考察するため、「A→AA→ABB」という体系的な形式が相応しいと考え、AABB 型は本論文の研究対象外とする。

以上の考察により、日中両言語における基本色彩語の疊語は複数の形式を持っていることが分かった。本論文では、日中両言語における基本色彩語とその疊語を研究対象とし、語間の意味関係を体系的に論じると同時に、同じ語基を持つ基本色彩語が背景に存在する話者の認知プロセスとどのように関わっているのかを明らかにする。基本色彩語の疊語は大きく同一語基を繰り返すものと、同一語基に後接する接辞を付け加えるものに分けられる。具体的に、日本語の「白々」、「黒々」、「赤々」、「青々」と中国語の“白白 (bái bái)”、“黒黒 (hēi hēi)”、“紅紅 (hóng hóng)”、“緑緑 (lǜ lǜ)” は同一語基を繰り返すものに属している。それに対して、日本語の「白々しい」、「黒々しい」、「赤々しい」、「青々しい」と中国語の“白茫茫 (bái máng máng)”、“黒圧圧 (hēi yā yā)”、“紅彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)” は同一語基に後接する接辞を付け加えるものに属している。

「量の類像性<sup>25</sup>」の観点から見ると、反復の記号表現とそれが表す意味内容との関係が恣意的ではない(野呂 2016 : 20-23)。本論文は形式上の類像性の観点に基づき、同一語基を繰り返すものと同一語基に後接する接辞を付け加えるものを研究対象とし、表される意味に何らかの規則が存在することを究明する。

### 1.3.3 研究方法と研究対象

以上概観してきたように、諸先行研究では主に、色彩語または疊語に焦点を置いて論じた。「白・白い・白々・白々しい」といった基本色彩語とその疊語を体系的に捉える視点が欠けて

<sup>21</sup> 「あきらかで疑う余地のないこと。」(筆者訳)

<sup>22</sup> 「品行方正である。」(筆者訳)

<sup>23</sup> 「はっきりしているさま。」(筆者訳)

<sup>24</sup> 「品行が正しくきちんとしているさま」(筆者訳)

<sup>25</sup> 1.1 節で述べたように、野呂 (2016) では、「言語形式と意味内容が何らかの類似性を示すという類像性には様々な例が見られる」と述べている。例えば、「山々」、「人々」のように名詞が指す対象が相当数存在し、「拭き拭き」、「食べ食べ」のように事態が相当回数反復することを表す。



いる。本論文は、辞典とコーパスを用い、日中両言語における「白」、「黒」、「赤」、「青」といった基本色彩語とその畳語について具体的な言語の使用実態を調べ、パターン化を試みる。また、使用実態に反映されている日中両言語における基本色彩語とその畳語の形式と意味との間との間に何らかの類像性を考察する。

同一語基で、かつ繰り返しの形式上の類像性という形式に結びついた意味が基本色彩語とその畳語の意味にどのように関わっているかを解明するため、辞典における基本色彩語とその畳語の意味記述を調べ、カテゴリー化を分類する。使用した辞典は、『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）、『現代漢語詞典第7版』（2016）である。また、データの偏りなどを考慮し、大規模なコーパスを利用し、生の言語使用の実態をパターン化し、言語の背景にある動機付けを導き出そうとする。

以上のことを踏まえ、本論文は日本語のコーパスとして『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『筑波ウェブコーパス』を利用し、中国語のコーパスとして『現代漢語平衡語料庫』と『北京大学中国语言学研究中心 CCL 语料库检索系统』を利用する。コーパスの詳細は下記のようにまとめられる。

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス<sup>26</sup>』（BCCWJ）

国立国語研究所が公開している『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）は、書籍、新聞、ブログ、国会会議録、教科書などの13ジャンルにまたがって、約1億語のデータを収集した書き言葉均衡コーパスである。

- 『筑波ウェブコーパス<sup>27</sup>』（NINJAL-LWP for TWC）

筑波大学が公開している『筑波ウェブコーパス』（NINJAL-LWP for TWC）は、日本語のウェブサイトから収集して構築した約11億語のコーパスである。

- 『現代漢語平衡語料庫<sup>28</sup>』（Academia Sinica Balanced Corpus of Modern Chinese）

中央研究院が公開している『現代漢語平衡語料庫』（Academia Sinica Balanced Corpus of Modern Chinese）は、現代中国語のデータ（約1900万）と古代中国語のデータ（約1億）からなっている均衡コーパスである。コーパスの特徴として、品詞のタグ付け検索ができる。また、検索ツールがあり、検索結果がテキストファイルでダウンロードできる。

---

<sup>26</sup> 以下『BCCWJ』と称する。

<sup>27</sup> 以下『NLT』と称する。

<sup>28</sup> 以下『CMC』と称する。



● 『北京大学中国语言学研究中心 CCL 语料库检索系统<sup>29</sup>』(Center for Chinese Linguistics PKU)

北京大学漢語語学研究中心が公開している CCL コーパスは、文学、翻訳作品、応用文などのジャンルにまたがって、現代中国語（約 5 億）と古典中国語（約 2 億）から構成される大型言語コーパスである。共起関係や文法的振る舞いなどは自動的に表示できないが、抽出したデータを手作業で行うことが必要である。

上記のコーパスを用い、本論文のデータを抽出する。まず、日本語のデータは『BCCWJ』を使用する。中納言の検索機能は 3 つあり、それぞれ短単位検索、長単位検索、文字列検索である。その 3 つの中で、短単位検索を利用し、言葉の形態的側面に焦点をあてる。畳語の品詞はバリエーションが豊かで、名詞や副詞や形容詞など様々であるが、品詞が異なっても、重複構造は一致する。しかし、現段階では、中納言において畳語の繰り返し構造を設定し、検索することはできない。研究対象を抽出するためには、短単位検索の機能を使い、語彙素を「白々」または「白々しい」のように設定し、畳語を抽出する必要がある。そして、コーパスから得られた各基本色彩語の畳語のデータをエクセルファイルで読み込み、エクセルファイルのデータベース機能を利用して手作業で取り除き、分析可能なデータを整理する。抽出されたデータの中には、2 字畳語以外に「明々白々」のような四字熟語や色彩とまったく関係ない人名や固有名詞があるため、これらは除外する。以上の手順で抽出した基本色彩語の畳語「白々」は 106 例、「黒々」は 231 例、「赤々」は 107 例、「青々」は 184 例である。基本色彩語の畳語「白々しい」は 77 例、「黒々しい」は 0 例、「赤々しい」は 2 例、「青々しい」は 2 例である。整理したデータは表 5 のようにまとめられる。

表 5 『BCCWJ』から抽出した日本語の研究対象

対象	白々	黒々	赤々	青々
用例数	106	231	107	184
対象	白々しい	黒々しい	赤々しい	青々しい
用例数	77	0 <sup>30</sup>	2	2

<sup>29</sup> 以下『CCL』と称する。

<sup>30</sup> 『BCCWJ』を検索したところ、「黒々しい」の用例が見つからなかった。6.3 節では、「Yahoo! JAPAN」から実例を収集することとする。詳細は 6.3 節で論じる。

一方、中国語の場合、表5で見られた日本語の色彩語は、中国語においても同じく使用される。日本語の「白」、「黒」、「赤」、「青」は中国語の“白 (bái)”、“黒 (hēi)”、“紅 (hóng)”、“緑 (lǜ)”<sup>31</sup> と対応している。朱 (1995) では、中国語の“白 (bái)”、“黒 (hēi)”、“紅 (hóng)”、“緑 (lǜ)” はいずれも単音節であり、単音節からなる疊語はAA型、ABB型、AABB型などのパターンが挙げられている。母語話者の使用実態が反映される『CCL』では、条件付きの機能が設定できないため、検索のところに手作業で入力し、用例を抽出した。表6は、時 (2015) を参考にし、『CCL』から“白 (bái)”、“黒 (hēi)”、“紅 (hóng)”、“緑 (lǜ)” を語基とする基本色彩語の疊語を抽出したものであり、下記のようにまとめた。

表6 中国語における基本色彩語の疊語

AA型	白白	黒黒	紅紅	緑緑
ABB型	白茫茫、白花花、 白皑皑、白晃晃、 白蒙蒙、白乎乎、 白苍苍。	黒圧圧、黒洞洞、 黒乎乎、黒黝黝、 黒漆漆、黒油油、 黒茫茫。	紅彤彤、紅扑扑、 紅艳艳、紅通通、 紅乎乎、紅光光。	緑油油、緑茵茵、 緑莹莹、緑茸茸、 緑森森。

表6に示すように、“白 (bái)”、“黒 (hēi)”、“紅 (hóng)”、“緑 (lǜ)” を語基とする基本色彩語の疊語が挙げられる。基本色彩語の疊語AA型は単一であり、ABB型は複数であることが分かる。ABB型の研究対象を絞るため、『CCL』での使用頻度を調べてみる。

まず、“白 (bái)” を語基とするABB型の使用頻度は白茫茫(365<sup>32</sup>)、白花花(362)、白皑皑(56)、白晃晃(55)、白蒙蒙(27)、白乎乎(11)、白苍苍(4)となっている。そして、“黒 (hēi)” を語基とするABB型の使用頻度は黒圧圧(482)、黒洞洞(328)、黒乎乎(327)、黒黝黝(300)、黒漆漆(221)、黒油油(58)、黒茫茫(22)となっている。また、“紅 (hóng)” を語基とするABB型の使用頻度は紅彤彤(208)、紅扑扑(165)、紅艳艳(163)、紅通通(91)、紅乎乎(5)、紅光光(1)となっている。“緑 (lǜ)” を語基とするABB型の使用頻度は緑油油(405)、緑茵茵(97)、緑莹莹(40)、緑茸茸(31)、緑森森(8)となっている。

本論文では、AA型の“白白 (bái bái)”、“黒黒 (hēi hēi)”、“紅紅 (hóng hóng)”、“緑緑 (lǜ lǜ)”、

<sup>31</sup> 日本語の「青」に対応する中国語の色彩語は“藍 (lán)”、“青 (qīng)”、“緑 (lǜ)”があるが、本章では、時 (2015) を参考にし、疊語のバリエーションが最も豊かである“緑 (lǜ)”を対象とする。

<sup>32</sup> かつこの中で『CCL』で観察された使用数を表す。

ABB型の中で最も高い使用頻度の“白茫茫 (bái máng máng)”、“黑压压 (hēi yā yā)”、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”を対象とし、次の手順でデータを抽出する。まず、各色のデータをエクセルファイルで読み込み、エクセルファイルのデータベース機能を利用して手作業で取り除いて、分析可能なデータを整理する。そして、抽出されたデータの中には、2字疊語以外にAABBの“红红绿绿 (hóng hóng lǜ lǜ)”のような四字熟語や色彩とまったく関係ない人名や固有名詞があるため、これらは除外する。

以上の手順で抽出した基本色彩語の疊語AA型の“白白 (bái bái)”は1,817例、“黑黑 (hēi hēi)”は564例、“红红 (hóng hóng)”は732例、“绿绿 (lǜ lǜ)”は50例である。基本色彩語の疊語ABB型の“白茫茫 (bái máng máng)”は353例、“黑压压 (hēi yā yā)”は482例、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”は202例、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”は398例である。整理したデータは表7のようにまとめられる。

表7 『CCL』から抽出した中国語の研究対象

対象	白白	黑黑	红红	绿绿
用例数	1,817	564	732	50
対象	白茫茫	黑压压	红彤彤	绿油油
用例数	363	482	202	398

以上述べてきたことをまとめると、本論文で取り扱う日中両言語における基本色彩語の疊語は表8の通りである。

表8 本論文の研究対象（日中両言語における基本色彩語の疊語）

日本語	白々	黒々	赤々	青々
	白々しい	黒々しい	赤々しい	青々しい
中国語	白白	黑黑	红红	绿绿
	白茫茫	黑压压	红彤彤	绿油油

## 1.4 本論文の構成

本論文は、認知言語学のアプローチに基づき、同一語基で、かつ繰り返しの形式が表される意味に何らかの類似性が反映した日中両言語における同一語基を持つ基本色彩語を考察し、疊語化という概念がどのように言語表現として立ち現れるかを明確にする。また、語間の意味関係を提示すると同時に、同じ語基を持つ基本色彩語が背景に存在する話者の認知プロセスとどのように関わっているのか、すなわち外部世界と言語主体との関係を明らかにする。上記の目的に基づき、7章に分けて論述を展開する。以下では、各章の具体的な内容について述べる。

### 第1章 序論

第1章では、序論であり、本論文の研究背景、研究目的と研究課題、用語定義と研究方法、本論文の構成について述べる。

### 第2章 先行研究

第2章では、本論文に関連する先行研究について、その研究及び成果、またその問題点などを述べる。まず、色彩語に関する先行研究を概観する。次に、疊語に関する先行研究を検討する。最後に、先行研究のまとめと本論文の位置づけを論じる。

### 第3章 理論的枠組みと本論文の視点

第3章では、本論文で用いられる認知意味論、スキーマ、プロトタイプ、拡張事例、五感を介しての外界認知と相互作用の概念を説明する。また、本論文の視点と主張を述べる。

### 第4章 日中両言語における基本色彩語の疊語の使用実態

第4章では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)、『北京大学中国语言学研究中心语料库检索系统：网络版』(CCL)などに現れた基本色彩語の疊語の特徴を分析する。コーパスから収集したデータを対象とし、出現頻度に基づく量的分析を行う。また、量的分析を補う形で、辞典を用いて検証し、コーパスで見られる文法機能や共起語などを考慮に入れた質的分析を行う。

### 第5章 相互作用による日中両言語における基本色彩語の疊語の特徴

第5章では、まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)と『北京大学中国语言学研究中心语料库检索系统：网络版』(CCL)から、日中両言語における基本色彩語の疊語と共起する名詞を抽出する。次に、『分類語彙表』の分類項目に基づき、それぞれ基本色彩語の疊語と共起する名詞を分類する。最後に、「相互作用」という概念を用いて、日中両言語における基本

色彩語の豊語が事物を描写する際の特徴を明らかにする。

## **第6章 視覚を介した基本色彩語とその豊語の意味関係及び認知プロセス**

第6章では、事物の様子、在り方を描写する表現の中で基本色彩語の基本形式とその豊語の意味関係とその背景にある認知プロセスに焦点を絞り、分析する。そして、日本語母語話者と中国語母語話者が持っている認知プロセス特徴を明らかにする。

## **第7章 本論文の総括**

第7章では、第4章から第6章まで行ってきた日中両言語で見られる同一語基で、かつ繰り返しの言語形式と意味内容との間に類像性に関する議論をまとめる。そして、今後の課題を述べる。

## 第2章 先行研究

本章では、本論文に関連する先行研究について、その研究及び成果、またその問題点などを見る。2.1節では、色彩語に関する先行研究を論じる。2.2節では、畳語に関する先行研究を述べる。2.3節では、先行研究のまとめと本論文の位置づけを述べる。

### 2.1 色彩語に関する研究

色彩語に関する研究には、色彩名詞と色彩形容詞の対立を中心に論じたもの（沢田 1992、藤村 2003）があり、日中両言語における色彩語を考察したもの（郭 2014、蘇 2013）がある。

#### 2.1.1 機能・意味・使用に関する先行研究

色彩語に関する研究には、沢田（1992）、藤村（2003）がある。以下、順に見ていく。

沢田（1992）は、機能論的観点に基づき、語基を持つ色彩名詞と色彩形容詞の対立を情報伝達上の機能の違いと捉えている。その違いは「指定」と「非指定」という伝達レベルでの対立概念であると述べている。その対立概念を以下に引用する。

「指定」とは、あるセットの中から特定のものを選び出し、指し示すこと、選択範囲が背景的知識（文化、文脈、場面）として話し手と聞き手の間で了解されていることを前提としている。端的に言えば、二者択一の「どっち？／どっちの？」という疑問詞によって引き出される回答は「指定」ということになる。「非指定」とは、限られた選択項目の中から一つを選び出して、相手に伝えるという目的の下にその語を運用するのではなく、単にそのモノの様態として伝達する。端的に言えば、「どんな？」という疑問詞によって引き出される回答は「非指定」ということになる。

（沢田 1992:2）

沢田（1992）は、上記の伝達目的に着目した「指定」と「非指定」という概念を用いること

で、色彩名詞と色彩形容詞の使い分けは容易に説明できると考えている。まず、色彩名詞の情報伝達上の機能を説明する。例えば、「今、信号は赤だ。」とは言えるが、「\*今、信号は赤い。」とは言えない。信号の色は瞬間的な可変性があり、その色は赤、青、黄色の3色である。話者が「今」という特定の時点に限定された信号の色に言及する時、この3色のうちのどれかを問題にしていることになる。つまり、この発話文の伝達目的は、どの色かを指定することである。この場合は色彩名詞である「赤」は「指定機能」を有するとしている。

それに対して、色彩形容詞の情報伝達上は異なる機能を表す。例えば、「雪が冷たくて、白い。」とは言えるが、「??雪が冷たくて、白だ。」とは言えない。それは、「白い」が雪という指示物の色彩に関して、本質的及び必然的な属性として引き出されており、描写されているからである。この場合は色彩形容詞である「白い」は「非指定」の描写、限定機能を有するとしている。以上見てきたように、沢田（1992）は、色彩名詞には「指定機能」があり、色彩形容詞には「非指定機能」があるため、この違いをもとに、色彩名詞と色彩形容詞が使い分けられていると主張している。

しかし、藤村（2003）は、名詞を修飾する場合の使い分けに関しては、沢田（1992）が主張している情報伝達の機能の違いだけで全ての現象を説明することは困難であると指摘している。以下では、「指定機能」を果たさない色彩名詞の例（1）と、「指定機能」が求められる文脈においても色彩名詞の使用が不自然な場合の例（2）を挙げて説明する。

- (1) 母京子さんは18日午後、家族や近所の人たちと初めて遺体発見現場を訪れた。黒の喪服姿の京子さんは、やつれ切った表情で終始無言だった。（藤村2003:29）
- (2) ??黒の毛は抜かないで。??白の毛だけを抜いてね。（藤村2003:29）

藤村（2003）では、喪服の色は、日本語のコンテキストにおいては「黒」に決まっているため、「黒の喪服」という選択が、(1)において、「白」やその他の色と解釈することはできないとしている。また、(2)において、明らかに「黒」と「白」の間で色の選択があり、情報伝達上は「指定」が行われているが、人間の自然な頭髪を「黒の毛」や「白の毛」と言うのは不自然であると述べている。以上の考察から、藤村（2003）は、色彩名詞と色彩形容詞の違いを再検討する必要があると考え、コーパス<sup>33</sup>に基づく実際の用例を様々な角度から分析し、色彩名

<sup>33</sup> 文学データ（「新潮文庫の100冊」のうち、1950年以降に発行されたもの42作品。外国語からの翻訳作品と、田辺聖子「新源氏物語」を除く）と新聞データ（毎日新聞1999年の前半文）を使用する（藤村2003:29）。



詞と色彩形容詞の差異が生まれるメカニズムを説明する。

藤村 (2003) は、意味の基準に従い、色彩名詞と色彩形容詞の被修飾名詞<sup>34</sup>は大きく表1のよ  
うな5種類に分類できると述べている。

表1 被修飾名詞の意味特徴 (藤村2003をもとに筆者が作成した)

①自然 (無着色のもの) : 人間、身体、環境、自然、植物、食物、材 料、動物、肉体、火・影・光・闇を表す名詞	例 : 顔、目、瞳、肌、歯、髪、唇、息、血、空、 海、山、土、石、雲、雨、雪、岩、火、 液体、しみ、虹、花、鳥、煙、影など
②人造物・衣服 (人工着色されたもの) : 衣 服、人造物、灯を表わす名詞	例 : シャツ、Tシャツ、ズボン、背広、服、帽 子、セーター、スーツ、トレンチコート、 ジャンパー、帯、紙、旗、壁、布、リボン、 灯など
③2次元的形状	例 : 線、斑点、点、文字など
④不定名詞	例 : もの、の、部分、かたまりなど
⑤着色剤	例 : インク、ボールペン、染料など

調査した結果から見ると、色彩名詞は「人造物・衣服」といった意味特徴を持つ被修飾名詞  
と共起しやすい傾向が見られる一方、色彩形容詞は「自然」といった意味特徴を持つ被修飾名  
詞と共起しやすい傾向が見られる。また、ジャンルから色彩名詞と色彩形容詞の差異も考察し  
た。色彩名詞は新聞データにおいてよく使用されており、色彩形容詞は文学データにおいてよ  
く使用されている。藤村 (2003) は、その違いについて、文学と新聞で使われる言語行為の目  
的が異なり、取り扱う情報の質が異なるからであると考えている。具体的には、新聞の目的は、  
正確、理性的に情報を伝達することであるため、色彩名詞の出現傾向が強い。それに対して、

<sup>34</sup> 非修飾名詞とは、色彩表現の直後にくるもののみならず、不連続なものも研究対象にする。例えば、「白い  
一枚の布」のようなものである (藤村2003:31)。

文学の目的は、読者の感性と想像力を喚起させることであるため、色彩形容詞の出現傾向が強いと説明している。

上述したように、藤村 (2003) は、色彩形容詞は恣意的で文脈ごとに指示対象の色が変化し、文学で用いられやすいものであり、色彩名詞は意図的で指示対象の色が安定しており、新聞で用いられやすいものであることが分かった。そして、色彩名詞と色彩形容詞の対立的な特徴として、色彩名詞はデジタル的であり、色彩形容詞はアナログ的であると提言している。

### 2.1.2 色彩語に関する日中対照研究

日中両言語における色彩語を研究したものには蘇 (2013)、郭 (2014) がある。

郭 (2014) は、日本語と中国語における色彩語を帯びる慣用表現のグループ分けを行い、色彩語のイメージの差異を比べながら、その背景にある文化面の差異を探った。郭 (2014) は、三浦 (1996) を参考にし、『古事記』、『日本書紀』、『風土記』などに現れる色名は「白」、「黒」、「赤」、「青」の4色に絞って考察を行った。そして、現代中国語における色彩語の使用範囲や頻度を考慮し、日本語と共通する“红 (hóng)”、“黒 (hēi)”、“白 (bái)”、“绿 (lǜ)”<sup>35</sup>を研究対象とし、対照研究を行った。以下は、郭 (2014) が考察した研究結果を色ごとにまとめたものである。

まず、「白」が表せるイメージは大きく2つに分けられる。1つは、清潔或いは高尚なイメージであり、明るいイメージである。日本語の慣用表現にも「色の白いは七難を隠す」があるが、「一白遮百丑<sup>36</sup> (yī bái zhē bǎi chǒu)”という中国語の俗語に極めて似ている (郭2014:128)。これにより、日中両言語における「白」のイメージがほぼ共通だと述べている。もう1つは、何もないまま、努力や代償とは関係ない結果になる、何もなくて役に立たない状態を表しているイメージである。具体的に“白搭<sup>37</sup> (bái dā)”、“白费<sup>38</sup> (bái fèi)”といった用法は中国語のみに見られる用法である。

次に、日中両言語における「黒」については、「悪」、「不吉」、「死」といった象徴として使わ

---

<sup>35</sup> これらの4色は『北京大学中国语言学研究中心语料库检索系统：网络版』(CCL) やインターネットに掲載された記事などから収集したデータである。

<sup>36</sup> 「肌が白いだけで、他の悪いところを隠してしまう」という意味を表す。

<sup>37</sup> 「無駄」と訳す (郭2014:127)。

<sup>38</sup> 「無駄になる」と訳す (郭2014:127)。

れる点で類似している。そして、中国語の“黒 (hēi)”で表せる「否定的なイメージ<sup>39</sup>」という意味が多いと述べているが、日本語の慣用表現について特に言及していない。

それから、日中両言語における「赤」については、「危険」、「警告」、「めでたい」「女性」などのイメージにはほぼ共通している。日本語の「赤」で表せる意味は中国語にはほぼ存在する。しかし、中国語の“紅 (hóng)”で表せる「成功する、人気がある<sup>40</sup>」という意味は日本語には存在しない。

最後に、日中両言語における「青」については、「生命力」、「若々しい」、「健康」などのイメージにはほぼ共通している。環境に優しいもの、あるいは、健康なものというイメージについては、中国語では、“緑 (lǜ)”を使う。日本語では「青」でも「緑」でもなく、外来語の「グリーン」を使う。一方で、「青」で表せる「未熟」といったイメージは日本語のみに見られる。

上記の概観から、郭 (2014) は、色彩語に関する慣用表現は単なる語彙的な意味ではなく、その背後にある民族の思想や価値観に関連すると述べているが、具体的な説明はされていない。

次に、蘇 (2013) は、日本語の「白」、「黒」、「赤」、「黄色」と、中国語の“白 (bái)”、“黒 (hēi)”、“紅 (hóng)”、“黄 (huáng)”<sup>41</sup>の意味用法について分析した。色相の有無に基づき、色彩語の意味用法を「色を表す」、「色を表すと同時に別の意味をも表す」、「色を表さない」の3種類に分けている。以下では、「色を表すと同時に別の意味をも表す」、「色を表さない」を取り上げて説明する。

日中両言語における「白」については、「汚れがない」、「明るい」という「色を表すと同時に別の意味」がほぼ共通している。その他には、日本語と中国語におけるそれぞれ特有の用法があると指摘している。例えば、「白い服を着て無垢な状態」という「色を表すと同時に別の意味」が表せるのは日本語のみである。「白い服を着て弔う」という「色を表すと同時に別の意味」が表せるのは中国語のみである。「色を表さない」場合は、日中両言語ともに「何もない」という非存在を表す意味でほぼ共通している。しかし、その対象となる語や用法に多少の違いがあり、

<sup>39</sup> 無実のこと、事実ではないことを表す。例えば、“背黑锅 (bèi hēi guō; 濡れ衣を着られる)”、“黑状 (hēi zhuàng; 上告された無実の罪)”、“黑狱 (hēi yù; 冤罪のため入った刑務所)”が挙げられる (郭2014:126)。

<sup>40</sup> 人気があることや順調に発展すること、栄えることを表す。例えば、“走红 (zǒu hóng; 人気者になる)”、“红火 (hóng huǒ; 栄える)”が挙げられる (郭2014:127)。

<sup>41</sup> 中国語では、“白 (bái)”、“黒 (hēi)”、“紅 (hóng)”、“緑 (lǜ)”、“黄 (huáng)”が正色と呼ばれ、春秋戦国時代に形作られた最も基本的な色彩システムである。一方、日本では、「白」、「黒」、「赤」、「青」が固有の基本色名とされている。日本語の「青」は中国語の“藍 (lán)”だけでなく、多く中国語の“緑 (lǜ)”と歴史的に対応する。このように、両方とも複数の色を指しているため、簡単には比較できないと考えているため、「白」、「黒」、「赤」、「黄」の4色を選び、分析を進める (蘇2013:49)。

中国語のほうが日本語より広く使われている。例えば、“白吃白喝<sup>42</sup>(bái chī bái hē)”、“白干<sup>43</sup>(bái gàn)”などが挙げられる。

次に、日中両言語における「黒」については、「汚い」、「不潔」という「色を表すと同時に別の意味」がほぼ共通している。しかし、日本語の場合、その使用範囲は中国語より広く、「犯罪」、「容疑」などのイメージが含まれるが、中国語にはそのような意味用法はない。一方、中国語の「黒」には「暗い」、「夜」などの意味が含まれ、そういった慣用表現がよく見られる。「色を表さない」場合は、「腹黒い」などのように「不正」、「悪い」という意味用法は日本語にも中国語にも存在する。

日中両言語における「赤」については、「赤信号」などのように赤を用いて注意を促すという「色を表すと同時に別の意味」がほぼ共通している。「赤い服を着て祝う」、「赤く色付け料理する」という「色を表すと同時に別の意味」が表せるのは中国語のみである。「赤」を用いて「落第・不合格」、「俗悪・低級」、「安売り」という「色を表すと同時に別の意味」が表せるのは日本語のみである。「赤」を用いて「成功する」、「人気がある」、「運がつく」などの「色を表さない」用法は中国語ではよく使われるが、日本語ではほとんど用いられない。

日中両言語における「黄色」については、「嘴が黄色い」などのように黄色を用いて経験に乏しい、未熟であるという「色を表すと同時に別の意味」がほぼ共通している。「熟した農植物」、「扇情的な」という「色を表すと同時に別の意味」が表せるのは中国語のみである。また、「色を表さない」場合は、日中両言語における「黄色」に共通する表現がない。日本語には「黄色」を用いて「声が甲高い」とする表現があり、中国語には「黄色」を用いて「駄目になる」、「失敗する」という慣用表現がある。

上記の考察から分かるように、「色を表す」場合は、日中両言語における色彩語の区別があまりない。しかし、「色を表すと同時に別の意味をも表す」、「色を表さない」場合は、日中両言語における色彩語には相違が見出される。特に「色を表さない」場合は、日中両言語における色彩語の用法はかなり異なっている。それは、意味に色相が含まれている場合は、一般性が認められるが、色相から大きく乖離すればするほど、それぞれの言語固有の意味に転じる可能性が高いということが示唆される。

---

<sup>42</sup> 「ただ食いただ飲み」と訳す。中国語から日本語への訳文は全て筆者である。訳文は複数の母語話者によるネイティブチェックを受けている。以下同様。

<sup>43</sup> 「無駄な仕事」と訳す。

## 2.2 畳語に関する先行研究

畳語に関する研究は数多くあるが、管見の限りでは、色彩語の畳語を論じた先行研究はきわめて少ない。色彩語の畳語に関する研究には、意味や用法を中心に扱ったもの（禹 2015、石川 2017、荒川 2006）があり、日中両言語における畳語を考察したもの（譙 2000、田 2014）がある。

### 2.2.1 機能・意味・使用に関する先行研究

色彩語の畳語に関して機能、意味、用法を論じた研究には禹 (2015)、石川 (2017)、荒川 (2006) がある。以下、それぞれ概観していく。

禹 (2015) では、先行研究 (安藤 1935、秋元 2005、石井 2007) を踏まえ、日本語の畳語は <複数>、<反復>、<強調> の 3 つの意味用法にまとめられる。名詞は <複数>、動詞は <反復>、形容詞は <強調> を表わし、畳語の意味用法は単語の種類と密接な関係を持っていると述べている。

しかし、禹 (2015) の観点は、秋元 (2005) と石井 (2007) の (形容詞語幹の畳語形は <強調> の意味を表す) 分類とは異なり、形容詞語幹の畳語形以外にも強調の意味が存在することである。次の例を取り上げて説明する。

(3) a. 老婦人は慎重に言葉を選ぶ。「私は前々から、あなたを冷静で、論理的な考え方をする人だと思ってきました」

b. ふかえりは伴のかかっている玄関の戸をがらがらと開けて中に入り、天吾についてくるように合図した。二人を出迎えるものは誰もなかった。いやに広々とした静かな玄関で靴を脱ぎ、磨き上げられたひやりとした廊下を歩いて応接室に入った。

(禹 2015:34)

(4) a. 髪は薄くなりかけているが、顔立ちは若々しい。

b. 大型トラックが強力なヘッドライトを抜け目なく路上に光らせていた。その向こうにある海は泥のように黒々としていた。

(禹 2015:35)

禹 (2015) は (3) における「前々」、「広々」は、話者の事象、事物に対する、いわば<時空数量の強調>の現れであり、(4) における「若々しい」、「黒々」は、話者の事物の様子や在り方に対する、いわば<様態の強調>の現れだと解釈している。

上記の畳語に見られる<強調>の意味合いは、秋元 (2005) と石井 (2007) の指摘のように、単語の種類 (形容詞) によって決まるという解釈も出来なくはない。しかし、禹 (2015) では、それだけでは合理的な説明は得られず、安藤 (1935) の「繰返される周囲の對象が話者に強い印象を與へ、その強い印象は、音の反復、語の反復によって表現される<sup>44</sup>」という指摘を踏まえ、話者の主体的な観点から捉え直してみた。その結果は、<強調>は外界に対する話者の積極的な捉え方の反映であり、さらにそれを<時空数量の強調>と<様態の強調>とに分けられるとしている。

次に、石川 (2017) では禹、(2015) が指摘している畳語の<強調>に関して事物に関わる時空数量の強調と、事物の様子や在り方に関わる様態の強調を再考し、<時空数量の強調>も<様態の強調>の一種だと指摘している。以下、例 (5) を挙げて説明する。

- (5) a. 『東西南北』刊行で勢いを得た鉄幹は、その翌年一月には、早々と次の詩歌集『天地玄黄』を刊行。
- b. B級1組初年度の昨年度は8勝4敗で昇級レースに絡み、堂々の第4位を占めたのは偉い。

(石川 2017:71)

(5a) の場合は「早い」という状態の段階がさらに強められたものであり、2冊目の詩歌集を刊行するのに通例想定される時期よりもなおさら早く刊行がなされたことを示す。ここには、話者による主観的判断が含意されている。この意味で、<程度増加>、つまりは<強調>を外界に対する話者の積極的な捉え方とみなす禹 (2015) の見解は妥当である。一方、(5b) の場合は、「堂々」とは、「規模が大きく、また力強くてりっぱなさま」(『明鏡国語辞典第2版』2010 :

---

<sup>44</sup> 畳音・畳語が、どうして言語の上にはあらはれて来るかについては、種々の説明がつくが、それは印象の反復がその印象を強める結果になるといふことと関係を持つ。繰返される周囲の對象が話者に強い印象を與へ、その強い印象は、音の反復、語の反復によって表現される。すなわち、畳音・畳語の表現は、本来、強意的のものなのである (安藤 1935:9)。



1222) を表す語だが、これは、「堂（本殿、正殿）」の意味が拡張したものである。つまり、「堂」に典型的に見られるような特質（立派さ、力強さ）が顕現している状態を指していると考えられる（段階の変化は含意されていない）。これもまた、〈客観的な強調〉というよりは、〈話者の主観的な解釈〉に依拠している。

よって、石川（2017）は話者の主観的な解釈に基づき、〈時空数量の強調〉と〈様態の強調〉の意味機能は実質的には統一的に解釈でき、2種類に分類する必要はないと指摘している。

また、石川（2017）では、畳語の使用特性に関しては、白書では、紹介・解説される各種のデータの個別性を表す「個々」や「様々」、年次に関してその個別性を強調する「年々」、またデータの多様性を示す「種々」や「様々」といった一連の畳語が特徴的であり、新聞・雑誌では、時間的な概念を表す「次々」、「時々」などの畳語が特徴的であると述べている。さらに、畳語の後接可能な助詞を検証したところ、「NPは／がV」、「Aな／のNP」または「NPな／のNP」、「AvとVA」、「AvにVA」、助詞在介のない「AvVA」の接続パターンを示すと述べている。すなわち、畳語は主格名詞として機能すること、形容詞または所有を表す形容詞語句の一部として機能すること、副詞として機能することの3種類に分けられることが確認された。使用特性のみならず、畳語の表記形式は一般的に「漢字＋々」となっているとも指摘している。

次に、荒川（2006）では、「凜々しい」、「寒々しい」、「白々しい」などの形容詞シク型活用は感情形容詞に属する形容詞であり、もとの語基<sup>45</sup>が存在しており、意味上においては、主観的な感情または感覚を表すと主張している。そして、認知意味論に基づき、畳語<sup>46</sup>の意味をカテゴリーA〈派生語基の中心義<sup>47</sup>のみが感情形容詞の意味になっているもの〉、カテゴリーB〈派生語基中心義・転義の双方が感情形容詞の意味になっているもの〉、カテゴリーC〈派生語基の転義のみが感情形容詞の意味になっているもの〉の3つのカテゴリーに分けている。以下、カテゴリーごとに見ていく。

カテゴリーAの畳語は、派生元の中心義をそのまま踏襲し、「いかにもそのように感じられる」という意を表す。例えば、「凜々しい」は「凜とした様子が感じられる、きりりとひきし

---

<sup>45</sup> 荒川(2006)では「派生元」という用語を用いている。本論文では、特別な区別がない限り、同義の場合は「語基」という用語で統一して述べることとする。派生元の決定に当たっては、国語辞典に加えて吉田(2002)及び飛田・浅田(1999)を参考し、派生元の語は語根とはせず、単語として取り扱う(荒川2006:72)。例えば、「白々しい」の派生元は「白」であり、「痛々しい」の派生元は「痛い」である(荒川2006:72-73)。

<sup>46</sup> 荒川(2006)では「重複形容詞」という用語を用いている。

<sup>47</sup> 「中心義」とは瀬戸(2001)、小森(2002)が提唱する共時的な意味ネットワークの中心であり、母語話者の頭の中で中心的であると見られる意義である。(荒川2006:71)。



まっぴいて勇ましい感じである」という意味を表し、反復される語の中心義である様子が話者に感じられる意味になる。荒川（2006）では、カテゴリーAの疊語である「憎々しい」はgoogleで検索すると約37,600例に上るが、「とても憎々しい」を検索すると、わずか10例に過ぎない<sup>48</sup>。

カテゴリーBの疊語は、派生元の中心義を表すとともに、同時に派生元の転義の意味を話者に感じさせるという意を表す。例えば、「寒々しい」は、形容詞「寒い」を派生元とし、この語幹「寒」を重ねて疊語になったものである。「寒い」は「気温が低いため皮膚に不快な刺激を感じる」意であり、「寒々しい」は「いかにも寒そうな感じである」の意で用いられるが、同時に「取り立てて評価すべきものが見られない」意にも用いられる。これは季節が冬に向かうと、木の葉や草が枯れ果て、視界に入る目立つものが少なくなることを身体経験とする転義である。

カテゴリーCの疊語は、派生元の中心義を表さず、派生元の転義の意味を話者に感じさせるという意を表す。例えば、「白々しい」は名詞「白」を派生元とし、これを重ねて疊語になったものである。「白」は「太陽光線をすべて反射したときのような色。雪のような色。」の意であるが、「白々しい」は「いかにも白のように感じられる」の意ではなく、「真実でないことが見え透いている。」意である。

荒川（2006）の考察結果から分かるように、反復によって表現される疊語は話者の主体的な観点から捉え直してみると、疊語は＜強調＞以外に、外界に対する話者の積極的な捉え方にも反映され、意味拡張が行われていることである。

## 2.2.2 疊語に関する日中対照研究

疊語に関する日中対照研究には譙（2000）、田（2014）がある。以下、逐次に見ていく。

譙（2000）は『岩波日中辞典』（1983）と『岩波中国語辞典』（1983）を使い、日中両言語における疊語名詞<sup>49</sup>の構造、機能と意味の相違点を考察した。まず、日中両言語における疊語名詞はどのような成分から成り立っているかを比較した。『岩波日中辞典』（1983）から抽出した日本語の疊語名詞の成分を見ると、名詞成分（47語）、動詞成分（2語）、象徴語基成分<sup>50</sup>（4語

<sup>48</sup> 荒川（2006）では、反復が意味の強調に動機づけられているため、強調を示す副詞とは共起しにくいと指摘されているが、カテゴリーBとCについては言及されていない。

<sup>49</sup> 疊語名詞とは成分が重複し、名詞の資格を持つものを指す（譙2000:81）。

<sup>50</sup> 擬音・擬態語のことを指す。

<sup>51)</sup> の3種類にまとめられる。そして、『岩波中国語辞典』(1983) から抽出した中国語の疊語名詞の成分を見ると、名詞成分(58語)、動詞成分(1語)、象徴語基成分(1語<sup>52)</sup>)の3種類にまとめられる。名詞成分では、日本語の「猩々」と中国語“蚩蚩<sup>53</sup> (qū qū)”のような単独では用いられない疊語名詞が見られ、他の複合語の構成成分にもなり得ないものがある。また、中国語の動詞成分“混<sup>54</sup> (hùn)”からなる疊語“混混<sup>55</sup> (hún)”は、“儿(-r)”がつくと、動詞としての動きを失い、名詞に転化する。同じように象徴語基成分の中国語疊語“哈哈(hā hā)”は“哈哈儿(hā har)”となり、「おもしろいこと」、「大笑いのたね」というような名詞としての意味を持つ。さらに、4字疊語の中には、“老少<sup>56</sup> (lǎoshào)”、“男女<sup>57</sup> (nán nǚ)”という原形があって、それから“老老少少<sup>58</sup> (lǎo lǎo shào shào)”、“男男女女<sup>59</sup> (nán nán nǚ nǚ)”を派生したものが見られる。一方、“家家户户<sup>60</sup> (jiā jiā hù hù)”、“种种样样<sup>61</sup> (zhǒng zhǒng yàng yàng)”などは“家戸(jiā hù)”、“种样(zhǒng yàng)”という語はない。それらはまず“家家<sup>62</sup> (jiā jiā)”、“戸戸<sup>63</sup> (hù hù)”などのように疊語をつくり、そしてこの2つの疊語が結合してできたものと見るべきである。類義語或いは対義の成分が組み合わさって、1つのまとまった意味を表していると説明している。

その次に、日中両言語における疊語名詞の機能についても考察を行った。以下では、例(6)を挙げて説明する。

- (6) a. 生前に接した人々は彼女の死を惜しんだ。  
 b. 同行の人々にも話した。  
 c. 同じ音楽でも、その時々の気分によって感じ方が違う。  
 d. 人人夸奖(誰もがほめる)。

<sup>51</sup> 例えば、「いらいら、ばらばら、ねばねば、ぶつぶつ」が挙げられる(譙2000:82)。

<sup>52</sup> 例えば、“哈哈儿(hā har; 面白いこと)”が挙げられる(譙2000:83)。

<sup>53</sup> 「コオロギ。」(筆者訳)

<sup>54</sup> 「混ざり合う、サポるなど。」(筆者訳)

<sup>55</sup> 「不良、ヤンキー。」(筆者訳)

<sup>56</sup> 「老いも若きも。」(筆者訳)

<sup>57</sup> 「男性も女性も。」(筆者訳)

<sup>58</sup> 「老いも若きも。」(筆者訳)

<sup>59</sup> 「男性も女性も。」(筆者訳)

<sup>60</sup> 「家ごと、軒並み。」(筆者訳)

<sup>61</sup> 「様々である。」(筆者訳)

<sup>62</sup> 「家ごと、軒並み。」(筆者訳)

<sup>63</sup> “家家(jiā jiā)”と同義語であり、「家ごと、軒並み。」(筆者訳)

- e. 家家都在欢庆春节 (どの家もみな楽しく新年を過ごしている)。  
f. 事事顺利 (万事順調である)。

(譙 2000:85)

例(6)のように、日中両言語における量語名詞は主語、修飾語などに立てる点では普通の名詞と同じ機能を持っている。しかし、普通の名詞とは違い、数量詞の修飾を受けることができないことが指摘されている。例えば、「30 人の人々」のような数が特定の数量詞と共起することはできないが、「数十人の人々」のような不確定の数を表す数詞と共起できる。

譙(2000)では、日本語の量語名詞は不確定の数詞と共起することができるため、<不特定多数>を表すとしている。しかし、以下では、不確定の数詞を用いる日本語の例を中国語に訳してみると、<不特定多数>を表せるかを考察した。

(7) 会場には数十人の人々が座っている (会场里坐着数十人)。 (譙 2000:86)

(8) 大勢の人々が彼を見舞いに来た (许多人来看望他了)。 (譙 2000:86)

(7)は「数十人」、(8)は「大勢」という不確定の数詞を用いる日本語である。しかし、その中訳を見ると、数詞と共起するのは量語名詞“人人(rén rén;人々)”ではなく、単一形の人(rén;人)”である。譙(2000)では、それは中国語の名詞単一形は複数を表すことができるわけであるとしている。以上の考察から、日本語の量語名詞は少し漠然とした数を表す数詞は付き得るため、<不特定多数>を表し、中国語の量語名詞は数量表現と共起しないと述べている。

次に、譙(2000)では『分類語彙表』を用い、日中両言語における量語名詞を表す意味を考察した。その結果、量語名詞の意味は「抽象的關係」、「時間」、「空間・場所・方面」、「数量・種類」、「人間活動の主体」、「人間活動」、「生産物」、「自然物・自然現象」にまとめられる。量語名詞の意味の分布状況は両言語においては、かなり異なっている。まず、日本語の量語名詞を表す意味の分布については、「時間」(16語、「年々」など)、「人間活動の主体」(15語、「人々」など)、「人間活動」(10語、「好き好き」など)、「空間・場所・方面」(9語、「所々」など)、「数量・種類」(9語、「数々」など)、「自然物・自然現象」(8語、「山々」など)、「抽象的關係」(6語、「元々」など)、「生産物」(2語、「品々」など)となっている。そして、中国語の

疊語名詞を表す意味の分布については、「人間活動の主体」(36語、「人人」(人々<sup>64</sup>)など)、「生産物」(8語、「兜兜」(腹掛け)など)、「数量・種類」(7語、「种种」(種々)など)、「抽象的關係」(5語、「等等」(等々)など)、「時間」(4語、「年年」(年々)など)、「空間・場所・方面」(4語、「里里外外」(内側も外側も)など)、「自然物・自然現象」(2語、「星星」(星)など)となっている。総括的に見ると、日本語では「時間」の分野に属する疊語名詞が16語であり、最も多いのに対して、中国語では「人間活動の主体」の分野に属する疊語名詞が36語もあり、大半を占めていることが分かる。

次に、田(2014)について見ていく。田(2014)は、日本語においても中国語においても、疊語は新しい単語を生産する重要な手段の1つであるとしている。田(2014)は、日中両言語における疊語「X々」と疊語形容詞「XXしい」の意味特徴、文法上の機能を考察した。考察結果は次のようにまとめられる。

まず、田(2014)では、日本語の疊語が数多く、名詞、代名詞、動詞、形容詞、形容動詞など、疊語にできない品詞がないと述べている。様々な品詞の中には、名詞、代名詞、数詞を重ねて複数を表すことで、品詞が変わったものもある。例えば、名詞の「色」を重ねてできた疊語「色々」は形容動詞としての「色々な洋服」、副詞としての「品種が色々とある」、名詞としての「色々な意味」などである。田(2014)では、日本語における疊語形容詞の構成要素が名詞である場合は事物の名前から事物の状態を表すように変わる「物(もの)→物々しい(ものものしい)」、動詞の場合は動作、行為から状態を表すように変わる「忌う(いもう)・忌ふ(いまふ)→忌々しい(いまいましい)」、形容詞の場合は事物の性質から人間の感情、感覚を表すように変わる「寒い(さむい)→寒々しい(さむざむしい)」としている。つまり、各品詞の語彙は疊語化することによって、意味の変化が見られると述べている。

そして、田(2014)は、現代中国語において文法上での特別な語構成手段の1つとして、名詞、形容詞、副詞、動詞などの疊語は多く見られると述べている。具体的には、現代中国語の疊語を形成するパターンは様々であり、AA型、ABB型、ABAB型、AABB型などがあり、単語が疊語になって生き生きしている状態が描写できるとしている。田(2014)は、中国語における疊語形容詞の構成要素は形容詞である場合が多く、形容詞を疊語化することにより副詞に転用され、意味の描写性を高める強調用法を表すことができると述べている。例として、単音節形容詞Aの“大<sup>65</sup>(dà)”からなるAA型の“大大(dàdà)”は「でっかい」という意味を表す

<sup>64</sup> 中国語訳は筆者による付け加えたものである。

<sup>65</sup> 「大きい。」(筆者訳)

ことが挙げられている。

田 (2014) では、疊語と疊語形容詞のような語彙は日本語でも中国語でも使用され、基本形式と疊語または疊語形容詞との間に何らかの意味関係があると指摘している。

## 2.3 先行研究のまとめと本論文の位置づけ

以上、ペアになっている基本色彩語の疊語を考察する前に、まず、色彩語や疊語に関する先行研究を概観してきた。

まず、藤村 (2003) では、名詞を修飾する場合の使い分けに関しては、沢田 (1992) が主張している情報伝達の機能の違いだけで全ての現象を説明することは難しいとしている。そこで、藤村 (2003) では、コーパスで見られる色彩名詞は新聞データにおいてよく使用されており、色彩形容詞は文学データにおいてよく使用されている。その傾向について、文学と新聞で使われる言語行為の目的と、取り扱う情報の質が異なるからであると説明している。

疊語の使用特性については、石川 (2017) は、白書では、紹介・解説される各種のデータの個別性を表す「個々」や「様々」、年次に関してその個別性を強調する「年々」、またデータの多様性を示す「種々」や「様々」といった一連の疊語が特徴的であり、新聞・雑誌では、時間的な概念を表す「次々」、「時々」などの疊語が特徴的であると述べている。さらに、疊語の表記形式は一般的に「漢字+々」となっていると述べているが、色彩疊語の表記形式も同様であろうかを検討することが必要だと思われる。また、先行研究では、疊語の形式のバリエーションが豊かである中国語とどのように対照しているのかについても触れられていない。これについて掘り下げて考察することが必要である。

石川 (2017) では、疊語の後接可能な助詞を検証したところ、「NPは／がV」、「Aな／のNP」または「NPな／のNP」、「AvとVA」、「AvにVA」、助詞在介のない「AvVA」の接続パターンにまとめられる。すなわち、疊語は主格名詞として機能すること、形容詞または所有を表す形容詞語句の一部として機能すること、副詞として機能することの3種類に分けられることが確認された。石川 (2017) では、日本語の色彩疊語を取り扱わなかったため、日本語の色彩疊語は同じような文法機能を持っているかが予測できない。

以上の考察を踏まえ、日中両言語における基本色彩語とその疊語の構造的特徴、文法機能、使用特性などについて研究する必要があると思われる。本論文では、諸先行研究で指摘している疊語の特徴と比較しながら、下記の手順に沿って課題を解決していく。まず、『現代日本語



書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)と『北京大学中国語学研究中心語料庫検索系統:ネットワーク版』(CCL)を利用し、日中両言語における基本色彩語と基本色彩語の疊語の使用実態(構造的特徴、文法機能、使用特性)を考察し、それぞれの特徴や相違点を明らかにする。詳細は第4章で論じる。

次に、禹(2015)は疊語の意味である<強調>が単に品詞的特性に起因するものではなく、外界に対する話者の積極的な捉え方の表れであるとしている。その中で、色彩語の疊語である「黒々」が取り上げられ、「様態の強調」を表すと指摘している。石川(2017)は禹(2015)が指摘している疊語の<強調>に関して事物に関わる時空数量の強調と、事物の様子や在り方に関わる様態の強調は時空数量も<様態>の一種を再考した。また、時空数量も客観的な(量的)事実可依拠しているわけではないことから、これら2種の意味機能はどちらも<話者の主観的な解釈>に依拠していると指摘している。しかし、石川(2017)ではそれについて詳しく説明されていない。

譙(2000)では、『分類語彙表』を用い、日中両言語における疊語名詞を表す意味を考察した。その結果、日本語における疊語名詞の意味は「時間」の分野に属するものが多いのに対して、中国語における疊語名詞の意味は「人間活動の主体」の分野に属するものが多い。しかし、色彩語の疊語の意味の分布状況はどうかは触れられていない。

そこで、本論文は石川(2017)の<話者の主観的な解釈>の考えを引継ぎ、日中両言語における基本色彩語の疊語と共起する語の属性は認知言語学の概念である「相互作用」を用いて、知覚者から感覚の持ち主を概念化することを解明する。この分析については第5章で詳しく述べる。

また、郭(2014)と蘇(2013)の考察結果、中国語との対照比較により、日本語の色彩語のイメージ、意味、用法などは明らかになった。蘇(2013)では、色彩語の意味用法は色の有無に基づき、「色を表す」、「色を表すと同時に別の意味をも表す」、「色を表さない」という3種類に分けられる可能性を主張している。「色を表さない」の場合は、日中両言語における色彩語の区別が大きいとのことであり、それは、意味に色相が含まれている場合は、拡張義のあり方により一般性が認められ、色相から大きく乖離すればするほど、それぞれの言語固有の意味に転じる可能性が高いと述べている。換言すれば、色彩語の意味用法は基本的な意味である「色を表す」から比喩的な意味である「色を表すと同時に別の意味をも表す」、「色を表さない」へ拡張したことが考えられる。

田(2014)では、日本語における疊語形容詞の構成要素が名詞である場合は事物の名前から

事物の状態を表すように変わり、動詞の場合は動作、行為から状態を表すように変わり、形容詞の場合は事物の性質から人間の感情、感覚を表すように変わるとしている。つまり、各品詞の語彙は疊語化することによって、意味の変化が見られると述べている。中国語における疊語形容詞の場合も同様である。中国語における疊語形容詞の構成要素は形容詞である場合が多く、形容詞を疊語化することにより副詞に転用され、意味の描写性を高める強調用法を表すことができると述べている。しかし、基本色彩語は疊語化することにより、事物の性質から人間の感情、感覚を表すように変わるのかは言及されていない。

荒川 (2006) では、「凜々しい」、「寒々しい」、「白々しい」などの形容詞シク型活用は感情形容詞に属する形容詞であり、もとの語基が存在しており、意味上においては、主観的な感情または感覚を表すと主張している。そして、認知意味論に基づき、疊語の意味をカテゴリーA<派生語基の中心義のみが感情形容詞の意味になっているもの>、カテゴリーB<派生語基中心義・転義の双方が感情形容詞の意味になっているもの>、カテゴリーC<派生語基の転義のみが感情形容詞の意味になっているもの>の3つのカテゴリーに分けている。荒川 (2006) は語基を視野に入れ、語彙研究を行い、有意義な指摘がされている。しかし、具体的に同一語基を持つ基本色彩語とその疊語についてどのようにかかっているのかは解釈されていない。本論文は、認知言語学のアプローチを用い、日中両言語における基本色彩語と基本色彩語の疊語の意味関係を考察する。また、体系的な語彙形式が背景に存在する日本語母語話者と中国語母語話者が持っている認知プロセスの特徴を明らかにする。これについては第6章で詳述する。

先行研究と本論文の関係は図1に示すように、従来の先行研究では、同じ語基との比較の視点から疊語の意味に関する研究も行われてきてはいるが、基本色彩語に対する適切な解釈が明らかにされていないとは言えない。そのため、第1章でも述べたように、本論文は基本色彩語を体系的に分析して、疊語の用法に新たな意味カテゴリーを導き出すことを目的とする。よって、本論文では、同一語基を持つ基本色彩語（「白・白い・白々・白々しい」）においては、表される意味内容に何らかの類像性を持つという仮説を立てて論を進めていく。まずは、辞典とコーパスを用い、日中両言語における「白」、「黒」、「赤」、「青」といった同じ語基を持つ色彩語の具体的な使用実態を調べ、体系的に意味を分析する。また、語間の意味関係を提示すると同時に、同じ語基を持つ基本色彩語が背景に存在する話者の認知プロセスとどのように関わっているのか、すなわち外部世界と言語主体との関係を解明する。さらに、日中両言語における基本色彩語を比較することによって、対照研究に有意義な示唆を与える。



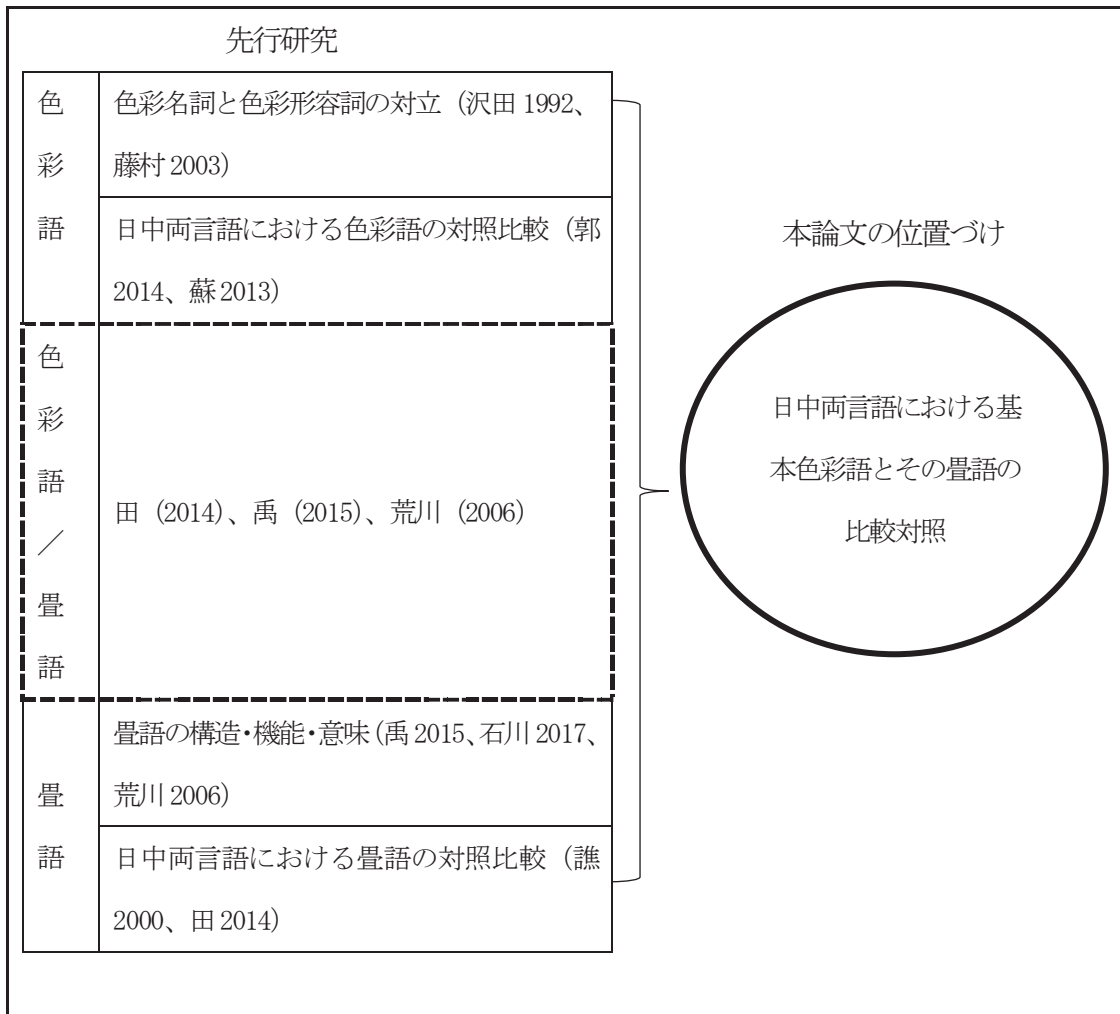


図1 先行研究と本論文の位置づけ

## 第3章 理論的枠組みと本論文の視点

本章では考察において用いられる理論的枠組みを見る。まずは、認知意味論に基づいた Lakoff & Johnson (1999) をはじめ、靱山 (2002)、深田・仲本 (2008)、山梨 (2009、2010) などを概観し、主に提案されたスキーマ、プロトタイプと拡張事例、五感を介しての外界認知と相互作用という概念に触れたうえで、本論文の視点を論述する。

### 3.1 認知意味論

認知意味論とは、実例の使用や意味などに基づき、言語現象だけではなく、言語が背景に存在する認知主体とどのように関わっているのか、外部世界と言語主体との関係をどのように解釈するのか、といった言語研究のアプローチである (Lakoff & Johnson 1999、山梨 2009)。

認知意味論に関する理論についてまず、Lakoff & Johnson (1999) に遡って述べる。Lakoff & Johnson (1999) は、言葉の意味を推論する際、人間の概念システムとして「認知意味論 (Cognitive Semantics)」を提唱しており、それを以下のように定義付けている。

Cognitive semantics studies human conceptual systems, meaning, and inference. The most basic results are these. Concepts arise from, and are understood through, the body, the brain, and experience in the world. Concepts get their meaning through embodiment, especially via perceptual and motor capacities. Directly embodied concepts include basic-level concepts, spatial-relations concepts, bodily action concepts (e.g., hand movement), aspect (that is, the general structure of actions and events), color, and others. Concepts crucially make use of imaginative aspects of mind: frames, metaphor, metonymy, prototypes, radial categories, mental spaces, and conceptual blending. Abstract concepts arise via metaphorical projections from more directly embodied concepts (e.g., perceptual and motor concepts.) As we have seen, there is an extremely extensive system of conceptual metaphor that characterizes abstract concepts in terms of concepts that are more directly embodied. The metaphor system is not

arbitrary, but is also grounded in experience.<sup>66</sup> (下線は筆者によるものである。)

(Lakoff & Johnson1999:497)

Lakoff & Johnson (1999) は身体化されている概念 (Embodied concepts) の1つである色彩は知覚を経由して獲得されたうえで、人間の経験に基づいて抽象的な概念が特徴づけられると述べ、そのような概念化と思考に関する身体化されたメカニズムは認知意味論で説明できると主張している。そして、我々の身体そして脳が色彩を作り出した視点は下記の通りに説明している。

What could be simpler or more obvious than colors? The sky is blue. Fresh grass is green. Blood is red. The sun and moon are yellow. We see colors as inhering in things. Blue is in the sky, green in the grass, red in the blood, yellow in the sun. We see color, and yet it is false, as false as another thing we see, the moving sun rising past the edge of the stationary earth. Just as astronomy tells us that the earth moves around the sun, not the sun around a stationary earth, so cognitive science tells us that colors do not exist in the external world. Given the world, our bodies and brains have evolved to create color.<sup>67</sup>

(下線は筆者によるものである。)

(Lakoff & Johnson1999:23)

Lakoff & Johnson (1999) では、身体化されている概念のうち、色彩語も挙げられている。人

---

<sup>66</sup> 次の日本語訳は、計見 (2004:561-562) によるものである。「認知意味論は人間の概念システム、意味そして推論について研究する。最も基礎的な結果は下記の通り。概念は身体、脳そして世界の中での経験から出現し、それらを通じて理解される。概念はそれらの意味するところを身体化される。概念はそれらの意味するところを身体化、特に知覚、運動能力を経由して獲得する。直接身体化されている概念には、ベーシックレベル概念、空間関係概念、身体運動概念 (例えば、手の運動)、アスペクト (つまり行為と出来事の一般構造)、色彩 およびその他が含まれる。概念は決定的なやり方でマインドのイマジナティブなアスペクトを用いている。すなわち、フレーム、メタファー、換喩、プロトタイプ、放射状カテゴリー、メンタルな空間そして概念的混淆。抽象的な概念は、それよりもっと直接的に身体化されている概念との関係で特徴づけるような概念メタファーのおそろしく広範なシステムが存在する。このメタファー・システムは恣意的ではなく、これまた経験に埋め込まれている。そのような概念化と思考に関する身体化されたメカニズムは意識からは隠されているが、我々の経験を構造化しそして我々が意識的に経験するものを構成する。」(下線は筆者によるものである。)

<sup>67</sup> 日本語訳は計見 (2004:36) によるものであり、次の通りである。「色彩ほど単純で明白なものはあるだろうか。世界は青く、若草は緑である。血は赤い、太陽と月は黄色。我々は式さというものを、物の中に備わっているものと見る。空の中に青がある、草の中に緑がある、血液の中に赤があり、太陽の中に黄色がある。我々は色彩を見るというは、もう一つ別の見る一動いている太陽が、動かない地球の縁を過ぎて昇るという風に見えるように、誤りである。天文学が我々に教えてくれるように、地球が太陽の周りを動いているのではない。そのように認知学科は我々に、色彩は外部世界の中にあるのではないということを教える。世界を与えられて、我々の身体そして脳が色彩を作り出すべく進化を遂げたのである。」(下線は筆者によるものである。)

間が外的世界との相互作用を通じ、色彩という言葉の概念が出現されると指摘している。

上記のように、Lakoff & Johnson (1999) は、言語を「身体化されている概念 (Embodied concepts)」として捉えており、同様の立場は山梨の一連の研究においても見られる。山梨 (2009) は、「外界認知と言葉の身体性」について次のように述べている。日常言語の概念体系は、世界との直接的な相互作用を反映する身体経験に根ざす視覚的なイメージ (空間認知、五感、体感、運動感覚など) に限らず、この種のイメージ操作の認知プロセスによって変容する多様な創造的イメージによって特徴づけられている。すなわち、概念体系の一部は、具体的なイメージレベルを越えるより抽象的なレベル<sup>68</sup>の表象によっても特徴づけられるとしている。

以上の概念から明らかのように、日常言語の概念体系は、外界世界にかかわる主観的な視点や五感などに基づく身体的な経験によって動機づけられている。以下、3.2 節では主体の認知プロセスを特徴づけられている重要な手がかりとなるスキーマ、プロトタイプと拡張事例、3.3 節では、五感を介しての外界認知と相互作用という概念を説明する。

### 3.2 スキーマ、プロトタイプと拡張事例

山梨 (2010) は、主体には、ある存在を一般的なスキーマによって特徴づけられているカテゴリーの一例として理解する能力を持っており、さらに、あるカテゴリーの典型的な事例 (すなわち、プロトタイプの意味または基本義) と類似している新たな事例が存在する場合、類似性の認知プロセスを介して、後者の事例をそのカテゴリーの拡張事例として取り込んでいく能力があるとしている。すなわち、カテゴリーの成員は、類似性のリンクを用いてプロトタイプとしての典型的な成員から周辺的な成員まで段階的に関連づけられていると述べている。また、山梨 (2010) は、認知主体、言語主体としての話者は、具体的な経験によって作られたイメージを介して外部世界の把握 (すなわち、対象) を把握しているだけではなく、状況によってはイメージを拡張し、この拡張されたイメージを介してより抽象的な対象を理解すると述べている。すなわち、この拡張には、意味の抽象化のプロセスが伴うことが可能であり、抽象化された意味の場合は、元のプロトタイプの意味 (基本義) からの拡張事例であると考えている。

そして、カテゴリー拡張の結果が生じた最も基本的なプロトタイプの意味 (基本義) について、靱山 (2002) では、複数の意味の中からプロトタイプの意味 (基本義) を認定する典型的な

---

<sup>68</sup> 抽象的なレベルの表象は個々の具体的なイメージの特徴を捨象し、個々のイメージに共通する特徴に基づいてより抽象的な表象を作り上げていくスキーマ化の能力によって発見する。(山梨 2009:5)

特徴として、次の3点を取り上げて説明する。

- ①最も基本的なもの。
- ②最も確立されているもの。
- ③中立的なコンテストで最も活性化されやすい（想起されやすい）もの。

(靱山 2002:107)

靱山 (2002) は、カテゴリー拡張では、このプロトタイプの意味（基本義）を起点として話者の認知プロセスに応じ、複数の方向性へ語義の意味拡張が展開していくとしている。

山梨 (2010) は、外部世界の把握を可能とする話者の認知プロセスについて次のように述べている。日常言語の概念体系は、世界との直接的な相互作用を反映する五感、体感などの身体的な経験に根ざす原初的なイメージだけでなく、この種のイメージ操作の認知プロセスによって変容する多様な創造的イメージによって特徴づけられている。具体的には、人間の創造的な理解には、次のような1A-1B-1Cといった認知プロセスが関わっているとされている。

- (1) A. ある対象に関し具体的なイメージを作りあげていくプロセス。
- B. ある対象のイメージを他の対象に拡張していくプロセス。
- C. ある対象のイメージを多角的な視点から取り組みかえていくプロセス。

(山梨 2010:140)

(1A) のプロセスとして視覚を通じて基本色彩語で言語化され、対象のイメージが生み出される。次に、(1B) のプロセスとして、(1A) で生み出されるイメージは他の語と共起することによって、新たな意味に拡張していく。それから、多角的な視点から取り込み、(1C) で新たな意味に拡張していく。

以上の点に関係する言語現象として、山梨 (2010) はスキーマの拡張による日本語の複合動詞 [V-倒す] について取り上げて説明する。「殴り倒す」、「突き倒す」、「蹴り倒す」などは、典型例として考えられる。この種の典型例を規定する<物理的な力を加えることによって、相手を倒す>という基本スキーマを抽出することができる。そして、前項動詞に物理的接触を表すものではなく、言語行動や祈りの行為に関わる動詞が入り、「脅し倒す」や「拝み倒す」といった拡張事例が生まれる可能性があることを指摘している。仮に、「殴り倒す」や「蹴り倒す」

のスキーマを [V-倒す①] とし、ここで得られた拡張用法を [V-倒す②] と呼ぶ。[V-倒す①] は動作主の行為によって被動作主が物理的に倒されることを意味するが、[V-倒す②] は文字通りの「倒す」ではなく、言語的な力や心理的な力によって、相手を比喩的に圧倒するという意味で使用されている (山梨 2009:141)。つまり、[V-倒す②] は [V-倒す①] からメタファーによって拡張したものと言える。さらに、山梨 (2010) では、前項動詞の位置に他動性、意図性を欠く「泣く」、「嘆く」のような動詞でも、文脈によっては「倒す」と共起して、〈泣いて相手を参らせる〉、〈嘆いて相手を参らせる〉のような意味で使われる場合も考えられるとしている。すなわち、「泣き倒す」や「嘆き倒す」などのような表現は、具体的な言語使用の文脈で、典型事例から拡張表現の1種として容認され、[V-倒す③] として考えられる。

上記の概念を踏まえ、日常言語の概念体系の多義性、意味拡張の段階性は、スキーマを日常言語の概念体系の語彙的意味の基盤に置くことで、統一的に説明できると考えられる。

### 3.3 五感を介しての外界認知と相互作用

五感を介しての外界認知と相互作用に関する理論及び研究には Ullmann (1962)、深田・仲本 (2008)、山梨 (2012) などがある。

まず、Ullmann (1962) は、人間は五感 (視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚) によって外界の事物や事象を知覚する認知プロセスとして「共感覚 (Synaesthetic)」を提唱しており、それを以下のように定義付けている。

'Synaesthetic' metaphors. — A very common type of metaphor is based on transpositions from one sense to another: from sound to sight, from touch to sound, etc. When we speak of a warm or a cold voice, we do so because we perceive some kind of similarity between warm or cold temperature and the quality of certain voices. In the same way we talk of piercing sounds, loud colours, sweet voices and odours, and many more. Synaesthetic associations lie also at the root of certain etymologies.<sup>69</sup> (下

<sup>69</sup> 日本語訳は池上 (1977:247-248) によるものであり、次の通りである。共感覚的な隠喩のよくあるタイプに1つの感覚から他の感覚への転移に基づいているものがある。例えば、聴覚から視覚へ、触覚から聴覚へといったふうにある。われわれは「暖かい」声とか「冷たい」声とか言う時、暖かさ、または冷たさとある種の声の性質の間にある類似性を認めるからそうするのである。「つんざくような」声とかloud colours (「やかましい」色=げげげしい色)、「甘い」声や香り、その他多くの場合についても同様である。共感覚的な連想はまたある種の語源のもとになっていることもある。(下線は筆者によるものである。)



線は筆者によるものである。)

(Ullmann1962:216)

上記のように、Ullmann (1962) は、「共感覚」を「1つの感覚から他の感覚への転移に基づいている概念」として捉えており、同様の立場は山梨の一連の研究においても見られる。山梨 (2010) は、その身体感覚や五感にかかわる経験は主体と外界の相互作用を介して得られると述べている。以下では、身体感覚、五感を介しての外界認知の概念に基づいて主張された山梨 (2010) の論述を取り上げて述べる。

外界認知にかかわる主体の経験としては、さらに主体と外界の相互作用を介して得られる身体感覚や五感にかかわる経験が考えられる。日常言語には、身体感覚や五感に基づく主観的な叙述が広範に見られる。身体感覚や五感を介して得られる情報は、実感を伴う日常言語の意味の創造性の重要な経験的な基盤を作り上げている。

(山梨 2010:125)

山梨 (2010) は、日常言語の中には、味覚、触覚、視覚をはじめとする五感が、主体の内面描写を比喩的な叙述として使われる例がよく見られるとしている。例えば、味覚の場合には「彼の考え方は甘すぎる<sup>70</sup>」、「ほろ苦い人生」、触覚の場合には「口調がなめらか」、「意思が固い」、視覚の場合には「{明るい/暗い} 性格」、「彼は根が暗い」などが挙げられる。これらの表現は日常言語の文字通りの意味として直接的に把握されるのではなく、ある感覚からの主体の内面描写にかかわる比喩的な意味として把握される。さらに、山梨 (2010) は、これらの例から話者は世界を客観的な対象として理解するのではなく、話者の身体と世界との相互作用を介して意味づけるとしている。すなわち、「環境の中に投げ込まれ、環境とインターアクトしていく主体としてみた場合、われわれはまずまず自己を中心にして環境としての外界を認知し、環境との相互作用によって得られる経験を通して世界を意味づけしていく (山梨 2010:127)」。

そのような主体の身体と世界との相互作用を介して意味づける概念について深田・仲本 (2008) にも次のような説明が見られる。話者は様々な認知能力 (五感、運動感覚、視点の投影など) を介し、日常経験を無意識的にカテゴリー化し、それに基づいて知識を構築しながら、

---

<sup>70</sup> 味覚、触覚、視覚の例は山梨 (2010:127) から引用したものである。下線は筆者によるものである。

外部世界を解釈していくと述べている。深田・仲本 (2008) は、次のように日常の文脈の中で、事物の重さはどのように知覚されるかという例を挙げて解釈している。

物理学における質量という概念は、物体に内在的に備わる属性として定義される。しかし、日常的な経験を考える時、重さは事物の客観的な属性というよりも、主体の対象に対する働きかけ (例:「荷物を運ぶ」) に対する抵抗力として理解されることに気づく。例えば、「鉛は重い」のような科学的な言明の場合、鉛の質量または重量といった概念は意味をなす。これに対して、「荷物が重い」になると事物に対する行為者の作用に対する反作用という意味が前景化する。さらに、「ギアが重い」は、ギアの重量という概念は意味をなさず、行為者にとって「動かみにくい」という相互作用的属性のみが前景化する。

(深田・仲本 2008:106)

事物の重さのように、人間は複数の感覚を同時に働かせながら事態を知覚することが可能である。視覚について、深田・仲本 (2008) は、例(2)のように「茶色い戦争」といった表現は典型的な共感覚に基づく転移修飾であると説明している。

(2) 幾時代かがありました 茶色い戦争ありました。

(深田・仲本 2008:123)

深田・仲本 (2008) は、我々はここから戦闘によって巻き上がる茶色の砂塵、時代を経て茶色に錆びついた兵器の残骸、戦争によって破壊され尽くし茶色く廃墟と化した町といった多様な場面を共感覚的なイメージとして交錯させると述べている。

以上の理論的枠組みから、基本色彩語は視覚を用いて外界を知覚する場合、外界における対象に対する他の感覚を同時に働かせながら事態を知覚すると考えられる。

### 3.4 本論文の視点

以上の諸先行研究の成果を踏まえ、本論文においては認知意味論を用いて基本色彩語とその豊語の語間の意味拡張、及び認知プロセスを究明することとする。主に、主体の身体と世界との相互作用を介して意味づけること、ある複数の対象の間に類似性を認知し共通のスキーマを

抽出すること、スキーマの条件を満たす具体的な対象を事例化すること、典型的な事例から周辺の事例を拡張することといった認知意味論の概念を用いて、形式から意味にわたる基本色彩語の言語現象の方向性を明確にする。

図1に示すように、山梨（2010）の認知プロセスに基づき、基本色彩語の意味拡張は解釈できるとされる。具体的には、「白（い）紙」を事例として説明する。まずは、五感の1つである視覚を通じて基本色彩語で言語化され、「白（い）紙」がスキーマ化の認知プロセスを介して、「白（い）-X」のプロトタイプの意味（基本義）を抽出したスキーマを形成する。次に、「白（い）-X」を背景化し、抽出されたスキーマを豊語化のプロセスを介して新たな「白々、白々しい」に具体化することを示していると思われる。

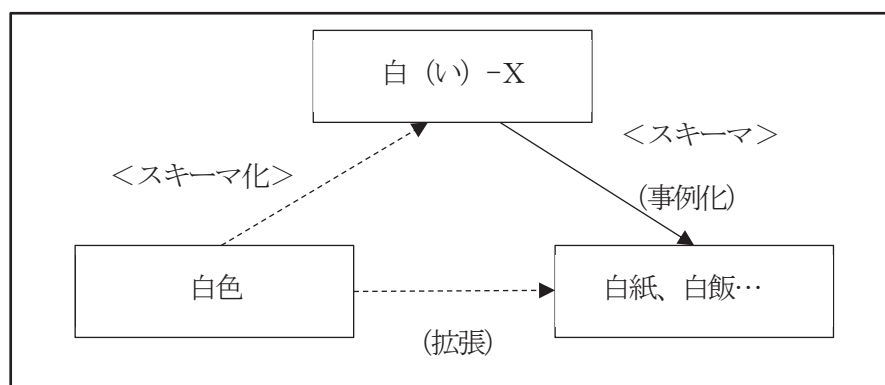


図1 基本色彩語の認知プロセス

上記の基本色彩語のスキーマ化と事例化のプロセスに基づき、基本色彩語の創造的な用法には、「白・白い」として典型的な事例のカテゴリーであった言語現象が、プロトタイプに基づく周辺の事例のカテゴリー機能を担う言語現象として再分析される拡張のプロセスが関わっていることが予測できる。この種の拡張プロセスが言葉の創造性の背後に認められるならば、実際の言語現象の文脈において、基本的に「白・白い」の事例化を規定するスキーマから創造的な拡張を示すことが可能となる。

山梨（2010）は、日常言語の言語現象は何らかの形で、具体的な文脈における基本的な事態のパターンを反映しているとしている。本論文は、認知言語学のアプローチでは、実際の言語使用の場から立ち現われるパターン（ないしはスキーマ）の一部として規定を捉え直していくことが可能だと考えられる。また、日中両言語における基本色彩語を体系的に分析することによって、豊語の用法に新たな意味カテゴリーを解釈することを明らかにすることができる。そし

て、異なる母語話者の認知プロセスの相違点を明らかにすることによって、基本色彩語の創造性にかかわる1つの方向を示すことが可能である。

第2章で諸先行研究を考察したところ、基本色彩語の豊語が明確にされていないため、本論文では「白・白い・白々・白々しい」といった基本色彩語においては、表される内容に何らかの類像性を持つという仮説を立てて論を進めていく。そして、類似性に基づく事例は主体と外界の相互作用を介して得られる身体感覚、五感にかかわる経験を背景として直接的な視覚描写の叙述から主体の主観的な認識や判断にかかわる叙述へ拡張することを考察する。すなわち、基本色彩語の豊語は基本色彩語とは異なり、視覚による典型的な事例から周辺的な事例を拡張することで、知覚者から感覚の持ち主を概念化することが考えられる。さらに、基本色彩語とその豊語の類似性や共通性に基づいてスキーマを抽出していく認知プロセスを明らかにする。基本色彩語に関し具体的・典型的なイメージを作り上げ、その典型的な生み出されるイメージは他の語と共起することによって、周辺的なイメージを持つ新たな意味に拡張するプロセスを把握する。このようなスキーマは基本色彩語とその豊語の意味拡張の段階性を体系的に説明でき、意味の拡張と話者の認知プロセスの一面を考察していく重要な役割をになると考えられる。

## 第4章 日中両言語における基本色彩語の畳語の使用実態

野呂 (2016) が述べている言語形式と意味内容の間に類似関係が存在する類像性の観点から、基本色彩語の畳語の意味は、合成的解釈から厳密には得られないものであるが、同一語基で、かつ繰り返しの形式上の類像性という形式に関わっていると考えられる。

本章は形式上の類像性の観点に基づき、同一語基を繰り返すものと同一語基に後接する接辞を付け加えるものを研究対象とし、構成要素との関連性や類似表現との相違点についての考察を行いながら、構成要素などから十分に予測できない使用実態を究明する。以下では、辞書とコーパスを用い、基本色彩語の畳語の使用実態（構造的特徴、文法機能、使用特性）についてそれぞれの特徴や相違点を探る。最後に、本章のまとめを述べる。

### 4.1 はじめに

色彩語または畳語の研究は数多く行われてきたが、「白・白い・白々・白々しい」といった基本色彩語とその畳語を体系的に捉える研究はあまりなされてない。石川 (2017) では、教科書においては、「神々」、「国々」などの畳語が特徴的であり、新聞・雑誌においては、「次々」、「時々」などの畳語が特徴的であると指摘している。石川 (2017) の考察結果では、畳語による異なる使用特性の相違点が示されたが、対象外である基本色彩語の畳語はどう解釈するかという課題がまだ残されている。そこで、本章では、辞書とコーパスを用い、日中両言語における基本色彩語の畳語の使用実態（構造的特徴、文法機能、使用特性）についてそれぞれの特徴や相違点という課題を明らかにする。

管見の限りでは、「白・白い・白々・白々しい」といった体系的に基本色彩語を対象とする研究はきわめて少ない。陳 (2020) では、基本色彩語の畳語は他の畳語と異なる使用特性があったこと、畳語化することで意味が相互的に影響を及ぼしたこと、「書籍」、「ブログ」などのジャンルにおいて基本色彩語の畳語の使用頻度が顕著であったことが明らかになった。研究成果は辞書記述や語彙研究に有益な示唆を与えられる<sup>71</sup>。

<sup>71</sup> 矢澤 (2019) では、コーパスによる辞書の記述内容の検証について下記のように述べている。辞書とコーパスの今後、より規模の大きなコーパスが整備されて、これらの実態が検証できることを期待するが、コーパスの整備により補強されるのは、言語事実の正確さにすぎない。… (略) 正確な言語記述を求めるのと同

また、反復の記号表現とそれが表す意味内容との関係が恣意的ではない(野呂 2016 : 20-23) という形式上の類似性の観点に基づき、同一語基を持つ基本色彩語の特徴を見出すことが可能かといった課題も残る。これらの点については、本章は同じ語基を持つ中国語の基本色彩語を比較対象とし、各節で取り扱う課題を設定し、考察していく。

課題1 : 辞書とコーパスを通じて、日中両言語における基本色彩語の畳語の構造的特徴は何か。  
(4.2 節)

課題2 : 辞書とコーパスを通じて、日中両言語における基本色彩語の畳語の文法機能は何か。  
(4.3 節)

課題3 : コーパスを通じて、日中両言語における基本色彩語の畳語の使用特性は何か。(4.4 節)

## 4.2 基本色彩語の畳語の構造的特徴

本節では、日本語と中国語の辞書を用い、日中両言語における基本色彩語の畳語の構造的特徴(表記形式、読み方)がどのように記述されているかを考察する。日本語の辞書は『学研国語大辞典第2版』(1988)、『小学館デジタル大辞泉<sup>72</sup>』、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)、『岩波広辞苑第7版』(2018)を使用し、中国語の辞書は『講談社中日辞典第3版』(2010)、『小学館中日辞典第3版』(2016)を使用することとする。以下では、辞書で記述された基本色彩語の畳語の表記形式を抽出し、それぞれの相違点を論じる。辞書を踏まえたうえで、コーパスを通じ、実際に使用されている日中両言語における基本色彩語の畳語の表記形式を抽出する。こういった実例で使われている基本色彩語の畳語の構造的特徴を考察したうえで、辞書との相違点を明らかにする。また、基本色彩語の畳語の構造的特徴をより精緻に記述し、他の畳語との相違点を明確にする。

まず、辞書を用い、語基「白」である基本色彩語の畳語の構造的特徴を見る。

『学研国語大辞典第2版』(1988)、『小学館デジタル大辞泉』、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)、『岩波広辞苑第7版』(2018)では、基本色彩語の畳語「白白」は同じ漢字の繰り返しとして記述されている。そして、「白白」の後ろに接辞「-しい」が付け加えられることによって、基本色彩語の畳語「白白しい」が形成されると記述されている。上記の考察から、辞書で

---

等の熱心さで、利用者が国語辞書を用いる場面や求める情報、そしてそれを提供する方法を追究することで、国語辞書は道具としての完成度を高めることができようとしている(矢澤 2019: 162)。

<sup>72</sup> 引用サイト: <https://dictionary.goo.ne.jp/jn/> (検索日は2020. 1. 5である)。年3回の定期更新が行われている。データは2019年12月最新修正版を利用したものである。



記述されている語基「白」である基本色彩語の畳語の表記形式は、大里（2013）が指摘している畳語の一般的な表記形式は漢字であるのと一致していることが分かった。

次に、『BCCWJ』を用い、語基「白」である基本色彩語の畳語の表記形式を考察する。「白々」は全部で106例であり、その中で5種類の表記形式が確認される。5種類の表記形式が全体に占める割合の大きい順に並べる。反復記号を使う「白々」は68.8%で、平仮名を使う「しらじら」は21.8%で、漢字と平仮名を使う「白じろ」は5%で、平仮名を使う「しらしら」は3.7%で、漢字を使う「白白」は0.7%である。すなわち、「白々」>「しらじら」>「白じろ」>「しらしら」>「白白」である。よって、語基「白」である基本色彩語の畳語「白々」の表記形式は複数であり、反復記号を使う「白々」が最も多く、漢字を使う「白白」が最も少ないことが分かった。

また、「白々しい」は全部で77例であり、その中で4種類の表記形式が確認される。4種類の表記形式が全体に占める割合の大きい順に並べる。反復記号を使う「白々しい」は57.1%で、平仮名を使う「しらじらしい」は37.7%で、漢字を使う「白白しい」は2.6%で、片仮名を使う「シラジラシイ」は2.6%である。すなわち、「白々しい」>「しらじらしい」>「白白しい」>「シラジラシイ」である。よって、語基「白」である基本色彩語の畳語「白々しい」の表記形式は複数であり、反復記号を使う「白々しい」が最も多く、漢字と片仮名を使う「白白しい」が最も少ないことが分かった。そのうち、片仮名を使う「シラジラシイ」の用例も見出された。上記の考察から総括的にみると、辞書の場合、基本色彩語の畳語の表記形式は「漢字+漢字」であるのに対して、コーパスの場合、基本色彩語の畳語の表記形式は複数であり、そのうち、「漢字+々」の使用頻度が最も高いであることが言明される。

最後に、語基「白」である基本色彩語の畳語の読み方を考察する。「白々」の読み方に関しては、『岩波広辞苑第7版』（2018）に掲載されている「はくはく」、「しろじろ」、「しらじら」の3つが挙げられている。『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）による「白々」の読み方は「しらけしらけ<sup>73</sup>」、「はくはく<sup>74</sup>」、「しろじろ」、「しろしろ」、「しらじら」の5つが挙げられている。調べた辞書の中で、「白々」の読み方は「はくはく」、「しろじろ」、「しらじら」が共通していることが分かった。そして、「白々しい」の読み方は「しらじらしい」として使用される。「白々しい」は「しらじら」の後ろに接辞「-しい」が付け加えることによって形成される。すなわち、

<sup>73</sup> 動詞「白ける」の連用形、または連用形が名詞化したものであるため、「しらけしらけ」を本論文の研究対象外とする。

<sup>74</sup> 辞書から分かるように「はくはく」は「めいめいはくはく（明々白々）」という四字熟語として使用されている。四字熟語は一般に慣用句的に用いられる言葉であるため、「はくはく」を本論文の研究対象外とする。

「白々」の読み方は複数であり、「白々しい」の読み方は単一であることが分かった。

1.3.2節で述べたように、「量の類像性」の観点から見ると、反復の記号表現はそれぞれ意味と形式との安定した象徴的な連合となり、音形と概念のパターンの規則が存在すると考えられる。語基「白」である基本色彩語の畳語の場合、音節規則に組み合わさって形成された「しらじら」と「しらじらしい」にはある程度の連続性がみてとられる。上記の考察により、辞書とコーパスで見られた語基「白」である基本色彩語の畳語の構造的特徴（表記形式と読み方）は表1のようにまとめられる。

表1 語基「白」である基本色彩語の畳語の構造的特徴

出典 構造的特徴	『学研国語大辞典第2版』	『小学館デジタル大辞泉』	『小学館日本国語大辞典第2版』	『岩波広辞苑第7版』	『BCCWJ』
表記形式	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+反復記号 平仮名+平仮名 漢字+漢字 片仮名+片仮名
読み方	しらしら、 しらじら、 しろじろ、 はくはく、 しらじらしい	しらじら、 しろじろ、 はくはく、 しらじらしい	しらけしらけ、 はくはく、 しろじろ、 しろしろ、 しらじら、 しらじらしい	はくはく、 しろじろ、 しらじら しらじらしい	しらしら、 しらじら、 しろじろ、 はくはく、 しらじらしい

表1に示すように、辞書とコーパスが共通している表記形式には「漢字+漢字」、「漢字+平仮名」、「平仮名+平仮名」がある。「漢字+々」、「片仮名+片仮名」はコーパスでしか見られない表記形式であることが確認される。

次に、語基「黒」である基本色彩語の畳語の構造的特徴を考察したうえで、語基「白」である基本色彩語の畳語との相違を論じる。

『学研国語大辞典第2版』(1988)、『小学館デジタル大辞泉』、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)、『岩波広辞苑第7版』(2018)を用い、語基「黒」である基本色彩語の畳語の表記形式を見る。いずれの辞書では、基本色彩語の畳語「黒黒」は同じ漢字の繰り返しとして記述され

ている。「黒黒しい」は『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）のみ見出し語として掲載されており、「黒黒」の後ろに接辞「-しい」が付け加えられることによって形成されると記述されている。辞書を通し、語基「黒」である基本色彩語の畳語の表記形式は漢字であることが分かった。それは語基「白」である基本色彩語の畳語と共通する表記形式である。

そして、『BCCWJ』を用い、語基「黒」である基本色彩語の畳語の表記形式を調べ、語基「白」である基本色彩語の畳語の相違を論じる。「黒々」は全部で231例であり、その中で4種類の表記形式が確認される。使用されている4種類の表記形式が全体に占める割合の大きい順に並べる。反復記号を使う「黒々」は83.1%で、平仮名を使う「くろぐろ」は10.3%で、漢字と平仮名を使う「黒ぐろ」は4.8%で、漢字を使う「黒黒」は1.8%である。すなわち、「黒々」>「くろぐろ」>「黒ぐろ」>「黒黒」である。よって、語基「黒」である基本色彩語の畳語の表記形式は複数であり、反復記号を使う「黒々」が最も多く、漢字を使う「黒黒」が最も少ないことが分かった。また、「黒黒」は「白々」と異なり、「片仮名」の表記形式が使用されていない。そして、「黒々しい」の使用が確認できなかった。以上の考察から、語基「黒」である基本色彩語の畳語の表記形式は語基「白」である基本色彩語の畳語と同じく、反復記号を使う「黒々」が一般的であることが分かった。

最後に、語基「黒」である基本色彩語の畳語の読み方を考察する。基本色彩語の畳語「黒々」の読み方は「くろぐろ」として記述されている。「黒々」の読み方は「白々」と異なり、単一であることが分かった。上記の考察により、辞書とコーパスで見られた語基「黒」である基本色彩語の畳語の構造的特徴（表記形式と読み方）は表2のようにまとめられる。

表2 語基「黒」である基本色彩語の畳語の構造的特徴

出典 構造的特徴	『学研国語大 辞典第2版』	『小学館デジ タル大辞泉』	『小学館日本国語 大辞典第2版』	『岩波広辞苑 第7版』	『BCCWJ』
表記形式	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+反復記号 平仮名+平仮名 漢字+平仮名 漢字+漢字
読み方	くろぐろ	くろぐろ	くろぐろ、 くろぐろしい	くろぐろ	くろぐろ、 くろぐろしい

表2に示すように、辞書とコーパスが共通している表記形式には「漢字+漢字」、「平仮名+平仮名」がある。「漢字+々」、「漢字+平仮名」はコーパスでしか見られない表記形式である。

次に、語基「赤」である基本色彩語の畳語の構造的特徴を考察したうえで、語基「白」、「黒」である基本色彩語の畳語との相違を論じる。

『学研国語大辞典第2版』(1988)、『小学館デジタル大辞泉』、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)、『岩波広辞苑第7版』(2018)を用い、語基「赤」である基本色彩語の畳語の表記形式を見る。上記の辞書では、基本色彩語の畳語「赤赤」は同じ漢字の繰り返しとして記述されている。そして、「赤赤しい」の記述が見つからなかった。辞書を通し、語基「赤」である基本色彩語の畳語の表記形式は、語基「白」、「黒」である基本色彩語の畳語と同じく、漢字で表記されていることが分かった。

そして、『BCCWJ』を使い、語基「赤」である基本色彩語の畳語の表記形式を調べ、語基「白」、「黒」である基本色彩語の畳語との相違を論じる。「赤々」は全部で107例であり、その中で5種の表記形式が確認される。使用されている5種の表記形式が全体に占める割合の大きい順に並べる。反復記号を使う「赤々」は55.9%で、平仮名を使う「あかあか」は40.4%で、片仮名を使う「アカアカ」は1.9%で、漢字と平仮名を使う「赤あか」は0.9%で、漢字を使う「赤赤」は0.9%である。すなわち、「赤々」>「あかあか」>「アカアカ」>「赤あか」=「赤赤」である。よって、語基「赤」である基本色彩語の畳語「赤々」の表記形式は複数であり、反復記号を使う「赤々」が最も多く、漢字と平仮名を使う「赤あか」と漢字を使う「赤赤」が最も少ないことが分かった。また、「赤々しい」は2例であり、「赤々しい」と「赤あかしい」1例ずつである。以上の考察から、「赤々しい」の用例が少ないが、語基「赤」である基本色彩語の畳語の表記形式は反復記号を使う「赤々」が一般的だと考えられる。その使用傾向は語基「白」、「黒」である基本色彩語の畳語と一致している。

また、語基「赤」である基本色彩語の畳語の読み方を考察する。基本色彩語の畳語「赤々」の読み方は「黒々」と一致し、単一であることが分かった。上記の考察により、辞書とコーパスで見られた語基「赤」である基本色彩語の畳語の構造的特徴(表記形式と読み方)は表3のようにまとめられる。

表3 語基「赤」である基本色彩語の疊語の構造的特徴

出典 構造的特徴	『学研国語大 辞典第2版』	『小学館デジ タル大辞泉』	『小学館日本国語 大辞典第2版』	『岩波広辞苑 第7版』	『BCCWJ』
表記形式	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+反復記号 平仮名+平仮名 片仮名+片仮名 漢字+平仮名 漢字+漢字
読み方	あかあか	あかあか	あかあか	あかあか	あかあか、 あかあかしい

表3に示すように、辞書とコーパスが共通している表記形式には「漢字+漢字」、「平仮名+平仮名」がある。「漢字+々」、「漢字+平仮名」、「片仮名+片仮名」はコーパスでしか見られない表記形式である。

最後、語基「青」である基本色彩語の疊語の構造的特徴を考察したうえで、語基「白」、「黒」、「赤」である基本色彩語の疊語との相違を論じる。『学研国語大辞典第2版』(1988)、『小学館デジタル大辞泉』、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)、『岩波広辞苑第7版』(2018)を用い、語基「青」である基本色彩語の疊語の表記形式を見る。上記の辞書では、基本色彩語の疊語「青青」は同じ漢字の繰り返しとして記述されている。そして、「青青しい」は『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)のみ記述されており、「青青」の後ろに接辞「-しい」が付け加えられることによって形成されると記述されている。辞書を通し、漢字という表記形式は語基「白」、「黒」、「青」である基本色彩語の疊語が共通して現れている。

そして、『BCCWJ』を用い、語基「青」である基本色彩語の疊語の表記形式を調べ、語基「白」、「黒」、「赤」である基本色彩語の疊語との相違を論じる。「青々」は全部で184例であり、その中で5種の表記形式が確認される。使用されている5種の表記形式が全体に占める割合の大きい順に並べる。反復記号を使う「青々」は96.1%で、平仮名を使う「あおあお」は1.6%で、漢字と平仮名を使う「青あお」は1%で、漢字を使う「青青」は1%で、片仮名を使う「アオアオ」は0.3%である。すなわち、「青々」>「あおあお」>「青あお」>「青青」>「アオアオ」である。よって、語基「青」である基本色彩語の疊語「青々」の表記形式は複数であり、反復記号を使う「青々」が最も多く、片仮名を使う「アオアオ」が最も少ないことが分かった。

また、「青々しい」は2例であり、「青々しい」と「あおあおしい」1例ずつである。以上の考察から、「青々しい」の用例が少ないが、語基「青」である基本色彩語の畳語の表記形式は反復記号を使う「青々」が一般的だと考えられる。その使用傾向は語基「白」、「黒」、「赤」である基本色彩語の畳語と一致している。

さらに、基本色彩語の畳語の読み方に関しては、「青々」は「あおあお」、「あをあを<sup>75</sup>」、「せいせい」が見出される。「青々」の読み方は「白白」と一致し、複数であることが分かった。上記の考察により、辞書とコーパスで見られた語基「青」である基本色彩語の畳語の構造的特徴（表記形式と読み方）は表4のようにまとめられる。

表4 語基「青」である基本色彩語の畳語の構造的特徴

出典 構造的特徴	『学研国語大 辞典第2版』	『小学館デジ タル大辞泉』	『小学館日本語 大辞典第2版』	『岩波広辞苑 第7版』	『BCCWJ』
表記形式	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+反復記号 平仮名+平仮名 漢字+平仮名 漢字+漢字 片仮名+片仮名
読み方	あおあお (あをあを)	あおあお (あをあを)、 せいせい あおあおしい	あおあお、 あおあおしい	あおあお、 せいせい	あおあお、 あおあおしい

表4に示すように、辞書とコーパスが共通している表記形式は「漢字+漢字」、「平仮名+平仮名」がある。「漢字+々」、「漢字+平仮名」、「片仮名+片仮名」はコーパスでしか見られない表記形式である。

次に、中日辞書を用い、中国語における基本色彩語の畳語の構造的特徴を考察する。『講談社中日辞典第3版』(2010)、『小学館中日辞典第3版』(2016)では、基本色彩語の畳語の表記形式は同一語基の繰り返し、「白白 (bái bái)」と表記されているが、「黒黒 (hēi hēi)」、「紅紅 (hóng

<sup>75</sup> 使い分けは諸説あるが、「お」と「を」は平安時代後期になると発音は何となく交じり合い始め、その後「お」に統一し直されたと言われる。



“hóng)”、“绿绿 (lǜ lǜ)” の記述が見つからなかった。そして、同一語基の後ろに接辞である“茫茫 (máng máng)”、“压压 (yā yā)”、“彤彤 (tóng tóng)”、“油油 (yóu yóu)” が付け加えられることによって、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黑压压 (hēi yā yā)”、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)” が形成される。

そして、『CCL』を用い、中国語における基本色彩語の疊語の構造的特徴を考察する。辞書との相違点について、『CCL』においては、辞書と同じく、基本色彩語の疊語の表記形式は漢字であり、読み方は単一であることが明らかになった。それに対して、『CCL』から“白白 (bái bái)”以外に“黑黑 (hēi hēi)”、“红红 (hóng hóng)”、“绿绿 (lǜ lǜ)” の用例が確認できたため、辞書の記述より中国語における基本色彩語の疊語が広く使用されることが分かった。上記の考察により、辞書とコーパスで見られた中国語における基本色彩語の疊語の構造的特徴は表5のようにまとめられる。

表5 辞書とコーパスから見る中国語における基本色彩語の構造的特徴

出典 構造的特徴	『講談社中日辞典第3版』(2010)	『小学館中日辞典第3版』(2016)	『CCL』
表記形式	漢字+漢字	漢字+漢字	漢字+漢字
読み方	白白 (bái bái)、白茫茫 (bái máng máng)、黑压压 (hēi yā yā)、红彤彤 (hóng tóng tóng)、绿油油 (lǜ yóu yóu)	白白 (bái bái)、白茫茫 (bái máng máng)、黑压压 (hēi yā yā)、红彤彤 (hóng tóng tóng)、绿油油 (lǜ yóu yóu)	白白 (bái bái)、白茫茫 (bái máng máng)、黑黑 (hēi hēi)、黑压压 (hēi yā yā)”、红红 (hóng hóng)、红彤彤 (hóng tóng tóng)、绿绿 (lǜ lǜ)、绿油油 (lǜ yóu yóu)

### 4.3 基本色彩語の疊語の文法機能

本節では、辞書とコーパスを用い、日中両言語における基本色彩語の疊語の文法機能の特徴を考察する。まず、『学研国語大辞典第2版』(1988)、『小学館デジタル大辞泉』、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)、『岩波広辞苑第7版』(2018)を用い、基本色彩語の疊語の用例は下記のように取り上げ、それぞれの文法機能を考察する。

- (1) a. 白白と言ひ訳をする。(『デジタル大辞泉<sup>76</sup>』)  
 b. 白白しくうそ八百を並べたてる。(『デジタル大辞泉<sup>77</sup>』)  
 c. 慇懃無礼な扱いに白白とした気持ちになる。(『デジタル大辞泉』)  
 d. 白白しい月の光。(『デジタル大辞泉』)  
 e. おもひもよらない木立だの寺の門だのをみ出したりする、しづかな、白白した感じの古い往来のうへに三人は出た。(『小学館日本国語大辞典第2版』2001:429)
- (2) a. 黒黒と書く。(『デジタル大辞泉<sup>78</sup>』)  
 b. 黒黒 (と) した髪。(『デジタル大辞泉』)  
 c. 黒黒した闇 (『学研国語大辞典第2版』1988:560)
- (3) a. 赤赤と燃えさかる火の手。(『デジタル大辞泉<sup>79</sup>』)  
 b. 赤赤した肌が柔かくて暖かった (『小学館日本国語大辞典第2版』2001:115)
- (4) a. 若葉が青青 (と) 茂る。(『デジタル大辞泉<sup>80</sup>』)  
 b. 今は初夏！人の認識の目を新しくせよ。我我もまた自然と共に青青しくならうとしてゐる (『小学館日本国語大辞典第2版』2001:78)  
 c. 青青 (と) した海原。(『デジタル大辞泉』)  
 d. 不吉なことをいふ。僕は生命がまだ形をなさないで生れかけようとしてゐる青青しい匂ひだと思ふよ。(『小学館日本国語大辞典第2版』2001:78)

まず、語基「白」である基本色彩語の豊語は(1a)と(1b)の連用修飾用法が「白白と」、「白白しく」という形を取り、(1c)と(1d)の連体修飾用法が「白白とした」、「白白しい」という形を取り、(1e)のサ変動詞活用が「白白した」という形を取っている。そして、語基「黒」である基本色彩語の豊語は(2a)の連用修飾用法が「黒黒と」という形を取り、(2b)の連体修飾用法が「黒黒(と)した」という形を取り、(2c)のサ変動詞活用が「黒黒した」という形を取

<sup>76</sup> 引用サイト:<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001009380500> (検索日は2020.1.5)。(1c)は同日である。

<sup>77</sup> 引用サイト:<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001009380700> (検索日は2020.1.5である)。(1d)は同日である。

<sup>78</sup> 引用サイト:<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001005324500> (検索日は2020.1.5である)。(2b)は同日である。

<sup>79</sup> 引用サイト:<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001000101200> (検索日は2020.1.5である)。

<sup>80</sup> 引用サイト:<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001000071300> (検索日は2020.1.5である)。(4c)は同日である。

っている。「黒々しい」の用例がないため、連用修飾用法と連体修飾用法を確認することができなかった。また、語基「赤」である基本色彩語の畳語は(3a)の連用修飾用法が「赤赤と」という形を取り、(3b)のサ変動詞活用が「赤赤した」という形を取っている。いずれの辞書では、「赤々しい」という見出し語が記述されていないため、連用修飾用法と連体修飾用法を確認することができなかった。最後、語基「青」である基本色彩語の畳語は(4a)と(4b)が「青青(と)」、「青青しく」という形を取り、(4c)と(4d)の連体修飾用法が「青青(と)した」、「青青しい」という形を取っている。

以上の考察に基づき、次のようなことが明確になった。

- (I) 「白々」、「黒々」、「青々」は副詞としての連用修飾用法と連体修飾用法が使用されているが、「赤々」は副詞としての連用修飾用法のみ使用されている。
- (II) 「白々」、「黒々」、「赤々」はサ変動詞として使用されている。
- (III) 「白々しい」、「青々しい」は形容詞としての連用修飾用法と連体修飾用法が使用されている。晋(1995)では、「若々しい、弱々しい」などの畳語形容詞は、重複素が殆どク活用の形容詞語幹であり、一語全体としてはク活用からシク活用に変化していると述べている。田(2014)も、取り上げられている畳語形容詞もすべてシク活用であると述べている。本節で考察した基本色彩語の畳語の文法機能は先行研究と一致していることが分かった。

次に、『BCCWJ』を通じて、実際の言語使用において見られた基本色彩語の畳語の文法機能を考察する。畳語「白々」は106例で、「黒々」は231例で、「赤々」は107例で、「青々」は184例である。畳語「白々しい」は77例であり、「黒々しい」は0例であり、「赤々しい」は2例であり、「青々しい」は2例である。以下では、基本色彩語の畳語の用例を挙げて分析を行う。

- (5) a. 夜は白々と<sup>81</sup>明けた(新田次郎著『新田義貞』1978)
  - b. 内務班長は誰か古年兵に殴られてはれたのだろう、と、はなっから判っているくせに、「そうか、大事にしろよ」と、白々しくいった。(森伊佐雄著『漆職人の昭和史』1992)
  - c. 市街地はとうに出はずれていて、雪が積もったように白々とした野面の果てに、消え

<sup>81</sup> 下線は筆者によるものであり、以下同様である。

- 残った人家の灯が心細げに震えている。(森村誠一著『人間の証明』1977)
- d. 室内には人気がなく、白々しい雰囲気が漂っている。(原田宗典著『本家スバラ式世界』1994)
- e. 私もレセプションや会見などに出席したが、年々「友好」の熱っぽさが冷え、白々しさを感じるようになった。(薄木秀夫著『「反日」と「親日」のはざま』1997)
- (6) a. 行く手の大樹の輪郭が黒々と見える。(山内久著『私も戦争に行った』2000)
- b. 艶のある黒々とした髪が印象的だった。(宝城薫著『夢都市レヴと金色の風』2010)
- c. 南南西へ変針して進み、同三十九分、その右舷南西方向から接近してくる敵艦隊の黒々たる姿をようやく発見していた。(中村彰彦著『海将伝』2000)
- (7) a. 蝋燭の灯が赤々と燃え上がって、酒で火照った時宗の横顔を更に赤く染めている。(長谷川彰著『異聞北条時宗大船団襲来』2001)
- b. ぼくは半裸の男たちが、夜闇のなかで、火をいじって奮戦しているありさまを想像し…(中略)…大火をまえに双肌ぬぎ、赤あかしく潮焼けしていたにちがいない。(倉本四郎著『鬼の宇宙誌』1991)
- c. 眼下の町は赤々とした西日を受けて、あちこちの屋根が光っている。(稲葉真弓著『風変りな魚たちへの挽歌』2003)
- d. 初代『夕暮れ時の赤レンガ倉庫…』葉留佳『赤々しいとはまさにこのことですネっ』(「Yahoo!ブログ」2008)
- (8) a. その意味は、倭は大変すぐれた所である、高く秀でた国で、青々と連なる垣根のような山々に囲まれている、が、こうした山垣に(邦光史郎著『古代史を推理する』1989)
- b. 崖の上から見る青々とした大海原、心地よい風もほほに触れます。(内越言平著『ひとりの小さなおともだちが』2001)
- c. 心地よい大気が流れている。今夜は月明りで庭の葉のついた桜樹が青々しい。このような静謐さは波浪島にはない。(早坂倫太郎著『毒牙狩り』2004)
- d. 青々たる麦畠が、窓こしに眺められる八畳の居室に、牛ののどかな鳴声のとどいてくる。殺伐たる戦争の話に似つかぬ静かな午後であった。(香取史郎著『完本・太平洋戦争』1991)
- e. 賢治は剃刀を濃い髭にあて、青々した剃りあとを、熱いタオルで拭い、テーブルについた。(山崎豊子著『二つの祖国』1983)

まず、語基「白」である基本色彩語の畳語は (5a) と (5b) の連用修飾用法が「白々と」、「白々しく」という形を取り、(5c) と (5d) の連体修飾用法が「白々とした」、「白々しい」という形を取り、(5e) の形容詞の名詞化が「白々しさ」という形を取っている。そして、語基「黒」である基本色彩語の畳語は (6a) の連用修飾用法が「黒々と」という形を取り、(6b) の連体修飾用法が「黒々とした」という形を取り、(6c) の形容動詞タリ活用が「黒々たる」という形を取っている。「黒々しい」の用例がないため、連用修飾用法と連体修飾用法を確認することができなかった。また、語基「赤」である基本色彩語の畳語は (7a) と (7b) の連用修飾用法が「赤々と」、「赤々しく」という形を取り、(7c) と (7d) の連体修飾用法が「赤々とした」、「赤々しい」という形を取っている。最後、語基「青」である基本色彩語の畳語は (8a) の連用修飾用法が「青々と」という形を取り、(8b) と (8c) の連体修飾用法が「青々とした」、「青々しい」という形を取り、(8d) の形容動詞タリ活用が「青々たる」という形を取り、(8e) のサ変動詞活用が「青々した」という形を取っている。

以上の考察に基づき、次のことが明確になった。

- (I) 「白々」、「黒々」、「赤々」、「青々」は副詞として接続助詞「と」を付け加える連用修飾用法、接続助詞「とした」を付け加える連体修飾用法が使用されている。
- (II) 各辞書と『BCCWJ』においては、「白々」の文法機能が一致している。また、各辞書と異なり、『BCCWJ』では、「白々しい」は名詞化として使用されている。
- (III) 各辞書と異なり、『BCCWJ』では、「黒々」は形容動詞タリ活用として使用されている。
- (IV) 『BCCWJ』と異なり、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001) では、「赤々」は名詞として記述されている。
- (V) 各辞書と『BCCWJ』においては、「青々」の文法機能が一致している。
- (VI) 辞書で見られなかった活用ではあるが、『BCCWJ』の実例から次のような文法機能が確認される。具体的には、「白々しい」は形容詞の名詞化として、「黒々」、「青々」は形容動詞タリ活用として、「青々」はサ変動詞として使用されている。

上記の考察により、辞書とコーパスで見られた日本語における基本色彩語の畳語の文法機能は表6のようにまとめられる。

表6 辞書とコーパスから見る日本語における基本色彩語の文法機能

出典		『学研国語大辞典第2版』 (1988)	『小学館デジタル大辞泉』	『小学館日本国語大辞典第2版』 (2001)	『岩波広辞苑第7版』 (2018)	『BCCWJ』
文法機能						
白	白白	副詞	副詞	副詞、 自サ	×	副詞、 自サ
	白白 しい	形容詞	形容詞シク活用	形容詞シク活用	形容詞活用	形容詞、 名詞
黒	黒黒	副詞、 自サ	副詞	副詞	×	副詞、 自サ、 形動タリ
	黒黒 しい	×	×	形容詞	×	×
赤	赤赤	副詞	副詞	副詞、 名詞	×	副詞
	赤赤 しい	×	×	×	×	形容詞
青	青青	副詞、 自サ	副詞、 動詞	副詞、 形動タリ	×	副詞、 自サ、 形動タリ
	青青 しい	×	×	形容詞シク活用	×	形容詞

次に、中国語における基本色彩語の疊語の文法機能を見ていく。『講談社中日辞典第3版』(2010)、『小学館中日辞典第3版』(2016)を調べた結果は中国語における基本色彩語の疊語“白白(bái bái)”、“白茫茫(bái máng máng)”、“黑压压(hēi yā yā)”、“红彤彤(hóng tóng tóng)”、“绿油油(lǜ yóu yóu)”しか見当たらなかった。以下では、抽出した“白白(bái bái)”、“白茫茫(bái máng máng)”、“黑压压(hēi yā yā)”、“红彤彤(hóng tóng tóng)”、“绿油油(lǜ yóu yóu)”の用例を挙げて、文法機能を考察する。



- (9) a. 白白浪费时间<sup>82</sup>。(『講談社中日辞典第3版』2010:30)  
 b. 白茫茫的湖水<sup>83</sup>。(『講談社中日辞典第3版』2010:32)
- (10) a. 会场里黑压压地挤满了人<sup>84</sup>。(『講談社中日辞典第3版』2010:683)  
 b. 黑压压的乌云布满了天空<sup>85</sup>。(『講談社中日辞典第3版』2010:683)
- (11) 红彤彤的朝阳<sup>86</sup>。(『講談社中日辞典第3版』2010:690)
- (12) 绿油油的麦苗<sup>87</sup>。(『講談社中日辞典第3版』2010:1063)

まず、語基“白 (bái)”である基本色彩語の疊語は (9a) の連用修飾用法として、(9b) の連体修飾用法として使用されている。そして、語基“黑 (hēi)”である基本色彩語の疊語は (10a) の連用修飾用法として、(10b) の連体修飾用法として使用されている。また、語基“红 (hóng)”である基本色彩語の疊語は (11) の連体修飾用法のみとして使用されている。語基“绿 (lǜ)”である基本色彩語の疊語も (12) の連体修飾用法のみとして使用されている。

次に、『CCL』を用い、実際の言語使用において見られた基本色彩疊語の文法的特徴を考察する。基本色彩疊語の疊語“白白 (bái bái)”は1,817例で、“黑黑 (hēi hēi)”は564例で、“红红 (hóng hóng)”は732例で、“绿绿 (lǜ lǜ)”は50例である。基本色彩疊語の疊語“白茫茫 (bái máng máng)”は363例であり、“黑压压 (hēi yā yā)”は482例であり、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”は202例であり、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”は398例である。以下では、基本色彩語の疊語の用例を挙げて分析を行う。

- (13) a. 不花出去，我不是白白吃亏<sup>88</sup>？(戴厚英著《流泪的淮河》1999)  
 b. 年纪已到了四十的边缘，可是一无所成，白白地活了三十九个年头<sup>89</sup>。(谢冰莹著《生日》1946)  
 c. 她在黑暗中似乎看见了他白白的牙齿<sup>90</sup>。(张承志著《北方的河》1984)

<sup>82</sup> 「時間をむだにする。」(筆者訳)

<sup>83</sup> 「白くて輝いている湖面である。」(筆者訳)

<sup>84</sup> 「会場の中には人がびっしりと集まっている。」(筆者訳)

<sup>85</sup> 「空いっぱいには黒雲が覆っている。」(筆者訳)

<sup>86</sup> 「真っ赤な朝日である。」(筆者訳)

<sup>87</sup> 「青々としたムギの苗である。」(筆者訳)

<sup>88</sup> 「それを使わず、損しているのではないかと思う。」(筆者訳)

<sup>89</sup> 「40代も終わりに近づいてきたが、何も達成されず、39年間を無駄に過ごしてしまった。」(筆者訳)

<sup>90</sup> 「彼女は暗闇の中で、彼の白い歯を見たようだった。」(筆者訳)

- d. 草甸子上白茫茫的一片积雪<sup>91</sup>。(宋学武著《干草》1984)
- (14) a. 他看着不远处黑黑的炊烟<sup>92</sup>。(严歌苓著《穗子物语》2005)
- b. 月台上挤满了黑压压的人群<sup>93</sup>。(老鬼著《血色黄昏》2010)
- (15) a. 他眼睛红红的，不知又在哪儿喝了酒<sup>94</sup>。(张抗抗著《白罂粟》2017)
- b. 红彤彤的太阳从东方慢慢升起来了<sup>95</sup>。(周而复著《上海的早晨》1958)
- (16) a. 我们在绿绿的草地上奔跑，惊起一群群蚂蚱翻飞<sup>96</sup>。(宋学武著《干草》1984)
- b. 正当夏日时节，平原上庄稼长得绿油油的<sup>97</sup>。(梁斌著《红旗谱》1957)

まず、語基“白 (bái)”である基本色彩語の疊語は(13a)と(13b)の連用修飾用法として、(13c)と(13d)の連体修飾用法として使用されている。そして、語基“黑 (hēi)”である基本色彩語の疊語は(14a)と(14b)の連体修飾用法として使用されている。また、語基“红 (hóng)”である基本色彩語の疊語は(15a)の述語用法、(15b)の連体修飾用法として使用されている。最後、語基“绿 (lǜ)”である基本色彩語の疊語は(16a)の連体修飾用法、(16b)の補語用法として使用されている。以上の考察結果から、形容詞としての連体修飾用法は全ての基本色彩語の疊語が共通していることが分かった。そのため、形容詞としての連体修飾用法は基本色彩語の疊語の基本的な用法だと考えられる。一方、副詞としての連用修飾用法は“白白 (bái bái)”と“白茫茫 (bái máng máng)”のみで確認された。

また、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黑压压 (hēi yā yā)”、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”は量詞“一片 (yī piàn)”と共起する用例が半分以上に占めている。以下、それぞれの用例を見る。

- (17) a. 麦地里压上了一尺厚的雪，成了白茫茫一片雪野<sup>98</sup>。(刘震云著《故乡天下黄花》2009)
- b. 雪越下越大，满世界白茫茫<sup>99</sup>。(张平著《十面埋伏》2009)

<sup>91</sup> 「草原は白い雪で覆われている。」(筆者訳)

<sup>92</sup> 「彼は遠くないところに黒い煙が見えた。」(筆者訳)

<sup>93</sup> 「ホームは人々で混雑していた。」(筆者訳)

<sup>94</sup> 「彼の目は赤くて、どこでまた飲んだのか分からない。」(筆者訳)

<sup>95</sup> 「真っ赤な太陽が東からゆっくりと昇ってきた。」(筆者訳)

<sup>96</sup> 「私たちは緑の芝生で走ったら、バッタが驚いて、跳んでいた。」(筆者訳)

<sup>97</sup> 「夏の時点で、畑にある野菜が青々と育っている。」(筆者訳)

<sup>98</sup> 「麦畑が高さ一尺の雪に覆われているので、広大な雪原になった。」(筆者訳)

<sup>99</sup> 「雪がどんどん積み重なり、一面銀世界になった。」(筆者訳)

- (18) a. 饭堂里热哄哄的，黑压压一片人群<sup>100</sup>。(周而复著《上海的早晨》1958)  
 b. 走出那一片黑压压的树林，她再也不愿往后看一眼了<sup>101</sup>。(残雪著《残雪自选集》2004)
- (19) a. 位于市中心的艺术桥被装饰得红彤彤一片<sup>102</sup>。(新华社 2004 年 12 月份新闻报道)  
 b. 入夜时分，华灯初上，整个大街小巷一片红彤彤的景象，令人心动<sup>103</sup>。(新华社 2004 年 9 月份新闻报道)
- (20) a. …年前播下种子，开春已绿油油一片<sup>104</sup>。(人民日报 1995 年 5 月份新闻报道)  
 b. 日前，我路过那里，只见昔日蒿草丛生的开发区占地，已被一片绿油油的麦苗所覆盖<sup>105</sup>。  
 (人民日报1994年第1季度报道)

(17) ~ (20) から分かるように、“一片 (yī piàn)” は基本色彩語の疊語の前後に現われる。“一片 (yī piàn)” は「一面、見渡す限り (の)」と解釈し、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黑压压 (hēi yā yā)”、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)” は面積が大きく、見渡す限り続いている空間を修飾するのは基本的な述語用法として使用されることが考えられる。

以上の考察に基づき、次のようなことが明確になった。

- (I) “白白 (bái bái)”、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黑压压 (hēi yā yā)”、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)” は形容詞として連体修飾用法、述語用法、補語用法が使用されている。
- (II) 各辞書と異なり、『CCL』では、“黑黑 (hēi hēi)”、“红红 (hóng hóng)”、“绿绿 (lǜ lǜ)” は形容詞としての連体修飾用法と連用修飾用法が使用されている。
- (III) 各辞書と『CCL』においては、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黑压压 (hēi yā yā)”、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)” の文法機能が一致している。
- (IV) 各辞書と異なり、『CCL』では、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黑压压 (hēi yā yā)”、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)” は量詞“一片 (yī piàn)” とよく共起する。

<sup>100</sup> 「食堂は賑やかで、人々で混雑している。」(筆者訳)

<sup>101</sup> 「暗くなった森から出ると、彼女は二度と振り返らなかった。」(筆者訳)

<sup>102</sup> 「市の中央区にある芸術の橋は装飾されていて、真っ赤である。」(筆者訳)

<sup>103</sup> 「夜は灯りがついていて、街全体があかくなり、心温まる。」(筆者訳)

<sup>104</sup> 「年末に植え付けられた種は春になって、緑の葉が出てきている。」(筆者訳)

<sup>105</sup> 「数日前、そこを通りかかったとき、よもぎが生い茂っていたが、今はもう小麦の苗で覆われている。」(筆者訳)

上記の考察により、辞書とコーパスで見られた中国語における基本色彩語の疊語の文法機能は表7のようにまとめられる。

表7 辞書とコーパスから見る中国語における基本色彩語の文法機能

出典		『講談社中日辞典第3版』 (2010)	『小学館中日辞典第3版』 (2016)	『CCL』
文法機能				
白	白白	副詞	副詞	副詞、 形容詞
	白茫茫	形容詞	形容詞 (～的)	形容詞
黒	黒黒	×	×	副詞、 形容詞
	黒圧圧	形容詞	形容詞 (～的)	形容詞
紅	紅紅	×	×	副詞、 形容詞
	紅彤彤	形容詞	形容詞 (～的)	形容詞
緑	緑緑	×	×	副詞、 形容詞
	緑油油	形容詞	形容詞 (～的)	形容詞

#### 4.4 基本色彩語の疊語の使用特性

本節では、『BCCWJ』において、基本色彩語の疊語「白々」、「黒々」、「赤々」、「青々」はどのジャンルにおいて特有の使用がされているかを考察する。『BCCWJ』における13種類のジャンルの中で、「書籍 (出版、図書館)」、「ベストセラー」、「ブログ」というジャンルは書き手が読み手に向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものであるジャンルの方が特徴的である。それに対して、「法律」、「国会会議録」、「白書」というジャンルは書き手が読み手に向けて何かの事実や情報などを正確に表現したものであるジャンルの方が特徴的である。調べた結果は図1のようにまとめられる。表8に示すように、まず、基本色彩語の疊語「白々」、「黒々」、「赤々」、「青々」は13種類のジャンルにおいて、「書籍 (出版、図書館)」、「ベストセラー」、

「ブログ」の使用頻度が最も高いことが確認できた。一方、「法律」での用例が確認できず、「国会会議録」と「白書」での用例も少ないことが確認できた。以上の考察結果から、書き手が読み手を向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものである「書籍（出版、図書館）」、「ベストセラー」、「ブログ」において、基本色彩語の畳語「白々」、「黒々」、「赤々」、「青々」が特徴的である。石川（2017）では、教科書において「神々」、「国々」などの畳語が特徴的であり、新聞・雑誌において、「次々」、「時々」などの畳語が特徴的であると述べている。基本色彩語の畳語「白々」、「黒々」、「赤々」、「青々」は他の畳語の使用特徴と異なることが推察できた。「書籍（出版、図書館）」と「ベストセラー」と「ブログ」においては、基本色彩語の畳語「白々」、「黒々」、「赤々」、「青々」が特徴的と言える。

次に、基本色彩語の畳語「白々しい」、「赤々しい」、「青々しい」はどのジャンルにおいて特有の使用がなされているかを考察する。その結果、表8のようにまとめられる。表8に示すように、「白々しい」は「書籍（出版、図書館）」、「ブログ」での使用頻度が最も高いことが確認できた。「赤々しい」は僅か2例しかないが、その2例も「図書館・書籍」と「特定目的・ブログ」に出現されている。「青々しい」は僅か2例しかないが、その2例も「出版・書籍」と「特定目的・韻文」というジャンルに出現されている。一方、「法律」、「国会会議録」、「白書」での用例はないことが確認できた。以上の結果から、書き手が読み手を向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものである「書籍（出版、図書館）」、「ベストセラー」、「ブログ」において、基本色彩語の畳語「白々しい」、「赤々しい」、「青々しい」が書き手の思考や内容などを表わしている。

以上、『BCCWJ』から考察した基本色彩語の畳語「白々」、「黒々」、「赤々」、「青々」、「白々しい」、「赤々しい」、「青々しい」のジャンル別の使用分布は表8の通りである。各ジャンル別に分ける。

表8 日本語における基本色彩語の疊語の使用分布

ジャンル別	白白	白白しい	黒々	赤々	赤々しい	青々	青々しい
出版－書籍	25%	27%	29%	20%	0%	26%	50%
出版－新聞	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%
出版－雑誌	0%	1%	3%	1%	0%	2%	0%
図書館－書籍	54%	49%	51%	57%	50%	48%	0%
特定目的－白書	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%
特定目的－ベストセラー	9%	8%	10%	8%	0%	4%	0%
特定目的－知恵袋	0%	8%	2%	2%	50%	2%	0%
特定目的－ブログ	1%	5%	2%	5%	0%	8%	0%
特定目的－法律	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
特定目的－国会会議録	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
特定目的－広報誌	0%	0%	0%	0%	0%	4%	0%
特定目的－教科書	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%
特定目的－韻文	10%	1%	2%	7%	0%	4%	50%

次に、『CMC』を使い、基本色彩語の疊語“白白 (bái bái)”、“黒黒 (hēi hēi)”、“紅紅 (hóng hóng)”、“緑緑 (lǜ lǜ)”がどのジャンルにおいて特有の使用がされているかを考察する。『CMC』における15種類のジャンルの中で、「散文」、「文学」というジャンルは書き手が読み手に向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものであるジャンルの方が特徴的である。それに対して、「公示」、「議事録」というジャンルは書き手が読み手を向けて何かの事実や情報などを正確に表現したものであるジャンルの方が特徴的である。結果は表9のようにまとめられる。表9に示すように、基本色彩語の疊語“白白 (bái bái)”、“緑緑 (lǜ lǜ)”は15種類のジャンルにおいて「散文」での使用頻度が最も高く、“黒黒 (hēi hēi)”、“紅紅 (hóng hóng)”「文学」での使用頻度が最も高いことが分かった。一方、「公示」と「議事録」での用例が見当たらなかったことが確認された。以上の考察結果から、書き手が読み手に向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものである「散文」、「文学」においては、基本色彩語の疊語“白白 (bái bái)”、“黒黒 (hēi hēi)”、“紅紅 (hóng hóng)”、“緑緑 (lǜ lǜ)”が特徴的である。

次に、基本色彩語の疊語“白茫茫 (bái máng máng)”、“黒圧圧 (hēi yā yā)”、“紅通通<sup>106</sup> (hóng tóng tóng)”、“緑油油 (lǜ yóu yóu)”はどのジャンルにおいて、よく使用されているかを考察する。同様に1949年以降の15種のジャンルにおいては、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黒圧圧 (hēi yā yā)”、“紅通通 (hóng tóng tóng)”は「新聞」、「文学」での使用頻度が最も高く、“緑油油 (lǜ yóu yóu)”は「新聞」、「散文」での使用頻度が最も高いことが確認できた。一方、「公示」と「議

<sup>106</sup> 『CCL』では、“紅彤彤 (hóng tóng tóng)”の用例が確認できたが、『CMC』では、“紅彤彤 (hóng tóng tóng)”の用例が見つからなかった。『講談社中日辞典第3版』(2010)では、“紅彤彤 (hóng tóng tóng)”は“紅通通 (hóng tóng tóng)”と同義であると記述されているため、4.4節では“紅通通 (hóng tóng tóng)”のデータを使うことにする。



事録」での用例が確認できなかったとが確認された。以上の考察結果から、書き手が読み手に向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものである「新聞」、「散文」、「文学」において基本色彩語の疊語“白茫茫 (bái máng máng)”、“黑压压 (hēi yā yā)”、“红通通 (hóng tōng tōng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”が特徴的である。

以上、『CMC』から考察した基本色彩語の疊語“白白 (bái bái)”、“黑黑 (hēi hēi)”、“红红 (hóng hóng)”、“绿绿 (lǜ lǜ)”、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黑压压 (hēi yā yā)”、“红通通 (hóng tōng tōng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”のジャンル別の使用分布は表9とおりでである。各ジャンル別に分ける。

表9 中国語における基本色彩語の疊語の使用分布

ジャンル別	白白	白茫茫	黑黑	黑压压	红红	红通通	绿绿	绿油油
新聞	32%	33%	28%	28%	11%	33%	0%	44%
散文	23%	23%	16%	16%	28%	23%	40%	41%
評論	11%	0%	4%	6%	4%	0%	10%	4%
詩歌	0%	11%	4%	0%	4%	11%	40%	0%
レター	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	0%
会話	3%	0%	16%	0%	16%	0%	0%	0%
スピーチ	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
語録	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
脚本	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
公示	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
取扱説明書	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
伝記・日記	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
議事録	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
文学	28%	33%	32%	50%	33%	33%	10%	11%
広告	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	0%

#### 4.5 まとめ

本章は、辞書とコーパスを通じて、日中両言語における基本色彩語の疊語を対象として使用実態に関する基礎調査を行い、同一語基で、かつ繰り返しの形式上の類像性という形式が表される日中両言語における基本色彩語の疊語の使用実態の特徴を明確にした。4.2節と4.3節では、辞書記述とコーパス实例に基づき、構造的な特徴（表記形式と読み方）と文法機能を考察した。4.4節では、コーパスを通じて、ジャンル別の使用傾向を分析した。以下では、本章で考察した基本色彩語の疊語について、構成要素との関連性や類似表現との相違点、構成要素などから十分に予測できない使用実態をまとめる。以下に实例とともに使用実態を示す。

まず、表記形式についての考察した結果、日中両言語における基本色彩語の疊語の表記形式

に相違点が確認できた。日本語の場合は、同一語基の繰り返しによる「白白」、「黒黒」、「赤赤」、「青青」が見出し語として記述されているが、中国語の場合は同一語基に後接する接辞を付け加えるもの“白茫茫 (bái máng máng)”、“黒压压 (hēi yā yā)”、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”が見出し語として記述されている。その差異により、日中両言語における基本色彩語の疊語の意味拡張は異なる可能性がある。基本色彩語の中で、日中両言語における「白」を語基とする基本色彩語の疊語は最も基本的な用語だと考えられ、他の色彩語より使用がほぼ定着していると考えられる。また、日中両言語における基本色彩語は同一語基の繰り返しによって形成された疊語においては、カテゴリー内の成員の異なりを喚起する表記形式の差異が見られた。すなわち、基本色彩語のカテゴリーの成員は等しくカテゴリーに所属しているわけではなく、典型と異なる各種の成員があるというカテゴリーの性質が解釈の基盤となっている。

日本語における基本色彩語の疊語「白白」、「黒々」、「赤々」、「青々」には「漢字+々」、「平仮名+平仮名」などの4～5種類の表記形式が使用されているが、中国語は1種類「漢字+漢字」しか確認できなかった。それは、同じ漢字を使用している日本語と中国語は文字体系が異なっているため、疊語の構造的特徴に影響を与える最も大きな要因であると考えられる。

また、日中両言語における基本色彩語の疊語の読み方に相違点があることが確認できた。日本語における基本色彩語の疊語は音素の変化が見られるのに対して、中国語における基本色彩語の疊語は音素が変化しないことが分かった。日本語における基本色彩語の疊語は、さらに後ろの語の語頭が濁音に変わる「白白」と「黒々」と後ろの語の語頭が濁音に変わらない「赤々」と「青々」に分けられる。

次に、文法機能についての考察結果は下記の通りである。日本語の「白白」、「黒々」、「赤々」、「青々」は副詞として使い、接続助詞「と」が後接した連用修飾用法がよく使用されているのに対して、中国語の“白白 (bái bái)”、“黒黒 (hēi hēi)”、“红红 (hóng hóng)”、“绿绿 (lǜ lǜ)”は形容詞として使い、後接助詞である「的」が後接した連体修飾用法、補語用法、述語用法がよく使用されることが分かった。一方、同一語基に後接する場合、日中両言語における基本色彩語の疊語はどちらも形容詞として、連体修飾用法がよく使用されることが分かった。以上の考察結果から、日中両言語における基本色彩語は疊語化することによって、品詞を変える場合と品詞を変えない場合に分けられる。また、日本語の基本色彩語の疊語と異なり、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黒压压 (hēi yā yā)”、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”は量詞“一片 (yī piàn)”とよく共起することが確認できた。品詞変化の有無と量詞との共起から、日

中両言語における基本色彩語の畳語の意味拡張には相違が存在すると推測できる。

また、基本色彩語の畳語はどのジャンルにおいて特有の使用がされているかを考察した。その結果は、書き手が読み手に向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものであるジャンルでは、基本色彩語の畳語が特徴的である。それは、日本語だけでなく、中国語でも確認できた。このような結果は石川（2017）で述べられている他の畳語の使用特徴と異なり、基本色彩語の畳語の特有の特徴として考えられる。上記の考察結果から、基本色彩語の畳語は特定のジャンルで何らかの意味で使用されると推測できる。それについて第6章で詳しく考察する。

以上、辞書とコーパスより基本色彩語の畳語のデータを網羅的に収集し、基本色彩語の畳語の構造的特徴、文法機能、使用特性は、先行研究で述べている他の畳語の特徴と比較し、相違点を明確にした。考察した結果は表10にまとめられる。

表10 日中両言語における基本色彩語の畳語の使用実態

対象 項目	日本語		中国語	
		I : 白々、黒々、赤々、青々	II : 白々しい、黒々しい、赤々しい、青々しい	III : 白白、黒黒、红红、绿绿
構造的特徴	同一語基の繰り返しによる構造形式		同一語基に後接する接辞による構造形式	
文法機能	品詞変化あり I : 副詞（連用修飾用法） II : 形容詞（連体修飾用法）		品詞変化なし III、IV : 形容詞（連体修飾用法、補語用法、述語用法）	
使用特性	I、II : 「書籍」、「ブログ」		III、IV : 「新聞」、「散文」、「文学」	

本章の考察から、形式上の類像性の観点に基づき、基本色彩語の畳語は他の畳語と類似している構造的特徴、文法機能を表す場合もあるが、構成要素などから十分に予測できない文法機能、使用特性も明らかになった。丸山・星野（2019）では、国語辞書に掲載されているのは、「規範性」「可能性」としての格情報であり、コーパスに現れるのは「実態」としての格情報であると指摘している。従って、国語辞書に記載されていても、実際にはほとんど使われておらず、コーパスに現れないものがある。また、逆にコーパスに現れるのに（実際は使われているのに）、国語辞書に載っていないものもあるとしている。前者は古い用法に、後者は新しい用法の場合が多い。国語辞書とコーパスを照らし合わせることで、今後の国語辞書に記載すべき情

報は何なのかを探る可能性を示すと述べている。こうした同じ語基を持つ基本色彩語の豊語のデータベースを作成することによって、より多角的な視点から分析することが可能だと考えられる。その1つに、第5章においては、本章で収集した用例のデータベース中の共起語を利用して、知覚者から感覚の持ち主を概念化することを明らかにする。引き続き、第6章においては、本章で収集した用例のデータベース中の用例を分析し、基本色彩語の豊語の意味拡張を明確にすると期待される。

## 第5章 相互作用による日中両言語における基本色彩語の畳語の特徴

同一語基で、かつ繰り返しの形式上の類像性に基づき、第4章で考察した日中両言語における基本色彩語の畳語の使用実態は書き手が読み手に向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものであるジャンルにおいて比較的によく使用されている傾向が見られる。この結果は石川（2017）が述べられている日本語の畳語の使用特徴と異なり、基本色彩語の畳語の特有の特徴として考えられる。例えば、『BCCWJ』から「林立した木々が目に痛いほど白々としていて美しい」、『CCL』から“昔日碱滩白茫茫，今日一派新景象<sup>107</sup>”が挙げられる。この種の使用特徴は、文字通りの五感や体感に関わる表現として使われるだけではなく、認知主体の感情や心の世界の比喩的な表現としても使われていると考えられる。そこで、本章では、『分類語彙表』を用い、日中両言語における基本色彩語の畳語が共起する対象の性質を考察する。そのうえで、言語形式と意味内容との間の類似関係が反映されるかを検証する。具体的には、カテゴリーの周辺例を焦点化する働きをする「相互作用的性質」を用い、カテゴリーの成員に典型的なもの（視覚による客観的な叙述）から周辺のなもの（視覚による主観的な叙述）までの段階性があることを分析する。最後に、話者（認知主体）と対象（共起語）との相互作用によって得られた、視覚にかかわる身体的な経験が話者の主観的な判断に関わる叙述に比喩表現を明らかにする。

### 5.1 『分類語彙表』による調査について

先行研究では名詞メタファーの意味分析に用いられている知覚者と知覚対象の意味の相互作用に基づき、色彩形容詞メタファーの意味分析を行った（楠見 1994、坂本・佐野 2004、坂本・古牧 2005、坂本・内海 2007 など）。そのうち、坂本・内海（2007）は、色彩形容詞と共起名詞がどのように作用し、どのようなメタファーの意味が喚起されるのかという心理実験を行って分析した。分析結果としては、まず、「赤い」、「黒い」、「青い」から形成されるメタファーにおいては、否定的なイメージが喚起されている。そして、「白い」から形成されるメタファーにおいては、肯定的な意味の回答と否定的な意味の両方が見られ、特に否定的意味

<sup>107</sup> 「昔の塩性沼沢は白々とした景色だったが、今は新しい景色に生まれ変わった。」（筆者訳）



が多く喚起されるという傾向が得られなかった。

そこで、本章では、坂本・内海（2007）の名詞メタファーによる意味喚起という観点に基づき、『分類語彙表』を用いて、基本色彩語の畳語が共起する名詞（対象の性質）を明確にし、喩辞である基本色彩語の畳語と被喩辞である名詞の意味の相互作用という現象を把握する。

また、国立国語研究所（2004）では、『分類語彙表』は一般に1つの言語体系の中で、その語彙を構成する1つ1つの単語が、それぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表わし得る意味の世界を分類し、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。すなわち、その分類の各項には、同義の単語が集められることになる。これらの利点を生かすことで、より中立的な立場、従来の研究では見過ごされてきた現象を発見できる可能性が開かれると述べている。そして、柏野（2006）では、『分類語彙表』は、語彙の分布や偏りを見る特徴を持ち、「語が本来もつ性質によって分類することを優先する」という属性分類を採用している。また、中本・李（2011）は、ある調査結果、語彙の一覧表が得られたとする。その語彙の一覧を意味で分類することは、一見簡単なことのように思えるが、人の内省だけでは体系的な分類が難しい。そこで、『分類語彙表』のようなデータを使うことで、ある程度の体系化ができる旨を指摘している。よって、本章では、諸先行研究を参考にし、『分類語彙表』を用いて、基本色彩語の畳語が共起する名詞（対象の性質）を分類し、畳語の分布特徴を明確にする。

『分類語彙表』の名詞分類の仕方は、「何、何ごと、何もの、どれ、いつ、どこ、いくつ」などの概念を表す語とそれらを問いとしたときの答えとなるべき語である。名詞の仲間（体の類）には、「1.1 抽象的關係」、「1.2 人間活動の主体」、「1.3 人間活動—精神および行為」、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」、「1.5 自然—自然物および自然現象」という5つの分類項目として分類される。

『分類語彙表』では、5つの分類項目についての説明は次のようである。

「1.1 抽象的關係」は、事実、存在、状態、力、変化、空間、時間、形、数量を含むものの。

「1.2 人間活動の主体」は、活動の主体であるもの。

「1.3 人間活動—精神および行為」は、人間活動そのものの様相—精神と行為のもの。

「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」は、人間活動の相手として存在するもの、  
になるが、活動の相手は、人間が直接活動の結果として作り出した物および作り



出すために利用するもの。

「1.5 自然—自然物および自然現象」は、人間の主体的活動からは比較的自由に、外界として存在するもの。

(『分類語彙表』2004:12)

また、第4章の考察から明らかなように、日中両言語における基本色彩語の疊語は書き手が読み手に向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したジャンルにおいては頻繁に使用されているのが特徴的である。すなわち、基本色彩語の疊語に関わる次元は、具体的な視覚の感覚表現を特徴づけるだけでなく、話者の心理的、感情的な内面世界の主観的な概念を比喩的に特徴づけられていると考えられる。

山梨(2010)では、認知主体が外部世界に視点を投げかけ、その世界の対象や関係を主観的に概念化していくと指摘している。具体的な説明は下記の通りである。

人間には、自分ないしは主体としての自分を背景化し、鳥瞰図的な視点から世界を眺めていく能力も備わっている。しかし、環境のなかに投げ込まれ、環境とインターアクトしていく主体としてみた場合、われわれはまず自己を中心にして環境としての外界を認知し、環境との相互作用によって得られる経験を通して(いわば、<自己中心的>に)世界を意味づけしていく。この<自己中心的>な視点(ないしは、<人間中心的>な視点)からみるならば、人間描写をふくむ日常言語の主観的な意味の世界が、外界との相互作用によって得られるわれわれの身体的経験や五感を中心にして発現してくるという事実は自然に理解される。

(山梨2010:127)

山梨(2010)のご指摘に基づき、外界との相互作用により、基本色彩語の疊語は認知主体が外部世界に視点を投げかけ、その世界の対象や関係を主観的に概念化していく結果の反映としてとらえ直すことが可能になると考えられる。

ここでは、基本色彩語の疊語「白々」を挙げて説明する。例えば、典型例として、「白々と夜が明ける」または「白々とした夜明け」などの例から明らかなように、基本的には、外部世界の対象の文字通り、視覚による対象の特徴を直接把握できる表現として使われる。しかし、それに対し、「白々とした空虚感」、「白々とした気分」の例のように、主体の判断に関わる意味と

しても用いられる。ただし、この場合には、視覚に基づく外部世界の対象に関する何らかの視覚がかかわっていると思われる。「白々とした空虚感」、「白々とした気分」の例のように、基本色彩語の豊語の対象の特徴は、元々対象に備わっているものではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質として認知されていることを捉えられる。相互作用による対象の性質について、篠原（2008）では、「知覚者の心身状態」から「対象の性質」への読み替えは、知覚者が対象と接する際得られる同じ身体経験の反復から生ずると述べている。ここでは、篠原（2008）の例と説明を引用する。「例えば、誰に対しても怒りをあらわにするような人がいれば、我々は、それを様々な知覚者の（または同一の知覚者による複数の）同一経験の反復としてではなく、元来対象の方に「怒りっぽい」という性質が備わっていると理解したくなるだろう（篠原 2008:99）。

本章では、山梨（2010）と篠原（2008）の観点を参考にして、基本色彩語の豊語で表される対象の性質は、対象に備わっているものではなく、対象の側面に知覚者（認知主体）の心身状態をもたらす性質が備わっているものを明らかにすることを目的とする。

基本色彩語の豊語が共起する名詞（対象の性質）の分布特徴を考察する前に、まず基本色彩語との共起名詞の性質をみておく。『分類語彙表』を用いて基本色彩語「白い」、「黒い」、「赤い」、「青い」が共起する名詞（対象の性質）を調べてみた結果は表1のようにまとめられる。

表1 基本色彩語が共起する名詞の性質の割合

	1.1 抽象的關係	1.2 人間活動の 主体	1.3 人間活動— 精神および行為	1.4 人間活動の生産 物—結果および用具	1.5 自然—自然物 および自然現象
白い	2.4%	0.5%	0.2%	40.5%	56.4%
黒い	8.6%	0.7%	0.2%	40.1%	50.4%
赤い	3.3%	0.4%	0.2%	38.6%	57.5%
青い	2.5%	0.3%	0.1%	19.7%	77.4%

表1に示したように、日本語における基本色彩語はいずれも「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞とよく共起し、その次は「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」とも共起しやすい。そのうち、基本色彩語の「青い」は「1.5 自然—自然物および自然現象」に属

する名詞と最も高く 77.4%も占めている。そして、日本語における基本色彩語はいずれも「1.2 人間活動の主体」「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞とはあまり共起しない。

児玉(2010)では、経験による知識と言語表現による文脈は相互に影響を与え合い、影響を受ける関係にある。その過程で語義は創造的に意味を拡大したり、縮小したりしながらも、コロケーションによっても共起する語に制限を受けている。語義が無制限に拡大するとあいまいさが増し、言語記号の役割をはたせなくなる。そこで経験による知識や文脈、あるいはコロケーションは統語・意味上の制約の中で、一方では語義を拡大し、他方では語義の拡大を制約している。繰り返し進行している語義の拡大と制御の結果が言語の変化をもたらしている。

表1の日本語における基本色彩語基本形式の特徴を踏まえ、『分類語彙表』を用いて、基本色彩語の豊語の共起名詞の属性を明確にし、経験による知識や文脈、あるいはコロケーションによる統語・意味上の制約を考察し、語義の変化を明らかにする。

以下、5.2節～5.5節において、まず『分類語彙表』を用いて、基本色彩語の豊語が共起する対象の性質を分類し、豊語の分布特徴を考察したうえで、各基本色彩語の豊語で表される対象の性質は、知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」としての関係性を明確にする。

## 5.2 語基「白」を含む基本色彩語の豊語

第4章で『BCCWJ』から収集した「白々」、「白々しい」の用例のデータベースを利用し、手作業で名詞と共起する用法(例えば、「〇〇が白々としている」、「白々とした〇〇」など)を抽出する。抽出した結果、「白々」は名詞と共起する用法が55例、「白々しい」は名詞と共起する用法が51例認められた。

まず、『分類語彙表』に基づき、豊語「白々」が共起する対象の性質を分類し、説明する。「1.1 抽象的關係」に属する名詞には「雰囲気」、「空気」などがあり、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞には「感傷」、「気分」などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には「壁」、「街路」などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には「陽射し」、「景色」などがある。55例の中で、「1.2 人間活動の主体」に属する名詞と共起する例は確認できなかった。考察した結果は表2にまとめられる。

表2 「白々」との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	空気、歳月、場所、静寂、時刻
1.2 人間活動の主体	×
1.3 人間活動—精神および行為	感傷、気分、脳裏、酔い
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	壁、街路、石膏、陶器、屋根、街灯、灯、家並み
1.5 自然—自然物および自然現象	月 <sup>108</sup> 、景色、木々、野面、空、雪、太陽、夜、陽射し、脛、川、体、髪、唇の色

上記の「白々」との共起名詞の一覧表は、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く 69.1%占めている。その次は、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具 (16.4%)」、「1.1 抽象的關係 (10.9%)」、「1.3 人間活動—精神および行為 (3.6%)」となる。

次に、「白々」がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

- (1)…とうとう夜明けの白々とした光がさした。(BCCWJ PB59\_00547: トンケ・ドラフト『王への手紙』2005)
- (2)秋の夕暮れ時の、淡く白々とした陽射しが一斉に彼の後ろ姿を包みこんだ。(BCCWJ PB39\_00229: 小池真理子『一角獣』2003)
- (3)羽塩の森は南会津随一と聞いていたが、なるほど、ほっそりしたのや、ほどよくのびたのや、林立した木々が目に痛いほど白々としていて美しい。(BCCWJ LBm9\_00029: 池内紀『山の朝霧里の湯煙』1988)
- (4)四十六年一月、業火に焼けおちてひと月余り、ほとんど跡片づけは終ってただ荒涼とした空間だけが、冬の陽射しのなかに白々としていた。(BCCWJ LBi2\_00012: 河原敏明『天皇家三代の半世紀』1994)

<sup>108</sup> ここでは、認知言語学の上位語の概念を用い、ある言葉が、別の言葉を含む、より一般的、より総称的、より抽象的なものを指すときにいう。例えば、「白々」と共起する名詞は「月の光」、「月光」、「月」などが挙げられる。その中では、「月」が「月の光」、「月光」の上位語として考えられる。以下同様である。

(1)～(4)は、「光」、「陽射し」、「木々」、「跡片づけ」の自然風景の色を描写する用法である。(1)と(2)のように太陽などは発光体から出る光線であるため、白色を用いて修飾するのが一般的に認識される。しかし、(3)の樹木は緑色、(4)の「跡片づけ」は茶色に一般的に認識されたにもかかわらず、「白々」を用いて修飾することが分かった。樹木、植物などは「白」という色相として認識できるかを検証するため、『BCCWJ』を用い「白色の木々」、「白の木々」、「白い木々」の用例があるかを調べた。調べた結果は「白色の木々」、「白の木々」、「白い木々」の用例は1例もなかったことが明らかになった。よって、(3)、(4)の場合は、元々対象に備わっているものではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「見え透いている」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「知覚者の心身状態」から「対象の性質」へ読み替えることで、「白々」は白色以外の名詞と共起することができた。すなわち、基本色彩語の暁語「白々」で表される対象の性質は、話者（認知主体）と対象（共起語）との相互作用によって得られた、視覚にかかわる身体的な経験が話者の主観的な判断に関わる叙述に比喩的に使われていることが確認できた。よって、基本色彩語の暁語「白々」の意味は視覚を通して対象と接する際得られる自らの身体経験からもたらす対象の性質が認識し直されると考えられる。以上の考察結果は同一語基である「白々しい」にも同様に説明できるかを考察していく。

「白々しい」と共起する名詞の語彙を取り上げて分析する。「1.1 抽象的關係」に属する名詞には「雰囲気」、「空気」などがあり、「1.2 人間活動の主体」に属する名詞には「千代」、「日本臣民」などがあり、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞には「気持ち」、「態度」などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には「台詞」、「記事」などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には「午後の陽射し」、「朝日」などがある。考察した結果は表3にまとめられる。

表3 「白々しい」との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	空気、雰囲気、もの、こと
1.2 人間活動の主体	千代、日本国民
1.3 人間活動—精神および行為	気持ち、気分、嘘、言葉、台詞、態度、返事、結婚、責任逃れ

1.4 人間活動の生産物—結果および用具	白刃、記事
1.5 自然—自然物および自然現象	朝日、陽射し、目

上記の名詞の語彙データは、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「白々しい」と共起する名詞の性質は「1.3 人間活動—精神および行為」は最も高く 76.5%占めている。その次は「1.4 人間活動の生産物—結果および用具 (7.8%)」、「1.5 自然—自然物および自然現象 (7.8%)」、「1.1 抽象的關係 (3.9%)」、「1.2 人間活動の主体 (3.9%)」となる。

次に、「白々しい」がよく共起する「1.3 人間活動—精神および行為」という用法において、どう解釈できるのかを分析する。以下では、「白々しい」の例を用い、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

(5) 研修が進むにつれて、肯定的にこたえる研修医の割合が増えた項目は、…「知らない者が医療問題に口を出すべきでない」、「患者のためにという言葉は白々しい」…などだった。(BCCWJ LBq4\_00012: 塚田真紀子『研修医はなぜ死んだ?』2002)

(6) この三連戦で登板もありますが、結果で勝負します。私はこの一問一答を読んで、怒りがこみ上げてきた。すべてが白々しい嘘だからである。(BCCWJ 0B3X\_00195: 中牧昭二『さらば桑田真澄、さらばプロ野球』1990)

(7) それはあくまでも形式であって、助役などの職場の上司が所属組合や活動歴をもとにリストをつくった。責任逃れが白々しい。(BCCWJ LBd6\_00018: 鎌田慧『国鉄処分』1989)

(8) 山村さんは、少年のことばをきいているうちに、白々しい気持ちになってきた。ほんとうのこととまるで反対のことをいっている。(BCCWJ LBan\_00001: 長崎源之助『長崎源之助全集』1986)

(5)～(8)は「言葉」、「嘘」、「責任逃れ」、「気持ち」の人間の言動を描写する用法である。「言葉」、「嘘」、「責任逃れ」、「気持ち」は具体的な物ではないため、「白色」の性質、属性と解釈できない。また、これらの状況は恒常的ではなく、文脈において話者が目の前の状況をどう感じるのかを描写し、一時的な使用用法として使われる。(5)は肯定的にこたえる研修項目を例として挙げ、その状況を理解したうえで、話者がやってはいけない出来事をはっきりと分かった文である。(6)も同様で、話者がやってはいけない出来事をはっきりと分かった文で



ある。(7)は勝負の結果を理解したうえで、言っていると異なり、裏切られたことが明らかになった文である。(8)も同様で、言っていると異なり、裏切られたことが明らかになった文である。

「白々しい」は(5)～(8)のように、元々対象である「言葉」、「嘘」、「責任逃れ」、「気持ち」に備わっているものではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「見え透いている」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「白々しい」は知覚者が対象と接する際得られる同じ身体経験の反復から生ずる「好ましくない出来事が起きる」というフレームを前提に理解され、〈よくない〉というマイナスな対象の性質が特徴付けられたと考えられる。

上述した考察から、「白々」と「白々しい」には次の使い分けがあることが読み取れる。

(I)『分類語彙表』に基づき、「白々」は「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起しやすい。基本的「白々」の叙述には、「陽射し」、「景色」などの外部世界の自然風景を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。それに対し、分類語彙表に基づき、「白々しい」は「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞と共起しやすい。基本的「白々しい」の叙述には、「気持ち」、「態度」などの外部世界に接した際それに対して感じた心の状態を表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。

(II)「白々しい」は「1.2 人間活動の主体」に属する名詞と共起することが可能であるが、「白々」は「1.2 人間活動の主体」に属する名詞と共起する例が確認できなかった。話者は「白々しい」を用い、視覚を通して対象へ相互作用を行う際に、得られる自らの身体経験からもたらす「好ましくない出来事が起きる」というフレームを前提に理解され、〈よくない〉という対象の性質が認識し直されると考えられる。

(I)と(II)から分かるように、本来の基本色彩語「白」は豊語化することで、対象を描写する範囲は、豊語化することによって拡大され、自然風景の広大さと身近に描写する拡張表現の一種として容認される。

以下では、日本語の「白々」、「白々しい」で確認された基本色彩語の豊語の特徴は、中国語の基本色彩語の豊語“白白(bái bái)”と“白茫茫(bái máng máng)”にも同様に解釈できるかを考察する。

まず、『CCL』から得られた“白白(bái bái)”と“白茫茫(bái máng máng)”の用例をエクセルファイルで読み込み、エクセルファイルのデータベース機能を利用して名詞と共起する用法(例えば、“白白(bái bái)〇〇”、“〇〇白白(的)(bái bái (de))”など)を抽出する。そして、

“白白 (bái bái)” は名詞と共起する用法が 211 例、“白茫茫 (bái máng máng)” は名詞と共起する用法が 203 例認められた。また、『分類語彙表』に基づき、それぞれ基本色彩語の疊語と共起する名詞の性質は下記のように分類した。

“白白 (bái bái)” と共起する名詞の語彙を取り上げて分析する。「1.1 抽象的關係」に属する名詞には“两个日子<sup>109</sup> (liǎng gè rì zǐ)”、“五个月<sup>110</sup> (wǔ gè yuè)” などがあり、「1.2 人間活動の主体」に属する名詞には“家伙<sup>111</sup> (jiā huò)”、“你<sup>112</sup> (nǐ)” などがあり、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞には“牺牲<sup>113</sup> (xī shēng)”、“浪费<sup>114</sup> (làng fèi)” などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には“墙<sup>115</sup> (qiáng)”、“蜡烛<sup>116</sup> (là zhú)” などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には“云<sup>117</sup> (yún)”、“柳条<sup>118</sup> (liǔ tiáo)” などがある。考察した結果は表 4 にまとめられる。

表 4 “白白” との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	两个日子、五个月、经费和精力、冤死 <sup>119</sup>
1.2 人間活動の主体	他、你、家伙、漂亮姑娘、西装青年、王金娣 <sup>120</sup>
1.3 人間活動—精神および行為	牺牲、浪费、愚蠢和痛苦、流血和丧命、奔驰数日 <sup>121</sup> など
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	墙、蜡烛、鞋面、餐巾、长白糕、馄饨、路、被单、窗纸 <sup>122</sup> など

<sup>109</sup> 「2日。」(筆者訳)

<sup>110</sup> 「5ヶ月。」(筆者訳)

<sup>111</sup> 「彼ら。」(筆者訳)

<sup>112</sup> 「あなた。」(筆者訳)

<sup>113</sup> 「犠牲。」(筆者訳)

<sup>114</sup> 「無駄。」(筆者訳)

<sup>115</sup> 「壁。」(筆者訳)

<sup>116</sup> 「蠟燭。」(筆者訳)

<sup>117</sup> 「雲。」(筆者訳)

<sup>118</sup> 「柳の枝。」(筆者訳)

<sup>119</sup> 「2日、5ヶ月、資金とエネルギー、冤罪の死亡。」(筆者訳)

<sup>120</sup> 「彼、あなた、あいつ、綺麗な女性、スーツの青年、ワンジンディ(女性名)。」(筆者訳)

<sup>121</sup> 「犠牲、無駄、愚かさと苦痛、流血と死亡、何日間も走り続ける。」(筆者訳)

<sup>122</sup> 「壁、蠟燭、靴の外観、ペーパーナプキン、チャンパイケーキ、ワンタン、道、布団のシーツ、ガラスフ

1.5 自然—自然物および自然現象	太陽、細沙、云雾、鷺群、藕汁、香蘑菇、豆腐、牙齿、脸、大腿、脖子、肚子、水雾、烟雾 <sup>123</sup> など
-------------------	---

上記の名詞の語彙データは、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く 67.9%占めている。その次は「1.3 人間活動—精神および行為 (20.6%)」、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具 (7.8%)」、「1.2 人間活動の主体 (2.2%)」、「1.1 抽象的關係 (1.5%)」となる。

“白白 (bái bái)”がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、どう解釈できるのかを分析する。以下では、“白白 (bái bái)”の例を用い、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用の性質」を考察する。

(9) …是一张人脸，长长的，白白的…。<sup>124</sup> (CCL: 福尔摩斯探案集 04)

(10) …爸爸乐得露出了白白的牙齿…。<sup>125</sup> (CCL: 1994 年报刊精选)

(11) …山间弥漫着白白的云雾。<sup>126</sup> (CCL: 新华社 2001 年 5 月份新闻报道)

(12) 比如在《飘》一书中，郝思嘉的做梦梦到一片白白的雾，象征意义就是自己看不到自己未来的路。<sup>127</sup> (CCL: 心理治疗的意象对话技术)

(9) ~ (12) は“人脸<sup>128</sup> (rén liǎn)”、“牙齿<sup>129</sup> (yá chǐ)”、“云雾<sup>130</sup> (yún wù)”、“雾<sup>131</sup> (wù)”のような自然風景の描写用法である。(9) ~ (12) はそれぞれ“白 (bái)”という色相として

イルム。」(筆者訳)

<sup>123</sup> 「太陽、細かい砂、霞、サギ群れ、レンコンジュース、香りのよいキノコ、豆腐、歯、顔、腿、首、腹、霧、煙霧。」(筆者訳)

<sup>124</sup> 「それは人の顔で、長くて、白い…。」(筆者訳)

<sup>125</sup> 「お父さんは嬉しく、白い歯を覗かせる。」(筆者訳)

<sup>126</sup> 「山の谷間から白々と霧が立ち込めている。」(筆者訳)

<sup>127</sup> 「例えば、『風と共に去りぬ』という本の中で、スカーレット・オハラは視界一面に広がる白い霧の夢を見た。まるで自分の将来が見えないようである。」(筆者訳)

<sup>128</sup> 「顔。」(筆者訳)

<sup>129</sup> 「歯。」(筆者訳)

<sup>130</sup> 「雲と霧。」(筆者訳)

<sup>131</sup> 「霧。」(筆者訳)

認識できるかを検証するため、『CCL』を用い“人脸<sup>132</sup> (rén liǎn)”、“牙齿<sup>133</sup> (yá chǐ)”、“云雾<sup>134</sup> (yún wù)”、“雾<sup>135</sup> (wù)”で検索してみた。中国語では、「顔」は「青白い」、「歯」は「白く明るい色」、のような他の色を帯びた白色が一般的に認識されることが分かった。一方、「霧」は白色と共起した例があったため、一般的に認識されることが分かった。よって、元々対象である“人脸<sup>136</sup> (rén liǎn)”、“牙齿<sup>137</sup> (yá chǐ)”、“云雾<sup>138</sup> (yún wù)”、“雾<sup>139</sup> (wù)”に備わっている「白色または、他の色を帯びた白色」を表しつつ、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「白みがあった感じ、よく見えない」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「知覚者の心身状態」から「対象の性質」へ読み替えることで、“白白 (bái bái)”は“云雾<sup>140</sup> (yún wù)”、“雾<sup>141</sup> (wù)”という自然風景の広大さと身近に感じられるようにできた。(11)のような基本色彩語の疊語と共起する名詞は、知覚者は直観的に思いつくような色を使いながら、視覚を通して対象と接する際得られる自らの身体経験からもたらす対象の性質が認識し直されると考えられる。

次に、“白茫茫 (bái máng máng)”と共起する名詞の語彙を取り上げて分析する。「1.1 抽象的關係」に属する名詞には“春天<sup>142</sup> (chūn tiān)”、“秋冬<sup>143</sup> (qiū dōng)”などがあり、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞には“腦子<sup>144</sup> (nǎo zǐ)”、“脑袋<sup>145</sup> (nǎo dai)”などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には“塑料大棚<sup>146</sup> (sù liào dà péng)”、“护城河<sup>147</sup> (hù chéng hé)”などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には“雪原<sup>148</sup> (xuě yuán)”、“雾<sup>149</sup> (wù)”などがある。211例の中で、「1.2 人間活動の主体」に属する名詞と共起する例は確認できなかった。考察した結果は表5にまとめられる。

---

132 「顔。」(筆者訳)  
 133 「歯。」(筆者訳)  
 134 「雲と霧。」(筆者訳)  
 135 「霧。」(筆者訳)  
 136 「顔。」(筆者訳)  
 137 「歯。」(筆者訳)  
 138 「雲と霧。」(筆者訳)  
 139 「霧。」(筆者訳)  
 140 「雲と霧。」(筆者訳)  
 141 「霧。」(筆者訳)  
 142 「春。」(筆者訳)  
 143 「秋、冬。」(筆者訳)  
 144 「脳。」(筆者訳)  
 145 「頭。」(筆者訳)  
 146 「プラスチック温室。」(筆者訳)  
 147 「堀。」(筆者訳)  
 148 「雪原。」(筆者訳)  
 149 「霧。」(筆者訳)

表5 “白茫茫”との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	春天、秋冬、到处 <sup>150</sup>
1.2 人間活動の主体	×
1.3 人間活動—精神および行為	脑袋、感到 <sup>151</sup>
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	塑料大棚、护城河 <sup>152</sup>
1.5 自然—自然物および自然現象	雪原、霧、大地、山野、天空、水面、冬天、盐碱地、草原、世界、湖水、景色、沙滩 <sup>153</sup> など

上記の名詞の語彙データは、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く 96.2%占めている。その次は「1.1 抽象的關係 (1.9%)」、「1.3 人間活動—精神および行為 (1.4%)」、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具 (0.5%)」となる。

次に、『CCL』から抽出した (13) ~ (16) における“白茫茫 (bái máng máng)”の例を用い、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

- (13) 北岸是一片白茫茫的冰雪世界…。<sup>154</sup> (CCL: 新华社 2004 年 1 月份新闻报道)
- (14) 草甸子上白茫茫的一片积雪。<sup>155</sup> (CCL: 佳作 2)
- (15) 满屋里罩着白茫茫的水蒸气。<sup>156</sup> (CCL: 散文 2)
- (16) 昔日碱滩白茫茫, 今日一派新景象。<sup>157</sup> (CCL: 1994 年报刊精选)

<sup>150</sup> 「春、秋冬、あちこち。」(筆者訳)

<sup>151</sup> 「頭、感じ。」(筆者訳)

<sup>152</sup> 「プラスチック温室、堀。」(筆者訳)

<sup>153</sup> 「雪原、霧、土地、山、空、水面、冬、塩田、草地、世界、湖、風景、ビーチ。」(筆者訳)

<sup>154</sup> 「北岸は真っ白な白銀の世界である。」(筆者訳)

<sup>155</sup> 「芝生に白々と積もっている雪。」(筆者訳)

<sup>156</sup> 「部屋が白い水蒸気に満ちている。」(筆者訳)

<sup>157</sup> 「昔の塩性沼沢は真っ白だったが、今は新しい景色に生まれ変わっている。」(筆者訳)

(13)～(16)は“冰雪世界<sup>158</sup> (bīng xuě shì jiè)”、“积雪<sup>159</sup> (jī xuě)”、“水蒸气<sup>160</sup> (shuǐ zhēng qì)”、“昔日碱滩<sup>161</sup> (xī rì jiǎn tān)”のような自然風景の描写用法である。(13)～(16)はそれぞれ“白 (bái)”という色相として認識できるかを検証するため、『CCL』を用い“冰雪世界<sup>162</sup> (bīng xuě shì jiè)”、“积雪<sup>163</sup> (jī xuě)”、“水蒸气<sup>164</sup> (shuǐ zhēng qì)”、“昔日碱滩<sup>165</sup> (xī rì jiǎn tān)”で検索してみた結果、いずれも“白 (bái)”と共起した用例が確認できた。しかし、(13)～(16)は“白 (bái)”は「広々としている」、「ぼんやりしてはっきりしない」という対象の性質が表せる“茫茫 (máng máng)”を用い、元々対象である“人脸<sup>166</sup> (rén liǎn)”、“牙齿<sup>167</sup> (yá chǐ)”、“雾<sup>168</sup> (wù)”に備わっている「白色」ではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「広々とした感じ、ぼんやりしている」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。このように基本色彩語の量語と共起する名詞は、視覚を通して対象と接する際得られる自らの身体経験からもたらす対象の性質が認識し直されると考えられる。

上述した考察から、“白白 (bái bái)”と“白茫茫 (bái máng máng)”には次の使い分けがあることが確認できた。

(I)『分類語彙表』に基づき、“白白 (bái bái)”は「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起しやすい。基本的“白白 (bái bái)”の叙述には、“云雾<sup>169</sup> (yún wù)”、“雾<sup>170</sup> (wù)”などの外部世界の自然風景を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。元々対象に備わっている「白色または、他の色を帯びた白色」を表しつつ、視覚を通して対象へ相互作用を行う際に、得られる自らの身体経験からもたらす「白みがあった感じ、よく見えない」という対象の性質が認識し直されると考えられる。

(II)『分類語彙表』に基づき、“白茫茫 (bái máng máng)”は「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起しやすい。基本的“白茫茫 (bái máng máng)”の叙述には、“冰雪世

158 「白銀の世界。」(筆者訳)

159 「積雪。」(筆者訳)

160 「蒸気。」(筆者訳)

161 「昔にある塩水性の沼沢。」(筆者訳)

162 「白銀の世界。」(筆者訳)

163 「積雪。」(筆者訳)

164 「蒸気。」(筆者訳)

165 「昔にある塩水性の沼沢。」(筆者訳)

166 「顔。」(筆者訳)

167 「歯。」(筆者訳)

168 「霧。」(筆者訳)

169 「雲と霧。」(筆者訳)

170 「霧。」(筆者訳)



界<sup>171</sup> (bīng xuě shì jiè)”、“积雪<sup>172</sup> (jī xuě)”などの外部世界の自然風景を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。話者は“白茫茫 (bái máng máng)”を用い、視覚を通して対象へ相互作用を行う際に、得られる自らの身体経験からもたらす「広々とした感じ、ぼんやりしている」という対象の性質が認識し直されると考えられる。

(I) と (II) のように、本来の基本色彩語“白 (bái)”の対象を描写する範囲は、疊語化することによって拡大され、自然風景の広大さと身近に描写する拡張表現の一種として容認される。

### 5.3 語基「黒」を含む基本色彩語の疊語

第4章で『BCCWJ』から収集した「黒々」の用例のデータベースを利用し、手作業で名詞と共起する用法（例えば、「〇〇が黒々としている」、「黒々とした〇〇」など）を抽出する。抽出した結果、「黒々」は名詞と共起するのが133例認められた。

まず、『分類語彙表』に基づき、疊語「黒々」が共起する対象の性質を分類し、説明する。「1.1 抽象的關係」に属する名詞には「空気」、「闇の中」などがあり、「1.2 人間活動の主体」に属する名詞には「軍勢の行列」、「女」などがあり、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞には「恐怖の塊」、「不安」などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には「船殻」、「建物」などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には「海流」、「溶岩地層」などがある。考察した結果は表6にまとめられる。

表6 「黒々」との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	空気、闇の中、闇、姿、空、ビルのシルエット、石、床下
1.2 人間活動の主体	軍勢の行列、女、一人の男、さび人、ひと、柴谷武之祐
1.3 人間活動—精神および行為	恐怖の塊、不安、呪いの魔塊、死の闇
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	船殻、建物、文字、シルエット、穴、

<sup>171</sup> 「白銀の世界。」(筆者訳)

<sup>172</sup> 「積雪。」(筆者訳)

具	日用雑器、無数の歯車、防壁、金属ネット、うねり、夜の海、武家屋敷、ゴミ焼却炉、コーヒー、巨砲、プラスチック、刀、四角い箱、ビルの中に、背表紙、西宮戎神社の土塀
1.5 自然—自然物および自然現象	海流、溶岩地層、大地、瞳、髪、鱗、無数の山、眉の毛、カラス、つぼみ、毛、植林地、影、樹海、芦毛の体、あごヒゲ、羽黒山、腹の中、池、巨大な川面、森、波、ゴビの地帯、枝、暗礁、煙、浮き島、爪など

上記の「黒々」との共起名詞の一覧表は、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く 58.6% 占めている。その次は「1.4 人間活動の生産物—結果および用具 (25.6%)」、「1.1 抽象的關係 (8.3%)」、「1.2 人間活動の主体 (4.5%)」、「1.3 人間活動—精神および行為 (3.0%)」となる。

次に、「黒々」がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

(17) 黒々とした樹木が頭上に大きく枝を伸ばし、植え込みがある。(BCCWJ 0B6X\_00002:村上春樹『アフターダーク』2004)

(18) 川は黒々としている。水に映った街灯が白く揺れている。(BCCWJ PM52\_00078:角田光代『文藝』2005)

(19) そこだけが黒々とした森になっているが、あとは鬼怒川から引いた水路がどこまでも走る田の里。(BCCWJ PB19\_00114:西村望『八州廻り御用録』2001)

(20) 見えないのに、わたしは自分自身が黒々とした海にのまれ、遠く彼方の世界に運ばれていくような感覚。(BCCWJ PB39\_00229:小池真理子『一角獣』2003)

(17) ~ (20) は目の前にある具体的なもの「樹木」、「川」、「森」、「海」の自然風景の色を描写する。「樹木」、「川」、「森」は緑色が一般的に認識されるにもかかわらず、「黒々」を用い

て修飾することが分かった。「樹木」、「川」、「森」、「海」はそれぞれ「黒」という色相として認識できるかを検証するため、『BCCWJ』を用い「黒色の○○」、「黒の○○」、「黒い○○」で検索してみた。調べた結果は「黒い樹木」は1例、「黒い森」は20例、「黒い海」は24例、その他は見つからなかったことが明らかになった。コーパスでは、「黒い」は元々対象である「樹木」、「川」、「森」、「海」に備わっている「緑色」ではなく、その周辺的な特徴として「黒に近い濃い緑色」が捉えられていると考えられるが、本来に備わっている色相である対象を描写する場合、「黒々」を用いられる傾向が見られた。よって、元々対象である「樹木」、「川」、「森」、「海」に備わっている「緑色」ではなく、ある特定された時空間において対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「黒みがかった感じ、よく見えない」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。

上述した考察から、「黒々」には次の使い分けがあることが読み取れる。

「黒々」は「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起しやすい。基本的「黒々」の叙述には、「樹木」、「川」などの外部世界の自然風景を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。話者は「黒々」を用い、視覚を通して対象へ相互作用を行う際に、得られる自らの身体経験からもたらす「黒みがかった感じ、よく見えない」という対象の性質が認識し直されると考えられる。本来の基本色彩語「黒々」の対象を描写する範囲は、畳語化することによって拡大され、自然風景の広大さと身近に描写する拡張表現の一種として容認される。

以下では、日本語の「黒々」で確認された基本色彩語の畳語の特徴は、中国語の基本色彩語の畳語“黒黒 (hēi hēi)”と“黒圧圧 (hēi yā yā)”にも同様に解釈できるかを考察する。

まず、『CCL』から得られた“黒黒 (hēi hēi)”と“黒圧圧 (hēi yā yā)”の用例をエクセルファイルで読み込み、エクセルファイルのデータベース機能を利用して名詞と共起する用法（例えば、“黒黒的 (hēi hēi de) ○○”、“○○黒黒 (的) (hēi hēi (de))”など）を抽出する。そして、“黒黒 (hēi hēi)”は名詞と共起する用法が553例、“黒圧圧 (hēi yā yā)”は名詞と共起する用法が406例認められた。また、『分類語彙表』に基づき、それぞれ基本色彩語の畳語と共起する名詞の性質は下記のように分類した。

“黒黒 (hēi hēi)”と共起する名詞の語彙を取り上げて分析する。「1.1 抽象的關係」に属する名詞には“夜<sup>173</sup> (yè)”、“眼前<sup>174</sup> (yǎn qián)”などがあり、「1.2 人間活動の主体」に属する名詞

<sup>173</sup> 「夜。」(筆者訳)

<sup>174</sup> 「目の前。」(筆者訳)

には“男人<sup>175</sup> (nán rén)”、“人群<sup>176</sup> (rén qún)” などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には“音箱<sup>177</sup> (yīn xiāng)”、“墨痕<sup>178</sup> (mò hén)” などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には“岩崖<sup>179</sup> (yán yá)”、“山脉<sup>180</sup> (shān mò)” などがある。553 例の中で、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞と共起する例は確認できなかった。考察した結果は表 7 にまとめられる。

表 7 “黒黒” との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	夜、眼前、天、外面、世界 <sup>181</sup>
1.2 人間活動の主体	男人、人群、她、一片人、中年人、玛丽·罗斯、侏儒、小家伙、丈夫、女孩子、一队佃户和佣人 <sup>182</sup> など
1.3 人間活動—精神および行為	×
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	音箱、墨痕、巷道口、沥青、运煤站、帐幕、楼道、刀、枪口、地雷、车厢、木棒子、防空洞 <sup>183</sup> など
1.5 自然—自然物および自然現象	岩崖、乌云、大乌柏树、林丛、树丛、山脉、脸、皮肤、头发、脸膛、嘴、眼睛、汗水、长睫毛、胡子 <sup>184</sup> など

上記の名詞の語彙データは、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く 70.6% 占めている。その次は「1.4 人間活動

<sup>175</sup> 「男。」(筆者訳)

<sup>176</sup> 「人々。」(筆者訳)

<sup>177</sup> 「スピーカー。」(筆者訳)

<sup>178</sup> 「墨の跡。」(筆者訳)

<sup>179</sup> 「岩崖。」(筆者訳)

<sup>180</sup> 「山脉。」(筆者訳)

<sup>181</sup> 「夜、目の前、空、外、世界。」(筆者訳)

<sup>182</sup> 「男性、人々、彼女、中年、メアリーローズ(人名)、侏儒、あいつ、主人、女の子、一隊の農民工。」(筆者訳)

<sup>183</sup> 「スピーカーボックス、墨跡、道の入口、アスファルト、石炭火力発電所、テント、階段の入り口、刀、銃口、地雷、トランク、木の棒、防空壕。」(筆者訳)

<sup>184</sup> 「岩崖、暗い雲、ナンキンハゼ、森、藪、山脉、顔、肌、髪、顔、口、目、汗、まつげ、ひげ。」(筆者訳)

の生産物—結果および用具(17.5%)」、「1.2 人間活動の主体(8.8%)」、「1.1 抽象的關係(3.1%)」となる。

次に、“黒黒(hēi hēi)”がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用の性質」を考察する。

(21) 漫长的队伍，蜿蜒在黑黑的山道上，好似永也走不完似的。<sup>185</sup>(CCL: 红日)

(22) 门两边各有一丛黑黑的灌木。<sup>186</sup>(CCL: 简·爱)

(23) 我悄悄的逃到这黑黑的林丛。<sup>187</sup>(CCL: 散文1)

(24) 我们乘着地铁回家，但我又清楚地看到长街闪过的一盏盏路灯一团团黑黑的树丛。<sup>188</sup>(CCL: 玩的就是心跳)

(21) ~ (24) は“山道<sup>189</sup> (shān dào)”、“灌木<sup>190</sup> (guàn mù)”、“林丛<sup>191</sup> (lín cóng)”、“树丛<sup>192</sup> (shù cóng)”のような自然風景の描写用法である。(21) ~ (24) は緑色が一般的に認識されるにもかかわらず、“黒黒(hēi hēi)”を用いて修飾することが分かった。(21) ~ (24) はそれぞれ“黒(hēi)”という色相として認識できるかを検証するため、『CCL』を用い“黒山道<sup>193</sup> (hēi shān dào)”、“黒灌木<sup>194</sup> (hēi guàn mù)”、“黒林丛<sup>195</sup> (hēi lín cóng)”、“黒树丛<sup>196</sup> (hēi shù cóng)”で検索してみた。調べた結果は“黒树丛<sup>197</sup> (hēi shù cóng)”は1例、その他は1例もなかった。また、辞典で考察した中国語の“黒(hēi)”には「暗い」という意味があることが分かった。(21) ~ (24) における“黒黒(hēi hēi)”はある特定された時空間において“山道<sup>198</sup> (shān dào)”、“灌

<sup>185</sup> 「長い隊列が、黒々とした山道にうねうねと伸びていて、永遠に歩き終わることがないかのようなのである。」(筆者訳)

<sup>186</sup> 「門の両側に黒々とした低木がある。」(筆者訳)。

<sup>187</sup> 「私はこっそりこの暗い森の奥に逃げてきた。」(筆者訳)

<sup>188</sup> 「私たちは地下鉄に乗って帰路についたが、まだ長い通りに輝く街路灯と黒々とした樹木がはっきりと見えた。」(筆者訳)

<sup>189</sup> 「山道。」(筆者訳)

<sup>190</sup> 「低木。」(筆者訳)

<sup>191</sup> 「森。」(筆者訳)

<sup>192</sup> 「藪。」(筆者訳)

<sup>193</sup> 「黒い山道。」(筆者訳)

<sup>194</sup> 「黒い低木。」(筆者訳)

<sup>195</sup> 「黒い森。」(筆者訳)

<sup>196</sup> 「黒い藪。」(筆者訳)

<sup>197</sup> 「黒い藪。」(筆者訳)

<sup>198</sup> 「山道。」(筆者訳)

木<sup>199</sup> (guàn mù) ”、“林丛<sup>200</sup> (lín cóng) ”、“树丛<sup>201</sup> (shù cóng) ” を描写する場合、「光が少なく、物がよく見えない」といったような解釈することが可能である。よって、元々対象である“山道<sup>202</sup> (shān dào) ”、“灌木<sup>203</sup> (guàn mù) ”、“林丛<sup>204</sup> (lín cóng) ”、“树丛<sup>205</sup> (shù cóng) ” に備わっている「緑色」ではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「黒みがかかった感じ、よく見えない」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「知覚者の心身状態」から「対象の性質」へ読み替えることで、“黒黒 (hēi hēi) ”は“山道<sup>206</sup> (shān dào) ”、“灌木<sup>207</sup> (guàn mù) ”、“林丛<sup>208</sup> (lín cóng) ”、“树丛<sup>209</sup> (shù cóng) ” という自然風景の広大さと身近に感じられるようにできた。(21) ~ (24) のような基本色彩語の豊語と共起する名詞は、視覚を通して対象と接する際得られる自らの身体経験からもたらす対象の性質が認識し直されると考えられる。

次に、“黒圧圧 (hēi yā yā) ”と共起する名詞の語彙を取り上げる。「1.2 人間活動の主体」に属する名詞には“孩子们<sup>210</sup> (hái zǐ men) ”、“人群<sup>211</sup> (rén qún) ”などがあり、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞には“脑袋<sup>212</sup> (nǎo dai) ”、“梦魔<sup>213</sup> (mèng mó) ”などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には“大房子<sup>214</sup> (dà fáng zi) ”、“轰炸机<sup>215</sup> (hōng zhà jī) ”などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には“森林<sup>216</sup> (sēn lín) ”、“乌云<sup>217</sup> (wū yún) ”などがある。406 例の中で、「1.1 抽象的關係」に属する名詞と共起する例は確認できなかった。考察した結果は表8にまとめられる。

---

199 「低木。」(筆者訳)  
 200 「森。」(筆者訳)  
 201 「藪。」(筆者訳)  
 202 「山道。」(筆者訳)  
 203 「低木。」(筆者訳)  
 204 「森。」(筆者訳)  
 205 「藪。」(筆者訳)  
 206 「山道。」(筆者訳)  
 207 「低木。」(筆者訳)  
 208 「森。」(筆者訳)  
 209 「藪。」(筆者訳)  
 210 「子供達。」(筆者訳)  
 211 「人々。」(筆者訳)  
 212 「頭。」(筆者訳)  
 213 「夢魔。」(筆者訳)  
 214 「大きな家。」(筆者訳)  
 215 「爆撃機。」(筆者訳)  
 216 「森。」(筆者訳)  
 217 「暗い雲。」(筆者訳)



表8 “黑压压”との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	×
1.2 人間活動の主体	孩子们、人群、人山人海、士兵、长龙、农民、敌人、记者们、孩子们、观众、工人、老乡们 <sup>218</sup> など
1.3 人間活動—精神および行為	脑袋、梦魇、记忆 <sup>219</sup>
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	大房子、轰炸机、棚屋、售票大厅、船具、坦克、地图、牌位、文字 <sup>220</sup>
1.5 自然—自然物および自然現象	森林、山、树林、浪涛、悬崖峭壁、乌云、雾气、潮水、乌鸦、蜜蜂、燕子、蝙蝠、蝗群、蚂蚁、群狼、苍蝇 <sup>221</sup> など

上記の名詞の語彙データは、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.2 人間活動の主体」は最も高く 72.7%を占めている。その次は「1.5 自然—自然物および自然現象 (18.5)」、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具 (7.3%)」、「1.3 人間活動—精神および行為 (1.5%)」となる。

次に、“黑压压 (hēiyāyā)”がよく共起する「1.2 人間活動の主体」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

(25) 月台上挤满了黑压压的人群。<sup>222</sup> (CCL: 当代短篇小说 1)

(26) 他们两个走进了祖父的房间，只见黑压压的站了一屋的人。<sup>223</sup> (CCL: 巴金)

(27) 待清晨5点一过，黑压压的人山人海就从四面八方蜂拥中央银行门前，争取优先兑换。<sup>224</sup>

<sup>218</sup> 「子供、人々、群衆、兵士、行列、農民、敵、記者たち、群衆、子供たち、観客、土工、同郷の人。」(筆者訳)

<sup>219</sup> 「頭、夢魘、記憶。」(筆者訳)

<sup>220</sup> 「大きい家、爆撃機、小屋、切符売り場、船、戦車、地図、位牌、文字。」(筆者訳)

<sup>221</sup> 「森、山、森、波、崖、暗い雲、霧、潮汐、カラス、蜂、ツバメ、コウモリ、イナゴの群れ、アリ、狼たち、ハエ。」(筆者訳)

<sup>222</sup> 「ホームは黒山の人がたりとなっている。」(筆者訳)

<sup>223</sup> 「2人は祖父の部屋に入り、黒山の人がたりとなっているのを見た。」(筆者訳)

<sup>224</sup> 「午前5時を過ぎると、四方八方から大勢の人が銀行の入り口に集まり、我先きに兌換しようと争っていた。」(筆者訳)

(CCL:宋氏家族全传)

(28) 台下，黑压压的2万多农民头顶细雨，无一离去。<sup>225</sup> (CCL: 1996 年人民日报)

(25) ~ (28) は人間活動の主体である大勢の人を描写する用法である。(25) のホーム、(26) の部屋中、(27) 銀行の入り口、(28) 観客席には人々で混雑している状態を前提として、真っ黒に見えるという比喩的な叙述だと考えられる。人間身体の一部である髪の毛、肌色が黒に見えるため、「黒色」を用いて修飾するのが可能であるが、(25) ~ (28) 大勢の人を描写する場合、“黒压压 (hēi yā yā)” を“很黑 (hěn hēi)” に置き換えると非文になる。「密集する、溢れる」という意味が含まれる“压压 (yā yā)” を用い、“黒 (hēi)” の黒色という修飾制限が解除できたと考える。その場合は、元々対象性質に備わっているものではなく、ある特定の時空間において対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「真っ黒に見える」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「知覚者の心身状態」から「対象の性質」へ読み替えることで、“黒压压 (hēi yā yā)” は大勢の人にいる場所空間の広大さと身近に感じられるようにできた。このように基本色彩語の豊語と共起する名詞は、視覚を通して対象と接する際得られる自らの身体経験からもたらす対象の性質が認識し直されると考えられる。

上述した考察から、“黒黒 (hēi hēi)” と“黒压压 (hēi yā yā)” には次の使い分けがあることが確認できた。

(I) 『分類語彙表』に基づき、“黒黒 (hēi hēi)” は「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起しやすい。元々対象に備わっている「緑色」ではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「黒みがかかった感じ、よく見えない」が対象の性質と認識し直されていることが分かった。基本的“黒黒 (hēi hēi)” の叙述には、“山道 (山道)”、“灌木 (低木)” などの外部世界の自然風景を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。

(II) 『分類語彙表』に基づき、“黒压压 (hēi yā yā)” は「1.2 人間活動の主体」に属する名詞と共起しやすい。それは、「密集する」、「溢れる」という対象の性質が表せる“压压 (yā yā)” を用い、対象の性質を広範囲に認識し直されていると考えられる。認知意味論の相互作用に基づき、話者と対象 (共起語) との相互作用を考察した結果、中国語の豊語“黒黒 (hēi hēi)” と“黒压压 (hēi yā yā)” で表される対象の性質は、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から

<sup>225</sup> 「観客席の2万人ほどの農民の人だかりは、雨に濡れても、誰も去らなかつた。」(筆者訳)

生じた知覚者の心身状態が対象の性質として認知されていることが確認でき、知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」としての関係性が明確になった。本来の基本色彩語“黒 (hēi)”の対象を描写する範囲は、豊語化することによって拡大され、典型事例からの拡張表現の一種として容認される。

#### 5.4 語基「赤」を含む基本色彩語の豊語

第4章で『BCCWJ』から収集した「赤々」の用例のデータベースを利用し、手作業で名詞と共起する用法（例えば、「〇〇が赤々としている」、「赤々とした〇〇」など）を抽出する。抽出した結果、「赤々」は名詞と共起する用法が4例認められた。

まず、『分類語彙表』に基づき、豊語「赤々」が共起する対象の性質を分類し、説明する。4例はいずれも、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起する例が確認できた。考察した結果は表9にまとめられる。

表9 「赤々」との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	×
1.2 人間活動の主体	×
1.3 人間活動—精神および行為	×
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	×
1.5 自然—自然物および自然現象	夕日、西日、火、夕暮れ

次に、「赤々」がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

(29) 眼下の町は赤々とした西日を受けて、あちこちの屋根が光っている。(BCCWJ PB39\_00344: 稲葉真弓『風変りな魚たちへの挽歌』2003)

(30) 窓の外には、赤々とした炎になった夕暮れが、どこまでも燃え広がっていた。(BCCWJ

LBj9\_00009:水上洋子『月がくれた愛人』1995)

(31) 駒沢練兵場の斜面に腰を下ろし、沈みかかった赤々とした夕日を眺めながら、シンミリした口調で「俺も随分苦労したものだ」と噛み砕いたような話をし、「とにかく勉強しろよ、家庭に義理や人情もあるか知らないが、目をつむつて我慢しろよ」と、親身になって訓戒してくれるのでした。(BCCWJ LBr2\_00104: 福田和也『第二次大戦とは何だったのか?』2003)

(32) 部屋の隅にはだるまストーブが赤々とした火を灯し、その上に置かれたやかんからはシュンシュンと水蒸気が出ていた。(BCCWJ PB59\_00484: 高月まつり『月がくれた愛人』2005)

(29) ~ (32) は目の前にある具体的なもの「西日」、「夕暮れ」、「夕日」、「火」の自然風景の色を描写する用法である。『BCCWJ』を調べた結果、いずれも「赤い」と共起する用例がよく見られる。それらは赤色が一般的に認識されるにもかかわらず、「赤々」を用い、ある特定された時空間において対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「赤みがかかった感じ、美しい」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。

上述した考察から、「赤々」には次の使い分けがあることが読み取れる。

「赤々」は「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起しやすい。基本的「赤々」の叙述には、「西日」、「夕暮れ」などの外部世界の自然風景を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。話者は「赤々」を用い、視覚を通して対象へ相互作用を行う際に、得られる自らの身体経験からもたらす「赤みがかかった感じ、美しい」という対象の性質が認識し直されると考えられる。本来の基本色彩語「赤々」の対象を描写する範囲は、豊語化することによって拡大され、自然風景の広大さと身近に描写する拡張表現の一種として容認される。

以下では、日本語の「赤々」で確認された基本色彩語の豊語の特徴は、中国語の基本色彩語の豊語“红红 (hóng hóng)”と“红彤彤 (hóng tóng tóng)”にも同様に解釈できるかを考察する。

まず、『CCL』から得られた“红红 (hóng hóng)”と“红彤彤 (hóng tóng tóng)”の用例をエクセルファイルで読み込み、エクセルファイルのデータベース機能を利用して名詞と共起する用法(例えば、“红红的 (hóng hóng de) ○○”、“○○红红的 (的) (hóng hóng (de))”など)を抽出する。そして、“红红 (hóng hóng)”は名詞と共起する用法が726例、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”は名詞と共起する用法が202例認められた。また、『分類語彙表』に基づき、それぞれ基本色彩語の豊語と共起する名詞の性質は下記のように分類した。

“红红 (hónghóng)” と共起する名詞の語彙を取り上げて分析する。「1.1 抽象的關係」に属する名詞には“春天<sup>226</sup> (chūntiān)”があり、「1.2 人間活動の主体」に属する名詞には“女儿<sup>227</sup> (nǚér)”、“陪酒小姐<sup>228</sup> (péijiǔ xiǎojiě)”があり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には“地毯<sup>229</sup> (dìtǎn)”、“灯笼<sup>230</sup> (dēnglóng)”などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には“火炬<sup>231</sup> (huǒjù)”、“大枣<sup>232</sup> (dàzǎo)”などがある。726例の中で、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞と共起する例が確認できなかった。考察した結果は表10にまとめられる。

表10 “红红” との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	春天 <sup>233</sup>
1.2 人間活動の主体	女儿、陪酒小姐 <sup>234</sup>
1.3 人間活動—精神および行為	×
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	地毯、灯笼、圆球、春联、鞭炮、包装、中国结、长袍、胭脂、蝴蝶结、纸卷、毕业证书、通知书 <sup>235</sup> など
1.5 自然—自然物および自然現象	天空、太阳、田地、枫林、草莓、大枣、玫瑰、辣椒、苹果、脸、眼睛、脸膛 <sup>236</sup> など

上記の名詞の語彙データは、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く 88.4%占めている。その次は「1.4 人間活動

<sup>226</sup> 「春。」(筆者訳)

<sup>227</sup> 「娘。」(筆者訳)

<sup>228</sup> 「キャバ嬢。」(筆者訳)

<sup>229</sup> 「カーペット。」(筆者訳)

<sup>230</sup> 「紙灯笼。」(筆者訳)

<sup>231</sup> 「たいまつ。」(筆者訳)

<sup>232</sup> 「棗。」(筆者訳)

<sup>233</sup> 「春。」(筆者訳)

<sup>234</sup> 「娘、キャバ嬢。」(筆者訳)

<sup>235</sup> 「カーペット、ランタン、ボール、春联、花火、パッケージ、中国結び目、ロープ、チーク、蝶々結び、巻物、卒業証明書、通知。」(筆者訳)

<sup>236</sup> 「空、太陽、野原、モミの木、イチゴ、ナツメ、果物、バラ、唐辛子、リンゴ、顔、目、顔。」(筆者訳)

の生産物—結果および用具(11.2%)」、「1.2 人間活動の主体(0.3%)」、「1.1 抽象的關係(0.1%)」となる。

次に、“红红 (hóng hóng)”がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

(33) 红红的太阳犹如一块燃烧的煤…。<sup>237</sup> (CCL:牛虻)

(34) 海、浪、蔚蓝色的天空、遥远的青山、红红的太阳、金黄的沙滩，实在太美了！<sup>238</sup> (CCL:蜜糖儿)

(35) 那街边的枞树，那天外红红的夕阳，那在空中飞翔的鸽子，那艺术雕塑旁的喷泉……莫斯科有多么美啊！<sup>239</sup> (CCL:读者)

(36) 她每次站在窗口望着那翠绿的牧尝红红的田地和高大稠密的沼泽林地时，总是充满着新鲜的美感。<sup>240</sup> (CCL:飘)

(33) ~ (36) の対象は“太阳<sup>241</sup> (tài yáng)”、“夕阳<sup>242</sup> (xī yáng)”、“田地<sup>243</sup> (tián dì)”であり、いずれもの外界にある自然物および自然現象を描写する用法である。(33) の「太陽」と(34) の「夕日」の美しさ、(36) の「畑」の美しさ、いずれも最もよい状態または時期を前提として、真っ赤に見えるという比喩的な叙述だと考えられる。自然物および自然現象が赤くに見えるため、「赤色」を用いて修飾するのが可能であるが、(33) ~ (36) 赤みが強く見えるを描写する場合、“红红 (hóng hóng)”を“红 (hóng)”に置き換えられる。その場合は、元々対象性質に備わっているものではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「知覚者の心身状態」から「対象の性質」へ読み替えることで、“红红 (hóng hóng)”は物事が最もよい状態または時期と身近に感

<sup>237</sup> 「真っ赤な夕焼けは燃えている炭のようである。」(筆者訳)

<sup>238</sup> 「海、波、青々と広がる空、遥か遠くに見える青い山、真っ赤な太陽、そして金色に輝くビーチ、なんと美しいのでしょうか。」(筆者訳)。

<sup>239</sup> 「道端のモミの木、空の真っ赤な夕日、空を飛ぶ鳩、彫刻の隣にある噴水…モスクワはなんと美しいのでしょうか。」(筆者訳)。

<sup>240</sup> 「彼女は毎回窓際に立ち、緑豊かな牧場、真っ赤な畑、密集した湿地林を眺めるたびに、いつも新鮮な気持ちに満たされる。」(筆者訳)。

<sup>241</sup> 「太陽。」(筆者訳)

<sup>242</sup> 「夕日。」(筆者訳)

<sup>243</sup> 「畑。」(筆者訳)



じられるようにできた。このように基本色彩語の置語と共起する名詞は、視覚を通して対象と接する際得られる自らの身体経験からもたらす対象の性質が認識し直されると考えられる。

“红彤彤 (hóng tóng tóng)” と共起する名詞の語彙を取り上げて分析する。「1.1 抽象的關係」に属する名詞には“朝霞<sup>244</sup> (cháo xiá)”、“晚霞<sup>245</sup> (wǎn xiá)” などがあり、「1.2 人間活動の主体」に属する名詞には“女人<sup>246</sup> (nǚ rén)”、“寶寶<sup>247</sup> (bǎo bǎo)” などがあり、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞には“思考<sup>248</sup> (sī kǎo)”、“新社会<sup>249</sup> (xīn shè huì)” などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には“中国结<sup>250</sup> (zhōng guó jié)”、“春联<sup>251</sup> (chūn lián)” などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には“太阳<sup>252</sup> (tài yáng)”、“苹果<sup>253</sup> (píng guǒ)” などがある。考察した結果は表 11 にまとめられる。

表 11 “红彤彤” との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	清晨、朝霞、晚霞、年代 <sup>254</sup>
1.2 人間活動の主体	女人、寶寶 <sup>255</sup>
1.3 人間活動—精神および行為	思考、新社会、世界、革命大左派、神采、新中国 <sup>256</sup>
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	中国结、对联、春联、贺年卡、电炉、缎布、标签、肩章、证书、毛线外套、出租车、旗子、新房 <sup>257</sup> など
1.5 自然—自然物および自然現象	太阳、夕阳、岩浆、火焰、苹果、西红

<sup>244</sup> 「朝霞。」(筆者訳)

<sup>245</sup> 「夕焼け」(筆者訳)

<sup>246</sup> 「女性。」(筆者訳)

<sup>247</sup> 「赤ちゃん。」(筆者訳)

<sup>248</sup> 「思考。」(筆者訳)

<sup>249</sup> 「新しい社会。」(筆者訳)

<sup>250</sup> 「中国結び。」(筆者訳)

<sup>251</sup> 「春の対聯。」(筆者訳)

<sup>252</sup> 「太陽。」(筆者訳)

<sup>253</sup> 「りんご。」(筆者訳)

<sup>254</sup> 「朝、朝霞、夕霞、年代。」(筆者訳)

<sup>255</sup> 「女性、赤ちゃん。」(筆者訳)

<sup>256</sup> 「思考、新しい社会、世界、革命的左翼、顔つき、新中国。」(筆者訳)

<sup>257</sup> 「中国結び目、対聯、春聯、年賀状、電気ストーブ、グログラン、ラベル、エポレット、証明書、ウールのコート、タクシー、旗、新しい家。」(筆者訳)

	柿、果实、辣椒、山楂、草莓、花朵、 枫叶、脸、耳朵 <sup>258</sup> など
--	--

上記の名詞の語彙データは、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く 57.1%占めている。その次は「1.4 人間活動の生産物—結果および用具 (31.3%)」、「1.3 人間活動—精神および行為 (7.2%)」、「1.1 抽象的關係 (3.4%)」、「1.2 人間活動の主体 (1.0%)」となる。

次に、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

(37) 西天的云彩也是红彤彤的。<sup>259</sup> (CCL:新华社 2001 年 2 月份新闻报道) (CCL:牛虻)

(38) 蜿蜒流过的井田河在红彤彤的夕阳照耀下更加美丽…。<sup>260</sup> (CCL:人性的证明)

(39) 太阳从东边慢慢升起，红彤彤的极为耀眼，照得李有源心花怒放…。<sup>261</sup> (CCL:1993 年人民日报)

(40) 临街的一些水泥花钵里，也开满了一片片红彤彤或黄灿灿的花朵。<sup>262</sup> (CCL:1996 年人民日报)

(37) ~ (40) の対象は“西天的云彩<sup>263</sup> (xī tiān de yún cǎi)”、“太阳<sup>264</sup> (tài yáng)”、“花朵<sup>265</sup> (huā duǒ)” “には最も盛んな状態または最盛期を迎えている状態を前提として、真っ赤に見えるという比喩的な叙述だと考えられる。外界にある自然物および自然現象が赤くに見えるため、「赤色」を用いて修飾するのが可能であるが、「非常に赤いさま」という強調の意味が含まれる“彤彤 (tóng tóng)”を用いて、元々対象性質に備わっているものではなく、ある特定の時空間にお

<sup>258</sup> 「太陽、日没、溶岩、炎、リンゴ、トマト、果物、唐辛子、サンザシ、イチゴ、花、モミジ、顔、耳。」  
(筆者訳)

<sup>259</sup> 「西の空の雲も真っ赤に染まっている。」(筆者訳)

<sup>260</sup> 「蛇行しながら流れる田んぼの川は、真っ赤な夕日に照らされてより美しくなり…。」(筆者訳)

<sup>261</sup> 「太陽は東からゆっくりと昇り、真っ赤に眩しく輝いて、リョウユアン (人名) を照らし、喜びに満ち溢れさせた。」(筆者訳)

<sup>262</sup> 「通りに面するいくつかのセメント植木鉢にも、一面に真っ赤な花や、金色に光り輝く花が咲いている。」  
(筆者訳)

<sup>263</sup> 「西の空。」(筆者訳)

<sup>264</sup> 「太陽。」(筆者訳)

<sup>265</sup> 「花。」(筆者訳)

いて対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「真っ赤に見える」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「知覚者の心身状態」から「対象の性質」へ読み替えることで、“红彤彤 (hóng tóng tóng)” は空間の広大さと身近に感じられるようにできた。このように基本色彩語の疊語と共起する名詞は、視覚を通して対象と接する際得られる自らの身体経験からもたらす対象の性質が認識し直されると考えられる。

上述した考察から、“红红 (hóng hóng)” と “红彤彤 (hóng tóng tóng)” には次の使い分けがあることが確認できた。

(I) 『分類語彙表』に基づき、“红红 (hóng hóng)” と “红彤彤 (hóng tóng tóng)” はどちらも「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起しやすい。認知意味論の相互作用に基づき、話者と対象（共起語）との相互作用を考察した結果、中国語の“红红 (hóng hóng)” で表される対象の性質は、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「赤みがかかった感じ、よく見えない」が対象の性質と認識し直されていることが分かった。基本的“红红 (hóng hóng)” の叙述には、“太阳<sup>266</sup> (tài yáng)”、“夕阳<sup>267</sup> (xī yáng)” などの外部世界の自然風景を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。

(II) 『分類語彙表』に基づき、“红彤彤 (hóng tóng tóng)” は「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞と共起する例が確認できた。それに対し、“红红 (hóng hóng)” は「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞と共起することが不可能である。それは、「非常に赤いさま」という対象の性質が表せる“彤彤 (tóng tóng)” を用い、対象の性質を広範囲に認識し直されていると考えられる。認知意味論の相互作用に基づき、話者と対象（共起語）との相互作用を考察した結果、中国語の疊語“红彤彤 (hóng tóng tóng)” で表される対象の性質は、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質として認知されていることが確認でき、知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」としての関係性が明確になった。本来の基本色彩語“红 (hóng)” の対象を描写する範囲は、疊語化することによって拡大され、典型事例からの拡張表現の一種として容認される。

## 5.5 語基「青」を含む基本色彩語の疊語

第4章で『BCCWJ』から収集した「青々」の用例のデータベースを利用し、手作業で名詞と

---

<sup>266</sup> 「太陽。」(筆者訳)

<sup>267</sup> 「夕日。」(筆者訳)

共起する用法（例えば、「〇〇が青々としている」、「青々とした〇〇」など）を抽出する。抽出した結果、「青々」は名詞と共起する用法が108例認められた。

まず、『分類語彙表』に基づき、疊語「青々」が共起する対象の性質を分類し、説明する。「青々」と共起する名詞の語彙を取り上げる。「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には「台詞」、「記事」などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には「畑」、「芝生」などがある。108例の中で、「1.1 抽象的關係」、「1.2 人間活動の主体」、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞と共起する例は確認できなかった。考察した結果は表12にまとめられる。

表12 「青々」との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	×
1.2 人間活動の主体	×
1.3 人間活動—精神および行為	×
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	牧場、煮魚、畳間、仮建の幄舎、簾
1.5 自然—自然物および自然現象	畑、芝生、髭の剃り、葉、木の陰、島、空、草、草原、葱、森、ミニトマト、麦畑、生垣、スイカ枝、苔、芽、竹藪、枝豆、風景、花、海…

上記の「青々」との共起名詞の一覧表は、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く95.3%占めている。その次は「1.4 人間活動の生産物—結果および用具（4.7%）」となる。

次に、「青々」がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

(41)崖の上から見る青々とした大海原、心地よい風もほほに触れます。(BCCWJ PB11\_00006: 内越言平『ひとりの小さなおともだちが』2001)

(42) 正門から宮殿まで約一キロの道が続き、両側に美しい庭園と青々とした芝生が広がっている。(BCCWJ PB19\_00447: ミンディ・ネフ『キスは運命の味』2001)

(43) 城壁だけで、城内にあったであろう建築物などの遺構はすべて失われ、青々とした畑が広がるのみである。(BCCWJ LBa2\_00027: NHK 大黄河)

(44) しかし、見渡す限り青々とした海が広がり、どこにも島影らしいものは見えなかった。(BCCWJ PB29\_00398: 山本恵三『ドッグファイター神竜』2002)

(41) ~ (44) は目の前にある具体的なもの「大海原」、「芝生」、「畑」、「海」の自然風景の色を描写する用法である。『BCCWJ』を調べた結果、いずれも「青い」と共起する用例がよく見られる。それらは青色が一般的に認識されるにもかかわらず、「青々」を用い、ある特定された時空間において対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態「青みがかかった感じ、気持ちが良い」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。

上述した考察から、「青々」には次の使い分けがあることが読み取れる。

「青々」は「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起しやすい。基本的「赤々」の叙述には、「大海原」、「芝生」などの外部世界の自然風景を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。話者は「青々」を用い、視覚を通して対象へ相互作用を行う際に、得られる自らの身体経験からもたらす「青みがかかった感じ、気持ちが良い」という対象の性質が認識し直されると考えられる。本来の基本色彩語「青々」の対象を描写する範囲は、豊語化することによって拡大され、自然風景の広大さと身近に描写する拡張表現の一種として容認される。

以下では、日本語の「青々」で確認された基本色彩語の豊語の特徴は、中国語の基本色彩語の豊語“绿绿 (lù lù)”と“绿油油 (lù yóu yóu)”にも同様に解釈できるかを考察する。

まず、『CCL』から得られた“绿绿 (lù lù)”と“绿油油 (lù yóu yóu)”の用例をエクセルファイルで読み込み、エクセルファイルのデータベース機能を利用して名詞と共起する用法(例えば、“绿绿的 (lù lù de) ○○”、“○○绿绿 (的) (lù lù (de))”など)を抽出する。そして、“绿绿 (lù lù)”は名詞と共起する用法が45例、“绿油油 (lù yóu yóu)”は名詞と共起する用法が398例認められた。また、『分類語彙表』に基づき、それぞれ基本色彩語の豊語と共起する名詞の性質は下記のように分類した。

“绿绿 (lù lù)”と共起する名詞の語彙を取り上げて分析する。「1.1 抽象的關係」に属する名

詞には“春天<sup>268</sup> (chūn tiān)”などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には“刀<sup>269</sup> (dāo)”、“水果冻<sup>270</sup> (shuǐ guǒ dòng)”などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には“田野<sup>271</sup> (tián yě)”、“水稻<sup>272</sup> (shuǐ dào)”などがあることが分かった。45例の中で、「1.2 人間活動の主体」、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞と共に起る例は確認できなかった。考察した結果は表13にまとめられる。

表13 “绿绿”との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	春天 <sup>273</sup>
1.2 人間活動の主体	×
1.3 人間活動—精神および行為	×
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	刀、水果冻 <sup>274</sup>
1.5 自然—自然物および自然現象	田野、地、水稻、葱、山、森林、树叶、水面、草、臉、苗、西湖水、青麦、伏苹果 <sup>275</sup> など

上記の名詞の語彙データは、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く 93.8%占めている。その次は「1.4 人間活動の生産物—結果および用具 (4.1%)」、「1.1 抽象的關係 (2.1%)」となる。

次に、“绿绿 (lǜ lǜ)”がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用の性質」を考察する。

<sup>268</sup> 「春。」(筆者訳)

<sup>269</sup> 「刀。」(筆者訳)

<sup>270</sup> 「フルーツゼリー。」(筆者訳)

<sup>271</sup> 「稻。」(筆者訳)

<sup>272</sup> 「春。」(筆者訳)

<sup>273</sup> 「春。」(筆者訳)

<sup>274</sup> 「刀、果物ゼリー。」(筆者訳)

<sup>275</sup> 「田野、地面、水稻、葱、山、森、葉、水面、草、顔、苗木、西湖の水、青小麦、りんご。」(筆者訳)



(45) 土地上小苗长得绿绿的。<sup>276</sup> (CCL: 红旗谱)

(46) 多万平方公里, 如同无边无际的汪洋大海。天蓝蓝的, 蓝得透明, 地绿绿的, 绿得纯净。<sup>277</sup>

(CCL: 1996 年人民日报)

(47) 一路是绿绿的山青青的水, 牵着我思缕万千。<sup>278</sup> (CCL: 1995 年人民日报)

(45) ~ (47) の対象は“小苗<sup>279</sup> (xiǎo miáo)、“地<sup>280</sup> (dì)”、“山<sup>281</sup> (shān)”であり、いずれもの外界にある自然物および自然現象を描写する用法である。(45) ~ (47) の対象は見渡す限り果てしのない自然風景を前提として、青く見えるという比喩的な叙述だと考えられる。その場合は、元々対象性質に備わっているものではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「知覚者の心身状態」から「対象の性質」へ読み替えることで、“绿绿 (lǜ lǜ)”は見渡す限り果てしのない空間の広大さと身近に感じられるようにできた。このように基本色彩語の疊語と共起する名詞は、視覚を通して対象と接する際得られる自らの身体経験からもたらす対象の性質が認識し直されると考えられる。

次に、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”と共起する名詞の語彙を取り上げる。「1.1 抽象的關係」に属する名詞には“春天<sup>282</sup> (chūn tiān)”、“世界<sup>283</sup> (shì jiè)”などがあり、「1.4 人間活動の生産物—結果および用具」に属する名詞には“茶园<sup>284</sup> (chá yuán)”、“葡萄园<sup>285</sup> (pú táo yuán)”などがあり、「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞には“田野<sup>286</sup> (tián yè)”、“秧苗<sup>287</sup> (yāng miáo)”などがあることが分かった。398 例の中で、「1.2 人間活動の主体」、「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞と共起する例は確認できなかった。考察した結果は表 14 にまとめられる。

<sup>276</sup> 「地面の上の苗木が青々と生い茂る。」(筆者訳)

<sup>277</sup> 「何万平方キロメートル、見渡す限りの海。天は青く透明に透き通り、地は緑が生い茂って、すっきりとしている。」(筆者訳)

<sup>278</sup> 「道沿いは緑生い茂る山と青く透き通る水で、気持ちか錯綜している。」(筆者訳)

<sup>279</sup> 「苗木。」(筆者訳)

<sup>280</sup> 「土。」(筆者訳)

<sup>281</sup> 「山。」(筆者訳)

<sup>282</sup> 「春。」(筆者訳)

<sup>283</sup> 「世界。」(筆者訳)

<sup>284</sup> 「茶畑。」(筆者訳)

<sup>285</sup> 「ぶどう園。」(筆者訳)

<sup>286</sup> 「野原。」(筆者訳)

<sup>287</sup> 「水稻の苗。」(筆者訳)

表 14 “绿油油”との共起名詞の一覧表

『分類語彙表』の分類項目	語彙
1.1 抽象的關係	春天、世界 <sup>288</sup>
1.2 人間活動の主体	×
1.3 人間活動—精神および行為	×
1.4 人間活動の生産物—結果および用具	茶園、葡萄園、糕点、股市、青紗帳、帽子、燕麦、玉簪、牧场 <sup>289</sup>
1.5 自然—自然物および自然現象	田野、竹林、小橡樹、海洋、叶子、草坪、秧苗、庄稼山、土地、水、苗、辣椒、瓜地、玉米 <sup>290</sup> など

上記の名詞の語彙データは、『分類語彙表』を用いて分類した割合は次の通りである。まず、「1.5 自然—自然物および自然現象」は最も高く 96.3%占めている。その次は「1.4 人間活動の生産物—結果および用具 (2.7%)」、「1.1 抽象的關係 (1.0%)」となる。

次に、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”がよく共起する「1.5 自然—自然物および自然現象」という用法において、修飾対象で表される知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」を考察する。

(48) …四周是一望无际的绿油油的水稻田。<sup>291</sup> (CCL:新华社 2004 年 6 月份新闻报道)

(49) 麦苗兴致勃勃地繁荣生长，遍野是绿油油的一片。<sup>292</sup> (CCL:红日)

(50) 训练营地的入口处，工人们正紧张的铺沙子，整个草坪绿油油一片。<sup>293</sup> (CCL:新华社 2002 年 5 月份新闻报道)

(51) 看到别处稀稀落落的麻黄草，对比广夏一次成功的 2 万亩绿油油一望无边的世界最大的麻黄草种植基地，人们无不叹服科技的力量和广夏的棋高一筹。<sup>294</sup> (CCL: 2000 年人民日报)

<sup>288</sup> 「春、世界。」(筆者訳)

<sup>289</sup> 「茶園、葡萄園、蒸し菓子、株式市場、青いテント、帽子、オーツ麦、ギボウシ、牧場。」(筆者訳)

<sup>290</sup> 「田野、竹林、オーク、海、葉、芝生、苗、作物の山、土地、水、苗、唐辛子、畑、トウモロコシ。」(筆者訳)

<sup>291</sup> 「周りは見渡す限り果てしのない青々とした田んぼである。」(筆者訳)

<sup>292</sup> 「麦の苗が元気よく生い茂って、野原一面青々としている。」(筆者訳)

<sup>293</sup> 「野営訓練所の入り口では、土工が緊張しながら砂利を敷いていて、青々とした芝生が広がっている。」(筆者訳)

<sup>294</sup> 「別の場所のまばらなシナマオウを見て、広夏が一回で成功させた二万の青々とした辺り一面の世界最大

(48)～(51)の対象は“水稻田<sup>295</sup> (shuǐ dào tián)”、“麦苗<sup>296</sup> (mài miáo)”、“草坪<sup>297</sup> (cǎo píng)”、“麻黄草<sup>298</sup> (má huáng cǎo)”であり、いずれもの外界にある自然物および自然現象を描写する用法である。(48)～(51)は見渡す限り果てしのない自然風景を前提として、青く見えるという比喩的な叙述だと考えられる。(48)～(51)は绿油油 (lǜ yóu yóu)”を“绿色 (lǜ sè)”に置き換えると非文になる。油が光るように、つやつやと美しい意味が含まれる“油油 (yóu yóu)”を用い、“绿 (lǜ)”の绿色という修飾制限が解除できたと考える。その場合は、元々対象性質に備わっているものではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「知覚者の心身状態」から「対象の性質」へ読み替えることで、“绿油油 (lǜ yóu yóu)”は見渡す限り果てしのない空間の広大さと身近に感じられるようにできた。このように基本色彩語の疊語と共起する名詞は、視覚を通して対象と接する際得られる自らの身体経験からもたらす対象の性質が認識し直されると考えられる。

上述した考察から、“绿绿 (lǜ lǜ)”と“绿油油 (lǜ yóu yóu)”には次の使い分けがあることが確認できた。

(I)『分類語彙表』に基づき、“绿绿 (lǜ lǜ)”と“绿油油 (lǜ yóu yóu)”はどちらも「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞と共起しやすい。認知意味論の相互作用に基づき、話者と対象（共起語）との相互作用を考察した結果、中国語の“绿绿 (lǜ lǜ)”と“绿油油 (lǜ yóu yóu)”で表される対象の性質は、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質として認知されていることが確認でき、知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」としての関係性が明確になった。基本的“绿绿 (lǜ lǜ)”と“绿油油 (lǜ yóu yóu)”の叙述には、“麦苗<sup>299</sup> (mài miáo)”、“草坪<sup>300</sup> (cǎo píng)”などの外部世界の自然風景を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されていると考えられる。本来の基本色彩語“绿 (lǜ)”の対象を描写する範囲は、疊語化することによって拡大され、典型事例からの拡張表現の一種として容認される。

---

のシナマオウ植栽基地と比べてしまうと、人々は科学の力と広夏の技術力に感服させられる。」(筆者訳)

<sup>295</sup> 「田んぼ。」(筆者訳)

<sup>296</sup> 「麦の種。」(筆者訳)

<sup>297</sup> 「芝生。」(筆者訳)

<sup>298</sup> 「マオウの草。」(筆者訳)

<sup>299</sup> 「麦の種。」(筆者訳)

<sup>300</sup> 「芝生。」(筆者訳)

## 5.6 まとめ

本章では、基本色彩語の疊語がカテゴリーの拡張と大きな関わりがあると推察し、『分類語彙表』を用い、知覚者と知覚対象の意味との間の相互作用から生まれる2種類の「相互作用的性質」としての関係性を明確にした。1つは対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質と認識し直されている。もう1つは知覚者が対象と接する際得られる同じ身体経験の相互作用を行い、ある特定の時空間が対象の性質と認識し直されている。同一語基で、かつ繰り返しの形式上の類像性によって、そのようなカテゴリーの成員の段階性及びカテゴリー内の関連性が生じたことが見られ、言語形式と意味内容との間に類像性が認められる。考察した結果は以下のようにまとめられる。

まず、日本語における基本色彩語の疊語の場合、「白々」、「黒々」、「赤々」「青々」は「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞とよく共起しているが、「白々しい」は「1.3 人間活動—精神および行為」に属する名詞とよく共起している。そして、中国語における基本色彩語の疊語の場合、“白白 (bái bái)”、“白茫茫 (bái máng máng)”、“黒黒 (hēi hēi)”、“紅紅 (hóng hóng)”、“紅彤彤 (hóng tóng tóng)”、“緑緑 (lǜ lǜ)”、“緑油油 (lǜ yóu yóu)”はいずれも「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞とよく共起しているが、“黒圧圧 (hēi yā yā)”は「1.2 人間活動の主体」に属する名詞とよく共起している。以上の考察結果から、日中両言語における基本色彩語の疊語と共起する名詞性質には差異が確認できたが、どちらも「1.5 自然—自然物および自然現象」に属する名詞とよく共起していることが分かった。

また、認知言語学の「相互作用的性質」の概念に基づき、基本色彩語の疊語で表される対象の性質は、知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる2種類の「相互作用的性質」としての関係性を明確にした。

1つは、語基「白」を含む基本色彩語の疊語の対象が備わっている性質ではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質として認識し直されている。例えば、「この三連戦で登板もありますが、結果で勝負します。私はこの一問一答を読んで、怒りがこみ上げてきた。すべてが白々しい嘘だからである。」のように、具体的には、元々対象であるが備わっているものではなく、対象へ何らかの相互作用を行いその中から生じた知覚者の心身状態「見え透いている」が対象の性質と認識し直されていると考えられる。「白々しい」は知覚者が対象と接する際得られる同じ身体経験の反復から生ずる「好ましくない出来事

が起きる」というフレームを前提とし、「言葉」、「嘘」の人間の言動を描写する用法ができたと考えられる。

もう1つは、「黒々」、「赤々」、「青々」、「黒黒 (hēi hēi)」、「紅紅 (hóng hóng)」、「紅彤彤 (hóng tóng tóng)」、「緑緑 (lǜ lǜ)」、「绿油油 (lǜ yóu yóu)」のように元々対象に備わっているにもかかわらず、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質と認識し直されている。しかし、自然風景の広大さという対象の性質から分かるように、話者(知覚者)認識により、ある特定された時空間において対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じたと考えられる。このような対象へ何らかの相互作用は“黒圧圧 (hēi yā yā)”は知覚者が対象と接する際得られる同じ身体経験の反復から生ずる「密集して、真っ黒に見える」というフレームを前提とし、「人々」の人間活動の主体を描写する用法が生じたと考えられる。

上記の分析した結果から、この2種類の「相互作用的性質」は、いずれもカテゴリーの周辺例を焦点化する働きをするものであり、カテゴリーの成員に典型的なもの(視覚による客観的な叙述)から周辺的なもの(視覚による主観的な叙述)まで段階性があることが示唆された。すなわち、基本色彩語の豊語化には段階性のあることが明らかとなった。

山梨(2010)では、外部世界との相互作用に根ざす具体的な経験に基づいて形成されるイメージのレベルは、具象性を伴う表象レベルの一種として位置づけられる。このイメージ形成の能力は、われわれの認知能力の一部として重要な役割になっている。われわれには、さらにこの種の具象的なイメージのレベルからより抽象的なイメージの認知図式、すなわち、イメージ・スキーマを作り上げていく能力が備わっている。この種の能力は、外部世界の創造的な理解を可能とする人間の認知能力の根幹にかかわっている。このイメージ・スキーマの組みかえと拡張のプロセスを介して、日常言語の意味の世界を特徴づける(具象レベルから抽象レベルにいたる)様々な概念体系が作り上げられている。

山梨(2010)を参考にし、同一語基で、かつ繰り返しの形式上の類像性による日中両言語における基本色彩語の豊語の特徴は、知覚的な経験を介して形成されるイメージが、状況によって認知的に変容し、この変容のプロセスが日常言語の多様な表現を可能にする。「相互作用的性質」という概念を用いて、基本色彩語の豊語の意味がより詳細に説明する可能性を示した(図1)。



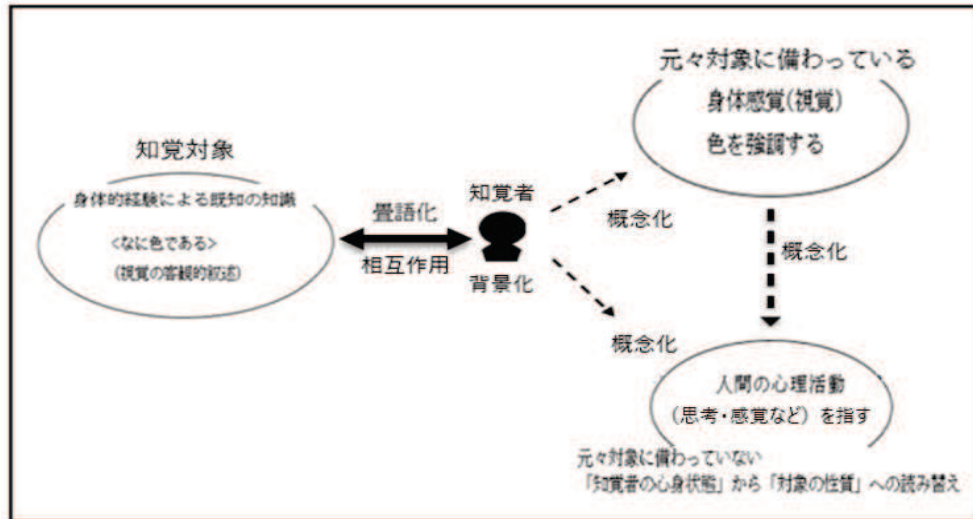


図1 相互作用による日中両言語における基本色彩語の疊語の特徴

図1に示すように、基本形式の「白」、「黒」、「赤」、「青」は元々対象の色を修飾する用法を持っている。話者は一般常識として認識され、視覚による客観的な叙述だと考えられる。日中両言語における基本色彩語は疊語化することによって、目の前の状況を描写する表現より、特定の場面及び状況に対して話者の感情・判断が含まれる表現が使われやすくなったことが明らかになった。

さらに、基本色彩語を体系的に見ると、語基である「白、白い」、「黒、黒い」、「赤、赤い」、「青、青い」という情態形容詞は人称制限がある<sup>301</sup>のに対し、疊語化することによって人称制限が解除され、「白々、白々しい」、「黒々、黒々しい」、「赤々、赤々しい」、「青々、青々しい」の叙述には、外部世界の情景や対象を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されている現象が見出された。

相互作用による対象の性質について、篠原（2008）では「知覚者の心身状態」から「対象の性質」への読み替えは、知覚者が対象と接する際得られる同じ身体経験の反復から生ずると述べている。以上考察してきたように、同一語基で、かつ繰り返しの形式上の類似性による日中両言語における基本色彩語の疊語の用法には、外部世界の情景や対象を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映され、視覚にかかわる身体的な経験が話者の主観的な判断に関わる叙述に比喩的に使われていることが明らかになった。すなわち、基本色彩語の疊語に関わる次

<sup>301</sup> 篠原（2008）は「赤い」、「丸い」などの情態形容詞は、話者（知覚者）としての「私」を主語にとることはできず、話者（知覚者）の心のあり方として理解できることはない。例えば、「\*私は（このバラが）赤い<sup>301</sup>」である。



元は、具体的な視覚の感覚表現を特徴づけるだけでなく、話者の心理的、感情的な内面世界の主観的な概念を比喩的に特徴づけられていると考えられる。

引き続き、第6章においては、本章で得た結果をもとに、同一語基である基本色彩語とその畳語の意味拡張を体系的に分析することを通じ、母語話者が視覚による同一語基を持つ基本色彩語の類像性をどのような反映し、視覚を介した認知プロセスを探る。

## 第6章 視覚を介した基本色彩語とその畳語の意味関係及び認知プロセス

第5章では、同一語基で、かつ繰り返しの形式上の関連性が見られた日中両言語における基本色彩語の畳語の叙述には、外部世界の情景や対象を知覚し表現していく認知主体の視線の移動が反映されている現象が確認できた。さらに、基本色彩語は外部世界との相互作用に根ざす具体的な経験に基づいて形成されるイメージ・スキーマの組みかえには2種類の相互作用的性質が見出された。1つは元々対象に備わっているものではなく、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質と認識し直されている。もう1つは元々対象に備わっているにもかかわらず、対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質と認識し直されている。

本章では、その動機付けをより一層掘り下げて、基本色彩語の畳語について、構成要素である基本形式との意味拡張についての考察を行いながら、母語話者が視覚による同一語基を持つ基本色彩語の関連性をどのように反映させ、視覚を介した認知プロセスを明らかにする。

### 6.1 はじめに

本章は事物の様子、在り方を描写する表現の中で基本色彩語とその畳語の意味拡張とその背景にある視覚のメタファー的転義に焦点を絞り、考察を行うものである。6.2節～6.5節では、順に「白」、「黒」、「赤」、「青」の考察を行っていく。

まず、辞書における「白」と「白い」の意味を分析し、基本義と転義を認定したうえで、それらの統合する意味関係を浮き彫りにする。次に、同一語基を持つ基本色彩語（「白」、「白い」）とその畳語（「白々」、「白々しい」）の辞書的意味を分析し、基本義と転義を認定したうえで、それらの統合する意味関係を明らかにする。最後に、6.6節では、基本色彩語とその畳語との意味関係を体系的に考察することにより、視覚による基本色彩語から畳語へ、認識・イメージがどのように作り上げるのか、その動機づけるとして言葉の背景にある視覚のメタファー的転義を提示する。

## 6.2 語基「白」を含む日中両言語における基本色彩語とその疊語

『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)では、「白」に関する意味には12種類あり、「白い」に関する意味には8種類あると記述されている。「白」と「白い」の意味の分類と記述について、ある特定の専門家や仲間内だけで通じる言葉や専門用語を除き、その他の意味用法は2つのグループに分けられることが確認された。すなわち、同類のものと異類のものに分類され、次のように整理できた。

### (1) <同類のもの>

- a. 白色である。雪、塩などの色。【白・白い】
- b. 衣服、紙などでどの色にも染めてないままの白である。何も書いてない。【白・白い】
- c. 犯罪容疑がないこと。また、晴れること。潔白。【白・白い】

### (2) <異類のもの>

- a. 明るい。かがやいている。あざやかである。【白い】
- b. 経験にとぼしい。素人らしい。また、野暮である。【白い】
- c. 白い基石。白石。また、その石を持つ対局者。【白】

(1) <同類のもの>の場合は「白」と「白い」の意味が類似しているものであり、(2) <異類のもの>の場合は「白」と「白い」の意味が類似していないものである。よって、「白」と「白い」には使い分けがあることが分かる。

さらに、(1)と(2)の意味用法には、色を描写するものと、色を描写しないものに大きく分けられる。まず、具体物の色を描写する(1a)、(2c)は<白色>という意味にまとめられる。そして、具体物・抽象物の色を描写する(2a)は<目に明るさを感じさせるものである>が挙げられる。また、具体物・抽象物の色を描写しない(1b)、(1c)、(2b)は<何もない>という抽象的な意味にまとめられる。その中で、<白色>という意味が基本色彩語「白」、「白い」には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプの意味(基本義)だと考えられる。基本義<白色>から転義<目に明るさを感じさせるものである>へ意味拡張において「白」、「白い」は色相だけではなく、「朝、昼間」という時間を描写することになる。また、基本義<白色>から転義<何もない>へ拡張で「白」、「白い」は色相ではなく、「衣服、紙などの状態」、「犯罪容

疑]、「経験」を描写することになる。以上、述べてきたように同じ「白」語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図1のように整理する。

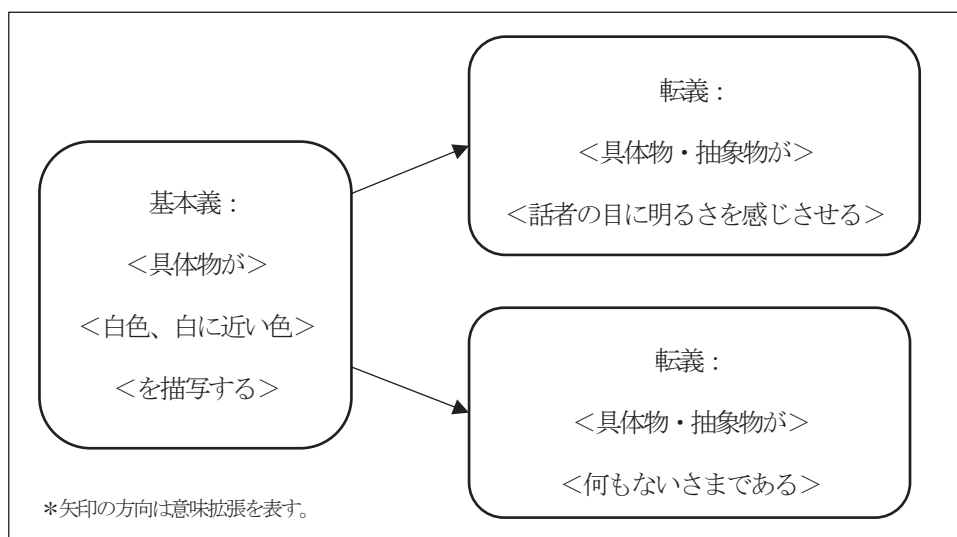


図1 「白・白い」の意味拡張

次に、「白々」の用法と意味解釈を考察し、基本的な意味用法がどのように引き継がれるかを論じる。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）における「白々」の意味の分類と記述について、ある特定の専門家や仲間内だけで通じる言葉や専門用語は除いている。「白々」の意味は「白・白い」と類似している同類のものをまとめ、類似していない異類のものを抽出し、次のように整理した。

(3) <同類のもの>

- a. 白色である。雪、塩などの色。【白・白い・白々】
- b. 明るい。かがやいている。あざやかである。夜がしだいに明けてゆく。【白い・白々】
- c. 犯罪容疑がないこと。また、晴れること。潔白。はっきりしている。【白・白い・白々】
- d. 何も書いてない。衣服、紙などでどの色にも染めてないままの白である。気持ちが静まるさま。【白・白い・白々】

(4) <異類のもの>

- a. 白い碁石。白石。また、その石を持つ対局者。【白】
- b. 経験にとぼしい。素人らしい。また、野暮である。【白い】
- c. せせら笑うさま、あざけり笑うさま。【白々】

d. しらじらしいさま、興ざめがするさま。【白々】

(3) <同類のもの>の場合は「白」と「白い」の意味が類似しているものであり、(4) <異類のもの>の場合は「白々」と「白・白い」の意味が類似していないものである。よって、「白」と「白い」と「白々」の用法には異同が確認された。

さらに、上記の意味用法は、色を描写するものと、色を描写しないものに大きく分けられる。まず、具体物の色を描写する (3a)、(4a) は<白色>という意味にまとめられる。そして、具体物・抽象物の色を描写する (3b) は<目に明るさを感じさせるものである>が挙げられる。また、具体物・抽象物の色を描写しない (3c)、(3d)、(4b)、(4d) は<何もない>という抽象的な意味にまとめられる。さらに、(4c) は相手の能力や実力などが無いことに対し、ばかにして悪く言ったり笑ったりするという人間の内面を描写する意味が確認できた。その中で、<白色>という意味が基本色彩語と畳語には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプの意味(基本義)だと考えられる。基本義<白色>から転義<目に明るさを感じさせるものである>へ意味拡張において「白々」は色相だけではなく、目の前にある状況を描写することになる。以上、述べてきたように同じ「白」語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図2のように整理する。

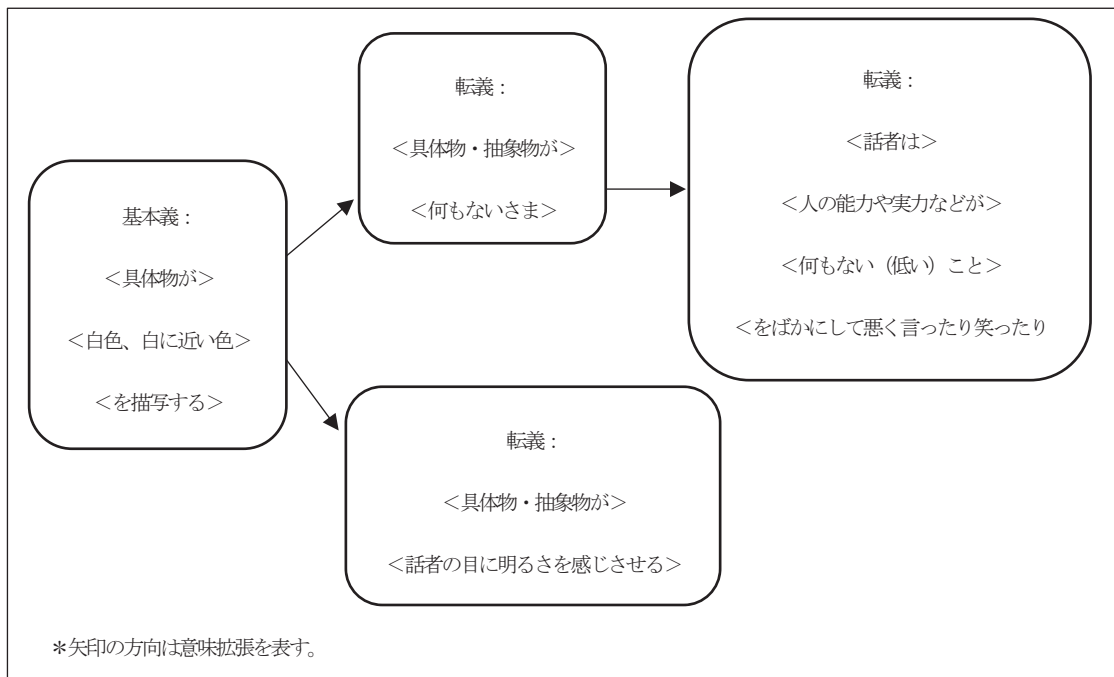


図2 「白・白い・白々」の意味拡張

次に、「白々しい」の用法と意味解釈を考察し、基本的な意味用法がどのように引き継がれるかを論じる。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）における「白々しい」の意味の分類と記述について、ある特定の専門家や仲間内だけで通じる言葉や専門用語は除いている。「白々」の意味は「白・白い・白々」と類似している同類のものをまとめ、類似していない異類のものを抽出し、次のように整理した。

(5) <同類のもの>

- a. 白色である。雪、塩などの色。【白・白い・白々・白々しい】
- b. 明るい。かがやいている。あざやかである。夜がしだいに明けてゆく。【白い・白々・白々しい】
- c. 犯罪容疑がないこと。また、晴れること。潔白。はっきりしている。【白・白い・白々・白々しい】
- d. 何も書いてない。衣服、紙などでどの色にも染めてないままの白である。気持ちが静まるさま。【白・白い・白々】
- e. しらじらしいさま、興ざめがするさま。【白々・白々しい】

(6) <異類のもの>

- a. 白い基石。白石。また、その石を持つ対局者。【白】
- b. 経験にとぼしい。素人らしい。また、野暮である。【白い】
- c. 知っていながら知らないふりをするさまである。しらばくれている。【白々しい】
- d. せせら笑うさま、あざけり笑うさま。【白々】

(5)は「白々しい」と「白・白い・白々」が類似している意味であり、(6)は「白々しい」と「白・白い・白々」が類似していない意味である。よって、「白」と「白い」と「白々」と「白々しい」の用法には異同が確認できた。

さらに、上記の意味用法には、色を描写するものと、色を描写しないものに大きく分けられる。まず、具体物の色を描写する(5a)、(6a)は<白色>という意味にまとめられる。そして、具体物・抽象物の色を描写する(5b)は<目に明るさを感じさせるものである>が挙げられる。また、具体物・抽象物の色から話者の気持ちへの描写をする(5c)、(5d)、(6b)、(6d)は<何もない>という抽象的な意味にまとめられる。それから、(5e)は相手の能力や実力などが低い(何もない)ことに対し、ばかにして悪く言ったり笑ったりするという人間の内面を描写する



意味を確認した。さらに、(6c) は真実でないことが見え透いているという話者の認識への描写をする意味が確認できた。その中で、〈白色〉という意味が基本色彩語と畳語には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプの意味（基本義）だと考えられる。基本義〈白色〉から転義〈目に明るさを感じさせるものである〉へ意味拡張において「白々しい」は色相だけではなく、目の前にある指示対象の状態を描写することになる。基本義〈白色〉から転義〈何もない〉への拡張で「白々しい」は色相ではなく、「物事」、「話者の気持ち、振る舞い」を描写することになる。以上、述べてきたように同じ「白」語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図3のように整理する。

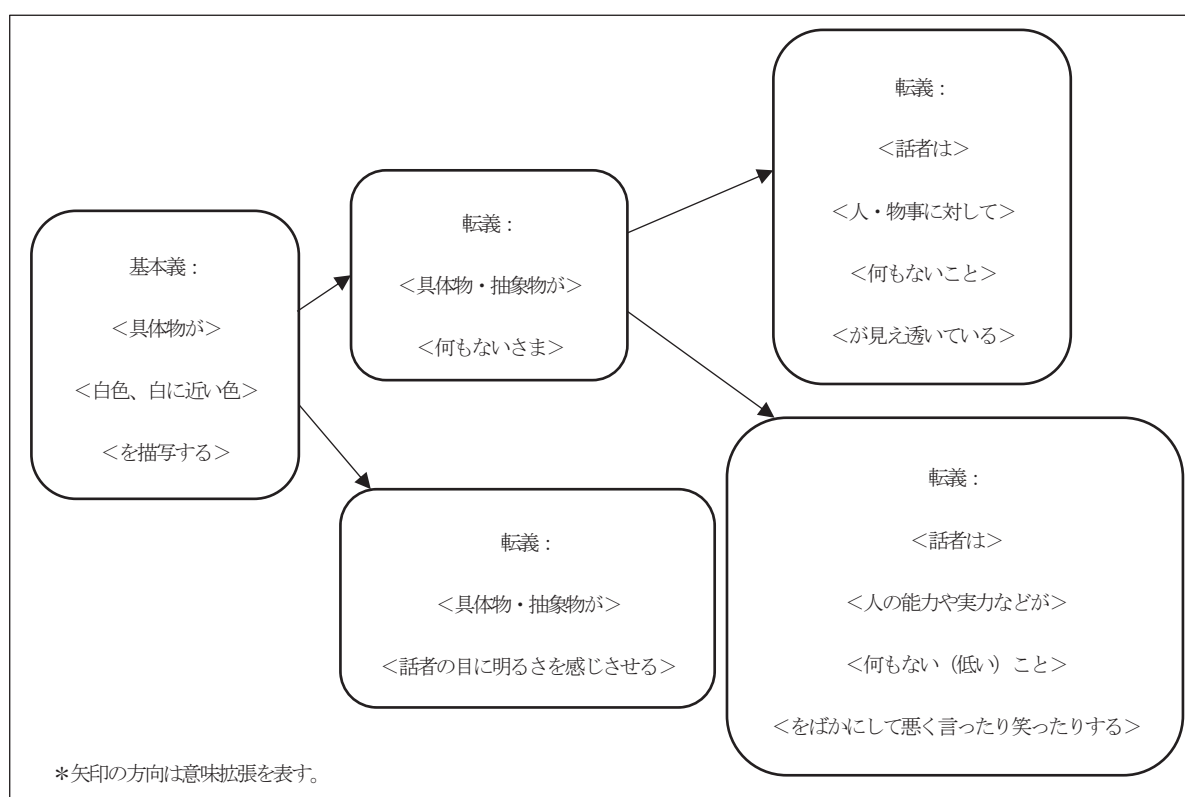


図3 「白・白い・白々・白々しい」の意味拡張

以上、語基「白」を含む基本色彩語とその畳語を表す意味関係を考察し、「白・白い・白々・白々しい」における意味拡張が確認できた。以下では、認知意味論のイメージ・スキーマを用い、日本語母語話者が持つ視覚による「白・白い・白々・白々しい」の表現がどのような意味変化を遂げ、どのようなイメージを作り上げていくかを考察する。

前述したように、「白・白い・白々・白々しい」に見られた体系的な意味拡張は同一語基の類似関係によって動機付けられている。具体的にみると、「白ワイン」、「白猫」、「白い歯」、「白い

雪」などは視覚による具体物の〈白色〉を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「静的描写」と名付け、「白・白い」の一般的な用法として考える。話者が「静的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の基本形式「白・白い」を使用する。しかし、「白々と夜が明ける」、「白々とした夜明け」は視覚による時間軸への認識が付け加えられた例である。これらは視覚を通じ、特定の時間帯に対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「動的描写」と名付け、「白々」の用法として考える。話者が「動的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の疊語「白々」を使用する。意味の背景にある視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから時間感覚へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。そして、「白々とした空虚感」、「白々とした気分」などは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握しにくい表現である。視覚に基づく〈何もない〉という具体的な描写場面を背景として、特定の状態にある人間の感覚のイメージをより強くする。本論文では、この表現を「内面描写」と名付け、「白々」の用法としても考える。話者が「内面描写」に視点を置くとき、基本色彩語の疊語「白々」を使用する。さらに、「白々しい嘘」、「白々しい内容」なども視覚を通じ、対象の特徴を直接把握しにくい表現である。視覚に基づく〈何もない〉という具体的な描写場面を背景として、その時に感じる緊張、無関心などのような気持ちという話者の感情にかかわっているもののみならず、社会的及び文化的観点からの動機付け〈マイナスイメージ・好ましくない認識〉が埋め込まれた背景として存在することが捉えられる。

福井（1991）では、人間社会の認識によって生ずる色彩の識別能力の差異が生じると説明している

生理学的にいうと、人類に色彩の識別能力の差異はないということになる。にもかかわらず、社会によって色彩基本語をふくめた色彩認識にちがいが見られるのは、文化の特性によるものであり、網膜の生理解剖学的なちがいなどによるものではないのである」と述べ、色彩の認識や分類体系を決定するうえで文化というメタファーの果たす役割を重視している。

福井（1991:34）

また、早瀬（2008）では、話者（概念化者）による相互作用の成立としては、まず、対象へ何らかの相互作用を行い、それを話者が知覚・認識することを前提とする。次に、話者が対象

物を知覚・認識したうえで、その経験を対象の性質として読み替えていることが窺える。この認知プロセスの順序が経験的に自然な流れであると述べている。

福井（1991）と早瀬（2008）を参考にし、本論文では、社会的及び文化的観点からの動機付けが埋め込まれた「白々しい嘘」、「白々しい内容」などの表現を「認識描写」と名付け、「白々しい」の一般的な用法として考える。話者が「認識描写」に視点を置くとき、基本色彩語の畳語「白々しい」を使用する。

以上の考察により、「白・白い・白々・白々しい」の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、畳語化することによって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。考察した結果、同一語基「白」を持つ基本色彩語とその畳語の意味拡張の基本的な方向性は図4にまとめられる。

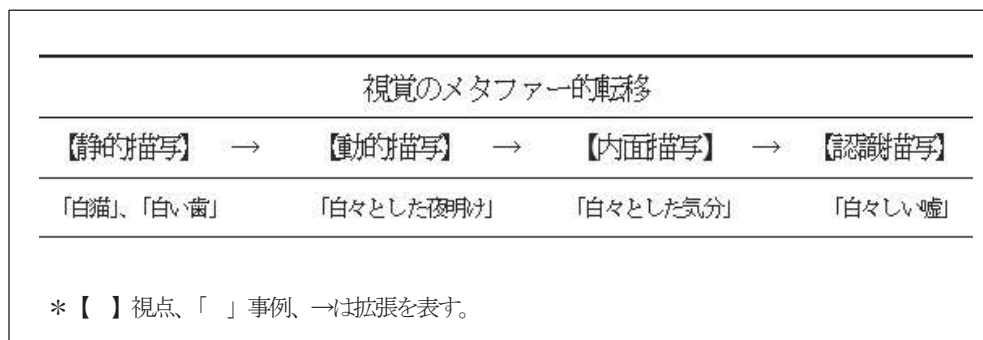


図4 視覚による「白・白い・白々・白々しい」の認知プロセス

一方、中国語における“白 (bái)・白白 (bái bái)・白茫茫 (bái máng máng)”にも図4のような視覚のメタファー的転義を介した意味関係が見られるかを考察する。

『現代漢語詞典第7版』（2016）では、“白 (bái)”は11つの意味、“白白 (bái bái)”は2つの意味、“白茫茫 (bái máng máng)”は1つの意味があると記述されている。ここでは、『現代漢語詞典第7版』（2016）における“白 (bái)”と“白白 (bái bái)”と“白茫茫 (bái máng máng)”の意味の分類と記述について、ある特定の専門家や仲間内だけで通じる言葉や専門用語は除いている。その他の意味は同類のものをまとめ、異類のものを抽出し、次のように整理した。

(7) <同類のもの>

- a. 白色、白に近い色である。雪、霜などの色。【白・白白・白茫茫】
- b. 無添加、無効果。【白・白白】

c. むだに、いたずらに。【白・白白】

(8) <異類のもの>

a. 明るい。かがやいている。【白】

b. 明らかである。【白】

c. 見渡すかぎりまっ白である。【白茫茫】

(7) <同類のもの>の場合は“白 (bái)”と“白白 (bái bái)”と“白茫茫 (bái máng máng)”が類似している意味であり、(8) <異類のもの>の場合は“白 (bái)”と“白白 (bái bái)”と“白茫茫 (bái máng máng)”が類似していない意味である。よって、“白 (bái)”と“白白 (bái bái)”と“白茫茫 (bái máng máng)”には使い分けがあることが分かる。

さらに、(7)と(8)の意味用法には、色を描写するものと、色を描写しないものに大きく分けられる。まず、具体物の色を描写する(7a)は<白色>という意味にまとめられる。そして、具体物・抽象物の色を描写する(8a)は<目に明るさを感じさせるものである>が挙げられる。また、具体物・抽象物の色を描写しない(7b)は<何もない>という抽象的な意味にまとめられる。それから、具体物・抽象物の色から話者の気持ちへの描写をする(7c)は何ら利益や効果などもない(何もない)ことに対し、無力感を感じるという人間の内面を描写する意味が確認できた。さらに、(8b)、(8c)は包み隠されておらず、いかにも見え透いているという話者の認識への描写をする意味が確認できた。その中で、<白色>という意味が基本色彩語と疊語には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプの意味(基本義)だと考えられる。基本義<白色>から転義<目に明るさを感じさせるものである>へ意味拡張において“白茫茫 (bái máng máng)”は色相だけではなく、目の前にある指示対象の状態を描写することになる。基本義<白色>から転義<何もない>への拡張で“白茫茫 (bái máng máng)”は色相ではなく、「物事」、「話者の気持ち、振る舞い」を描写することになる。以上、述べてきたように同じ“白 (bái)”語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性が確認できた。図5のように整理できる。

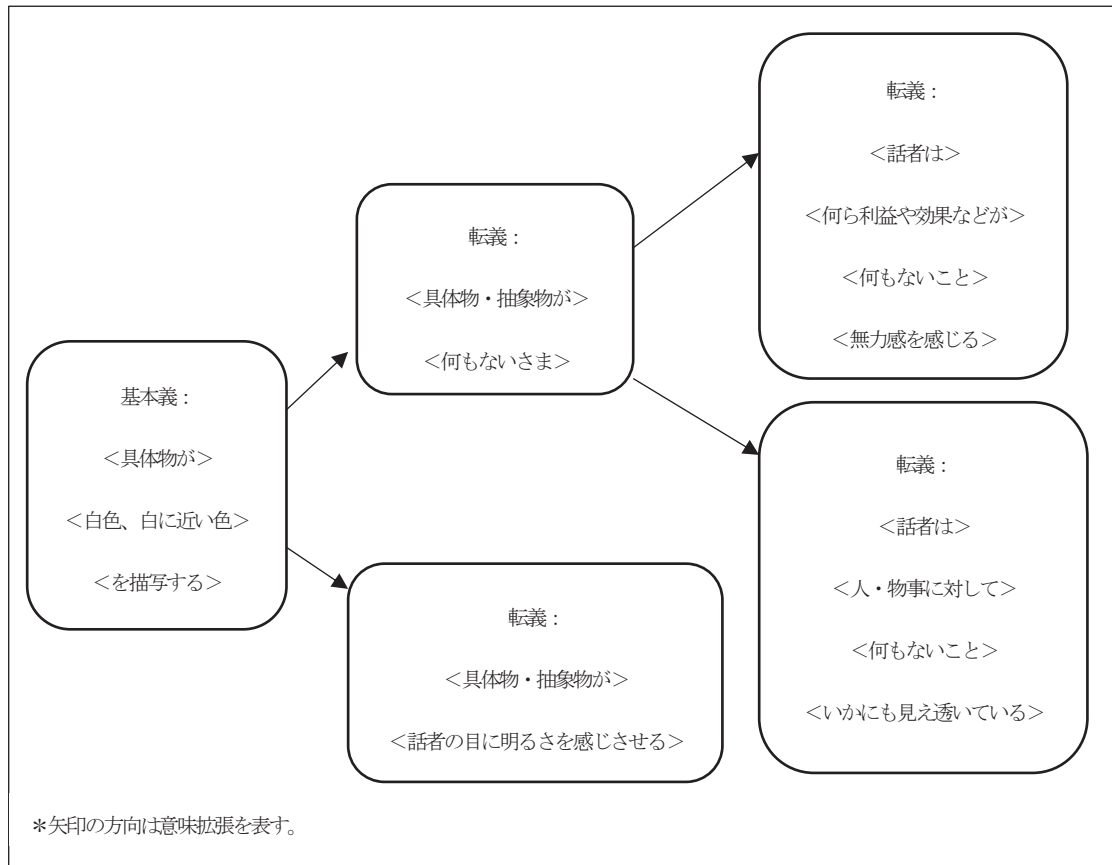


図5 “白・白白・白茫茫”の意味拡張

以上、語基“白 (bái)”を含む基本色彩語とその疊語を表す意味関係を考察し、“白 (bái)”と“白白 (bái bái)”と“白茫茫 (bái máng máng)”における意味的拡張が確認できた。以下では、認知意味論のイメージ・スキーマを用い、中国語母語話者が持つ視覚による“白 (bái)”と“白白 (bái bái)”と“白茫茫 (bái máng máng)”の表現がどのような意味変化を遂げ、どのようなイメージを作り上げていくかを考察する。

前述したように、“白 (bái)・白白 (bái bái)・白茫茫 (bái máng máng)”に見られた体系的な意味拡張は同一語基の類似関係によって動機付けられている。具体的にみると、“白雪<sup>302</sup> (bái xuě)”、“白猫<sup>303</sup> (bái māo)”などは視覚による具体物の<白色>を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。そこで、この表現を「静的描写」と名付け、“白 (bái)・白白 (bái bái)・白茫茫 (bái máng máng)”の一般的な用法として考える。話者が「静的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の基本形式とその疊語を使用する。しかし、“白天<sup>304</sup> (bái

<sup>302</sup> 「白雪。」(筆者訳)

<sup>303</sup> 「白猫。」(筆者訳)

<sup>304</sup> 「昼、昼間である。」(筆者訳)

tiān)”は視覚による時間軸への認識が付け加えられた例である。これらは視覚を通じ、特定の時間帯に対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「動的描写」と名付け、“白 (bái)”の用法として考える。話者が「動的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の“白 (bái)”を使用する。話者の視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから時間感覚へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。また、“白白的牺牲”などは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握しにくい表現である。視覚に基づく<何もない>という具体的な描写場面を背景として、特定の状態にある人間の感覚のイメージをより強くする。本論文では、この表現を「内面描写」と名付け、“白白 (bái bái)”の用法としても考える。“满脑子白茫茫一片，像这儿的雪<sup>305</sup>。”も視覚を通じ、対象の特徴を直接把握しにくい表現である。視覚に基づく<何もない>という具体的な描写場面を背景として、その時に感じる無力、無能などのような気持ちという話者の感情にかかわっているもののみならず、社会的及び文化的観点からの動機付け<いかにも見え透いている>が埋め込まれた背景として存在することが捉えられる。本論文では、この表現を「認識描写」と名付け、“白茫茫 (bái máng máng)”の一般的な用法として考える。

以上の考察により、“白 (bái)・白白 (bái bái)・白茫茫 (bái máng máng)”の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、畳語化することによって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。考察した結果、同一語基“白 (bái)”を持つ基本色彩語とその畳語の意味拡張の基本的な方向性は図6にまとめられる。

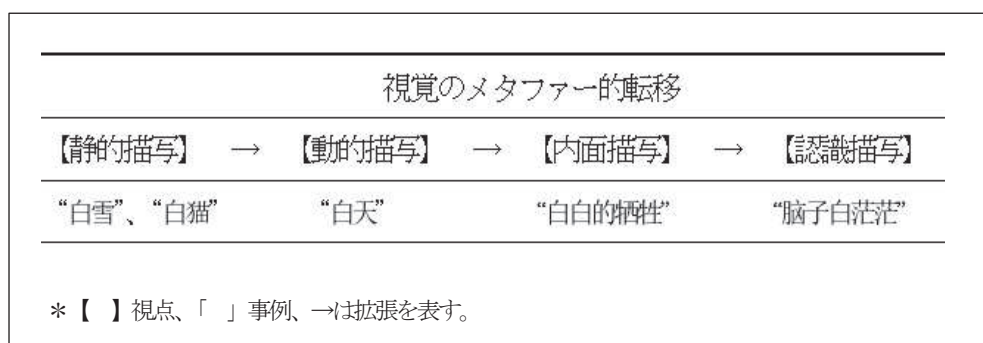


図6 視覚による“白・白白・白茫茫”の認知プロセス

<sup>305</sup> 「頭が真っ白になって、まるでここの雪のようである。」(筆者訳)



### 6.3 語基「黒」を含む日中両言語における基本色彩語とその疊語

『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)では、「黒」は12の意味、「黒い」は9つの意味があると記述されている。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)における「黒」と「黒い」の意味の分類と記述について、ある特定の専門家や仲間内だけで通じる言葉や専門用語は除いている。その他の意味は同類のものをまとめ、異類のものを抽出し、次のように整理した。

#### (9) <同類のもの>

- a. 黒色である。木炭や墨などの色。【黒・黒い】
- b. 犯罪の疑いが濃厚である。【黒・黒い】

#### (10) <異類のもの>

- a. 碁の黒石。また、その石を持った方の者。【黒】
- b. 黒色の馬。黒毛の馬。【黒】
- c. 濃い紫、にびいろなどの黒っぽく暗い感じのする色。【黒い】
- d. 肌が日に焼けている色。【黒い】
- e. きたない。よごれている。【黒い】
- f. 悪心があつて公明でない。悪い。腹黒い。【黒い】
- g. その道に老練である。くろうとである。【黒い】
- h. 粹である。また、人情に通じてものわかりがよい。【黒い】

(9) <同類のもの>の場合は「黒」と「黒い」の意味が類似しているものであり、(10) <異類のもの>の場合は「黒」と「黒い」の意味が類似していないものである。よって、「黒」と「黒い」には使い分けがあることが分かる。

さらに、(9)と(10)の意味用法には、色を描写するものと、色を描写しないものに大きく分けられる。まず、具体物の色を描写する(9a)、(10a)、(10b)、(10d)は<黒色>という意味にまとめられる。そして、具体物・抽象物の色を描写する(10c)は<目に暗さを感じさせるものである>が挙げられる。そして、具体物・抽象物の色を描写しない(9b)、(10g)は<何かある>という抽象的な意味にまとめられる。また、具体物・抽象物の色を描写しない(10e)、(10f)、

(10h) は<好ましくない>という抽象的な意味にまとめられる。その中で、<黒色>という意味が基本色彩語「黒」、「黒い」には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプの意味（基本義）だと考えられる。基本義<黒色>から転義<何かある>へ拡張で、「黒い」は色相ではなく、「犯罪容疑」、「経験」を描写することになる。基本義<黒色>から転義<何かある>へ拡張で「黒い」は色相ではなく、「人の性格」、「感情」、「行為」を描写することになる。以上、述べてきたように同じ「黒」語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図7のように整理する。

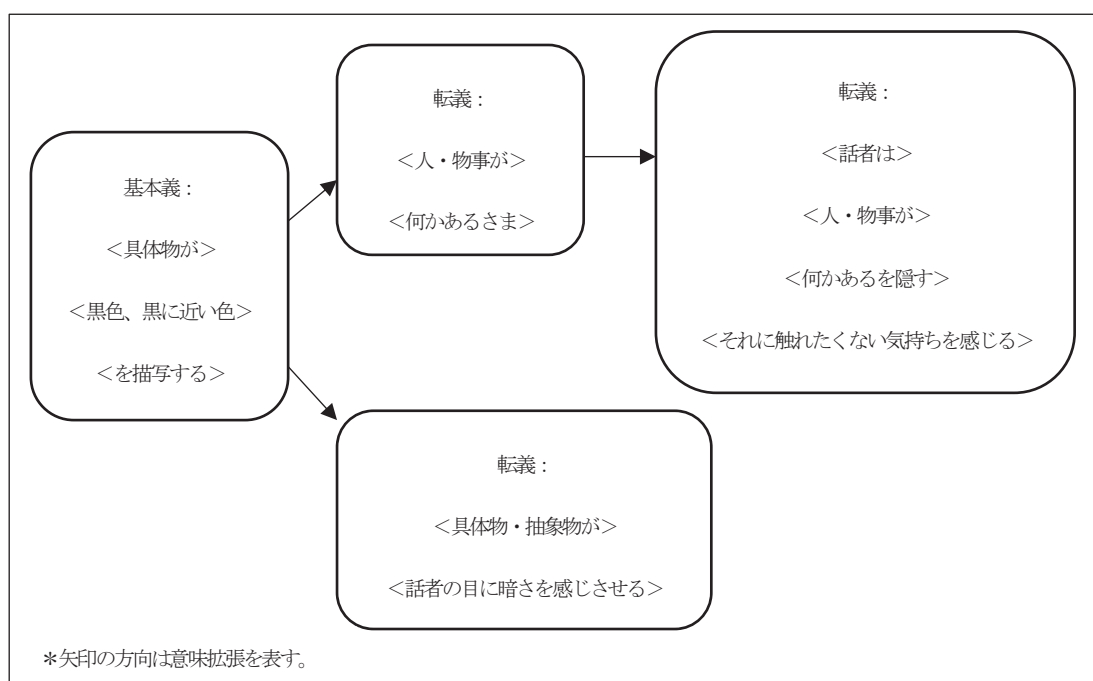


図7 「黒・黒い」の意味拡張

次に、「黒々」の用法と意味解釈を考察し、基本的な意味用法がどのように引き継がれるかを論じる。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）における「黒々」の意味を取り上げる。

黒々：はなはだしく黒いさまを表わす。

（『小学館日本国語大辞典第2版』2001:1124）

『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）では、「黒々」は「黒」または「黒い」と異なり、視覚による具体的な物の色を表す意味が記述されていない。色はどのようにはなはだしいのか、

詳細な内容が明記されていない。すなわち、「黒々」の意味がどのように変わってきたのかは単なる辞書の意味からでは分からない。以下では、『BCCWJ』から収集した「黒々」の用例を用い、意味用法を考察する。

(11)a. 憂いを宿して黒々と光る瞳に、不敵な闘志がのぞいている。(BCCWJ LBa9\_00034:谷恒生『妖少女』1986)

b. 大地は濡れて、黒々としていた。(BCCWJ LBd9\_00013:ヴィトルド・ゴンブローヴィッチ『世界の文学』1989)

(11a)と(11b)はどちらも視覚を通じる描写表現である。「闘志を燃やしている」、「雨に濡れてしまった」はあるひと続きの状態を描写するが、「黒色」を表しつつ、「何かある」という抽象的な意味も含まれる。例えば、(12)のように入れ替えることが可能である。

(12)a. 闘志を宿した瞳が、何かが光っている。

b. 大地は濡れたあと、何かが残っている。

また、「黒々」は特定の状況、出来事について人間の感覚対象のイメージをより強くするため、目の前の状況・場面がどの段階にあるかという「動的描写」を修飾することが可能である。『BCCWJ』では、(13)、(14)の例が挙げられる。

(13)月光がアスファルトに反射り、大きな鉄の門がその光を受けて黒々と浮かび上がる。  
(BCCWJ LBF9\_00090:早坂律子『超魔炎獄変』1991)

(14)時間がたつにつれて影が長く、黒々としてきたことさえ記憶に残っていたが、あの日の午後は厚い雲が垂れこめていたことを考えると、その記憶が現実であるはずはなかった。(BCCWJ LBn9\_00114:トマス・H・クック『死の記憶』1999)

(13)、(14)は具体物・抽象物の色を描写する<目・心に暗さを感じさせるものである>という意味である。(13)は視覚を通じ、「アスファルトの反射による鉄の門が少しずつ見えてきたさま」のように時間の開始を表す。(14)は視覚を通じ、「時間の経過と共に自分の記憶に残っている」のように時間的に変化して行く意味を表す。よって、「黒々」は色相だけではなく、目の前

にある指示対象の状態を描写している。基本義<黒色>から転義<程度のはなはだしいさま>へ意味拡張において「黒々」は色相だけではなく、指示対象の状態を描写することになる。以上、述べてきたように同じ「黒」語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図8のように整理する。

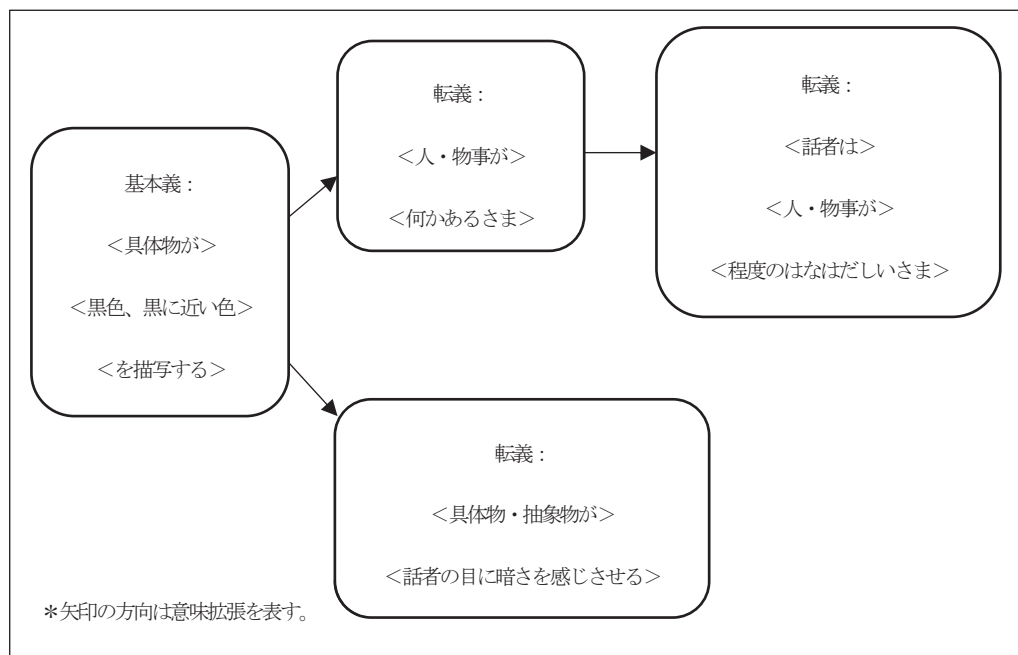


図8 「黒・黒い・黒々」の意味拡張

次に、「黒々しい」の用法と意味解釈を考察し、基本的な意味用法がどのように引き継がれるかを論じる。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）における「黒々しい」の意味を取り上げる。

黒々しい：黒々としている。

（『小学館日本国語大辞典第2版』2001:1124）

『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）では、「黒々しい」は「黒」または「黒い」と異なり、視覚による具体的な物の色を表す意味が記述されていない。色はどのようにはなはだしいのか、詳細な内容が記述されていない。「黒々しい」の意味がどのように変わってきたのかは単なる辞書の意味からでは分からない。そのため、コーパスを使い、「黒々しい」の意味用法を考察する必要があると考え、『NLT』と『BCCWJ』を検索した。しかし、「黒々しい」の用例が見

つからなかった。「黒々しい」は辞書に記述されているが、あまり使用されていない理由いまだに解明されていない。ここでは、「黒々しい」の意味用法を調べるため、「Yahoo!JAPAN<sup>306</sup>」から実例を収集し、「黒々しい」と共起する名詞をその特徴に基づき、分類する。共起する名詞は様々であり、「瞳、毛、髪、カレー、スープ、岩状、夜、海……」などが挙げられ、主に「人間の外見」、「食べ物」、「自然風景」などが検索できた。以下では、「黒々しい」はどのように使われているかを考察する。

(15)a. まつげの濃さや量による効果。(略)フサフサで黒々しい毛は若々しい印象をあたえます。(「Yahoo!JAPAN<sup>307</sup>」)

b. 魔女の黒マントをイメージした黒々しいカレー。(「Yahoo!JAPAN<sup>308</sup>」)

(15a)と(15b)からは、「黒々しい」はどのような意味を表しているか、また「黒々」の意味とどのように関わっているかは未だ解明されていない。そのため、(16)における「黒々しい」が「黒々」に置き換えられるかを観察する。

(16)a. フサフサで黒々とした毛は若々しい印象をあたえます。(作例)

b. 魔女の黒マントをイメージした黒々としたカレー。(作例)

5人の日本人母語話者にその意味用法を確認したところ全員は、(15a)と(15b)は(16a)と(16b)と同じ意味を表すと回答した。「黒々しい」は「黒々」と同様に、〈黒色〉、〈程度のはなはだしいさま〉意味を表す。「黒々しい」が一般的に使われていない理由は「黒々」と大きく関わっていると言える。「黒々」は基本的な意味を引継ぎ、〈程度のはなはだしいさま〉という強調の意味を表す。「黒々」は「強調」という新たなイメージが作り上げられたが、視覚による認識の範囲がより狭くなった。認識の範囲は修飾する対象と同じ、「黒々」は他の語と共起することによって、新たな意味に拡張していくことが困難である。「黒々」は新たな意味として認識しない限り、「黒々しい」という畳語を使用する必要もないと推察できる。

以上、語基「黒」を含む基本色彩語と畳語を表す意味関係を考察し、「黒・黒い・黒々・黒々

<sup>306</sup> 約116例を抽出した(検索日は2020.3.17である)。

<sup>307</sup> 引用サイト:<https://www.kenji-group.co.jp/salon/tamagaku/staffblog/5512>(検索日は2020.3.17である)。

<sup>308</sup> 引用サイト:[https://blog.goo.ne.jp/hello\\_0518bun/e/2aed7198d1ff0512e6d5b5a3a766ba55](https://blog.goo.ne.jp/hello_0518bun/e/2aed7198d1ff0512e6d5b5a3a766ba55)(検索日は2020.3.17である)。

しい」における意味的拡張が確認できた。以下では、認知意味論のイメージ・スキーマを用い、日本語母語話者が持つ視覚による「黒・黒い・黒々・黒々しい」の表現がどのような意味変化を遂げ、どのようなイメージを作り上げていくかを考察する。

前述したように、「黒・黒い・黒々・黒々しい」に見られた体系的な意味拡張は同一語基の類似関係によって動機付けられている。具体的にみると、「黒髪」、「黒小豆」、「黒い服」、「黒い鞆」などは視覚による具体物の〈黒色〉を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「静的描写」と概念化することができ、「黒・黒い」の一般的な用法として考える。話者が「静的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の基本形式「黒・黒い」を使用する。また、「闇が黒々と広がっている」といった視覚による時間軸への認識が付け加えられた例である。これらは視覚を通じ、特定の時間帯に対象の特徴を直接把握できる表現である。この表現を「動的描写」と名付け、「黒々」の一般的な用法として考える。話者が「動的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の畳語「黒々」を使用する。話者の視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから時間感覚へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。「黒々しい毛」、「黒々しいカレー」なども視覚による具体物の〈黒色〉を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。この表現を「静的描写」と名付け、「黒々しい」の一般的な用法として考える。「黒々しい」は視覚により、他の語と共起することによって何らかのイメージを作り上げ、新たな意味に拡張することは見られないことから、基本色彩語の畳語「黒々しい」は新たな意味として認識しない限り、「黒々しい」を使用する必要がないと考えられる。第4章でも述べたように、「黒々しい」に関する表記形式は『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)のみである。そのため、基本色彩語の畳語「黒々しい」は新たな意味として認識しない限り、「黒々しい」を使用する必要はないと考えられる。よって、「黒々しい」は「白々しい」と異なり、あまり使われていないと言える。

以上の考察により、「黒・黒い・黒々・黒々しい」の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、畳語化することによって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。考察した結果、視覚のメタファー的転義の結果は図9にまとめられる。



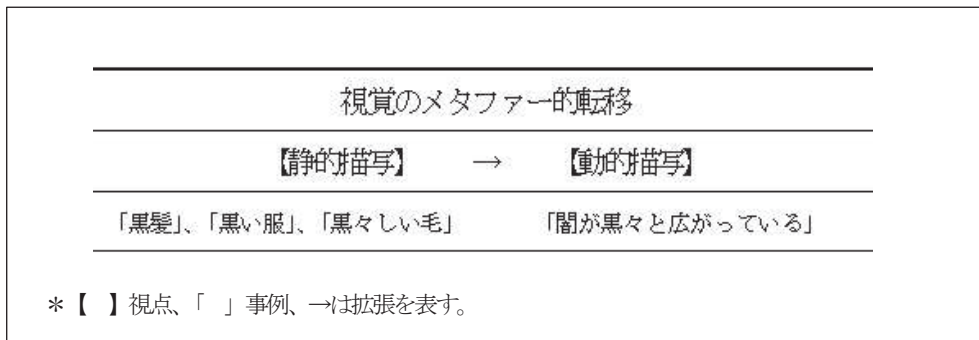


図9 視覚による「黒・黒い・黒々・黒々しい」の認知プロセス

一方、中国語における“黒 (hēi)・黒黒 (hēi hēi)・黒圧圧 (hēi yā yā)”にも図9のような視覚のメタファー的転義を介した意味関係が見られるかを考察する。

『現代漢語詞典第7版』(2016)では、“黒黒 (hēi hēi)”の意味が記述されていないが、“黒 (hēi)”は8つの意味、“黒圧圧 (hēi yā yā)”は1つの意味があると記述されている。ここでは、『現代漢語詞典第7版』(2016)における“黒 (hēi)”と“黒圧圧 (hēi yā yā)”の意味の分類と記述について、ある特定の専門家や仲間内だけで通じる言葉や専門用語は除いている。その他の意味は同類のものをまとめ、異類のものを抽出する。抽出した意味に基づき、『CCL』で検索された“黒黒 (hēi hēi)”の意味を付け加えると、次のようにまとめられる。

(17) <同類のもの>

- a. 黒色。木炭や墨などの色。【黒・黒黒・黒圧圧】

(18) <異類のもの>

- a. 暗さ。夜、夜中。【黒・黒黒】  
 b. 陥れる、だまし取る、暗がりて攻撃する。【黒】  
 c. 秘密、不法である。【黒】  
 d. 悪心があつて公明でない。悪い。腹黒い。【黒】  
 e. 大勢の人、密集状態である。【黒圧圧】

(17)は“黒 (hēi)”と“黒黒 (hēi hēi)”と“黒圧圧 (hēi yā yā)”が類似している意味であり、(18)は“黒 (hēi)”と“黒黒 (hēi hēi)”と“黒圧圧 (hēi yā yā)”が類似していない意味である。よって、“黒 (hēi)”と“黒黒 (hēi hēi)”と“黒圧圧 (hēi yā yā)”の用法には異同があることが分かった。

さらに、(17) と (18) の意味用法には、大きく色を描写するものと、色を描写しないものに分けられる。まず、具体物の色を描写する (17a) は<黒色>という意味にまとめられる。そして、具体物・抽象物の色を描写する (18a) は<目に暗さを感じさせるものである>が挙げられる。また、具体物・抽象物の色を描写しない (18b)、(18c)、(18d) は<何かある>という抽象的な意味にまとめられる。さらに、具体物・抽象物の色を描写しない (18e) は<程度のはなはだしいさま>が挙げられる。その中で、<黒色>という意味が基本色彩語“黒 (hēi)”には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプの意味 (基本義) だと考えられる。基本義<黒色>から転義<目に暗さを感じさせるものである>へ意味拡張において“黒 (hēi)”は「色相」だけではなく、「夜という時間」を描写している。基本義<黒色>から転義<程度のはなはだしいさま>へ意味拡張において“黒圧圧 (hēiyāyā)”も「色相」だけではなく、「密集という空間」を描写している。基本義<黒色>から転義<何かある>へ拡張で“黒 (hēi)”と“黒黒 (hēihēi)”は「色相」ではなく、「犯罪容疑」、「経験」、「動作」を描写している。以上、述べてきたように同じ“黒 (hēi)”語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図 10 のように整理する。

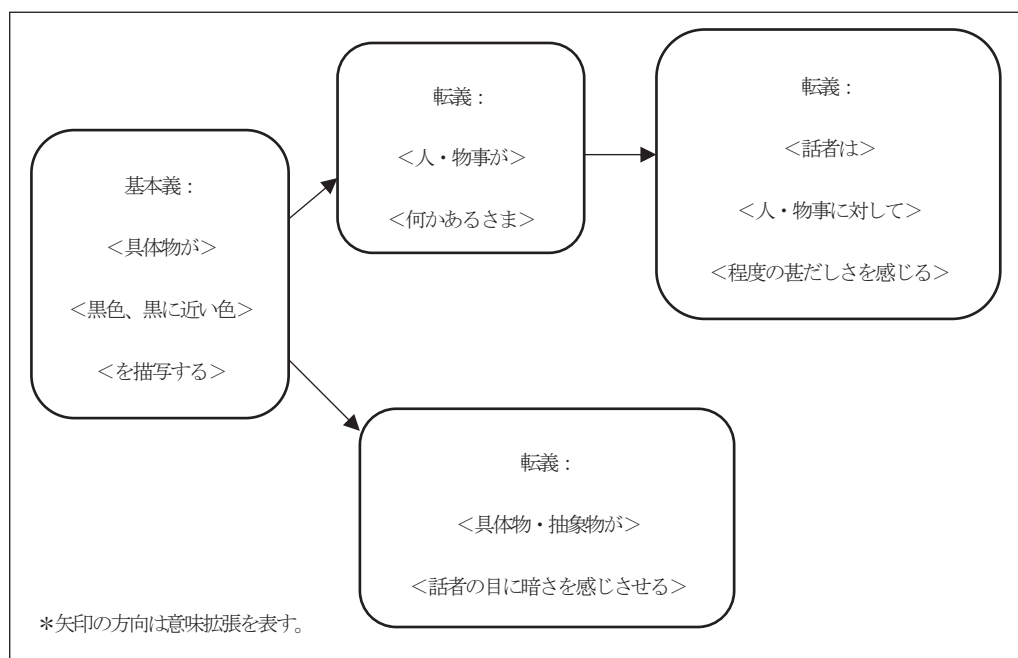


図 10 “黒・黒黒・黒圧圧”の意味拡張

以上、語基“黒 (hēi)”を含む基本色彩語とその豊語を表す意味関係を考察し“黒 (hēi)”と“黒黒 (hēihēi)”と“黒圧圧 (hēiyāyā)”における意味的拡張が確認できた。以下では、認知

意味論のイメージ・スキーマを用い、中国語母語話者が持つ視覚による表現がどのような意味変化を遂げ、どのようなイメージを作り上げていくかを考察する。

前述したように、“黒 (hēi)”と“黒黒 (hēi hēi)”と“黒圧圧 (hēi yā yā)”に見られた体系的な意味拡張は同一語基の類似関係によって動機付けられている。具体的にみると、“黒皮膚<sup>309</sup> (hēi pí fū)”、“黒眼睛<sup>310</sup> (hēi yǎn jīng)”、“黒黒的头发<sup>311</sup> (hēi hēi de tóu fā)”などは視覚による具体物の<黒色>を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。この表現を「静的描写」と名付けることができる。そして、“黒 (hēi)”と“黒黒 (hēi hēi)”と“黒圧圧 (hēi yā yā)”の一般的な用法として考えられる。話者が「静的描写」に視点を置くととき、基本色彩語の基本形式とその疊語を使用する。また、“黒夜<sup>312</sup> (hēi yè)”といった視覚による時間軸への認識が付け加えられた例である。これらは視覚を通じ、特定の時間帯に対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「動的描写」と名付けることができ、“黒 (hēi)”の一般的な用法として考えられる。話者が「動的描写」に視点を置くととき、基本色彩語の基本形式を使用する。意味の背景にある視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから時間感覚へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。さらに、“黒圧圧一片<sup>313</sup> (hēi yā yā yī piàn)”といった視覚による空間への認識が付け加えられた例である。視覚に基づき、特定の時間帯及び空間に対象の特徴を直接把握できる表現である。この表現も「動的描写」と言うことができ、“黒圧圧 (hēi yā yā)”の一般的な用法として考えられる。話者が「動的描写」に視点を置くととき、基本色彩語の疊語“黒圧圧 (hēi yā yā)”を使用する。

以上の考察により、“黒 (hēi)・黒黒 (hēi hēi)・黒圧圧 (hēi yā yā)”の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、疊語化することによって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。考察した結果、視覚のメタファー的転義の結果は図 11 にまとめられる。

<sup>309</sup> 「黒い肌である。」(筆者訳)

<sup>310</sup> 「黒瞳である。」(筆者訳)

<sup>311</sup> 「黒髪である。」(筆者訳)

<sup>312</sup> 「夜、夜中である。」(筆者訳)

<sup>313</sup> 「一面真っ黒である。」(筆者訳)

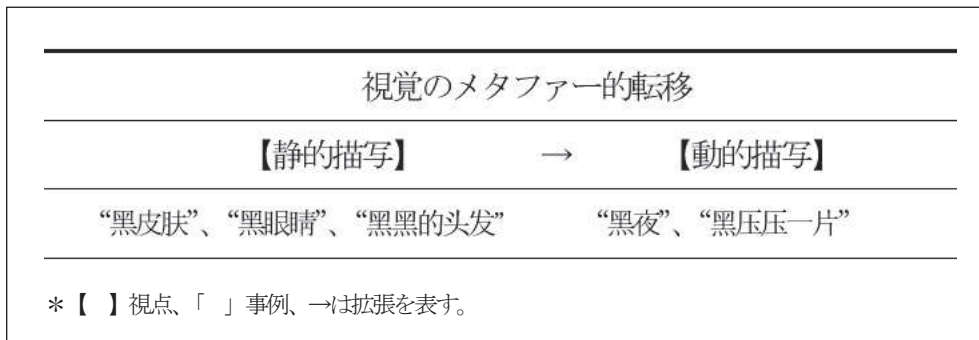


図11 視覚による“黒・黒黒・黒压压”の認知プロセス

## 6.4 語基「赤」を含む日中両言語における基本色彩語とその豊語

『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)では、「赤」は20の意味、「赤い」は4つの意味があると記述されている。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)における「赤」と「赤い」の意味の分類と記述について、ある特定の専門家や仲間内だけで通じる言葉や専門用語は除いている。その他の意味は同類のものをまとめ、異類のものを抽出し、次のように整理した。

(19) <同類のもの>

- a. 赤い色である。朱、橙、桃色、茶色などを含めてもいう。【赤・赤い】
- b. 共産主義、共産主義者である。急進的な思想である。【赤・赤い】

(20) <異類のもの>

- a. 赤子。赤ん坊。子供。【赤】
- b. 美しい。綺麗である。【赤い】

(19) <同類のもの>の場合は「赤」と「赤い」の意味が類似しているものであり、(20) <異類のもの>の場合は「赤」と「赤い」の意味が類似していないものである。よって、「赤」と「赤い」には使い分けがあることが分かる。

さらに、(19)と(20)の意味用法には、色を描写するものと、色を描写しないものに大きく分けられる。まず、具体物の色を描写する(19a)、(20a)は<赤色>という意味にまとめられる。そして、具体物・抽象物の色を描写しない(19b)は<程度のはなはだしいさま>という抽象的な意味にまとめられる。また、具体物・抽象物の色を描写しない(20b)は<好ましい>が

挙げられる。その中で、＜赤色＞という意味が基本色彩語「赤」、「赤い」には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプ的意味（基本義）だと考えられる。基本義＜赤色＞から転義＜程度のはなはだしいさま＞へ拡張で、「赤い」は「色相」ではなく、「思想」、「行動」を描写している。さらに、目の前にある好ましい状況への描写をすることになる。以上、述べてきたように同じ「赤」語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図12のように整理できる。

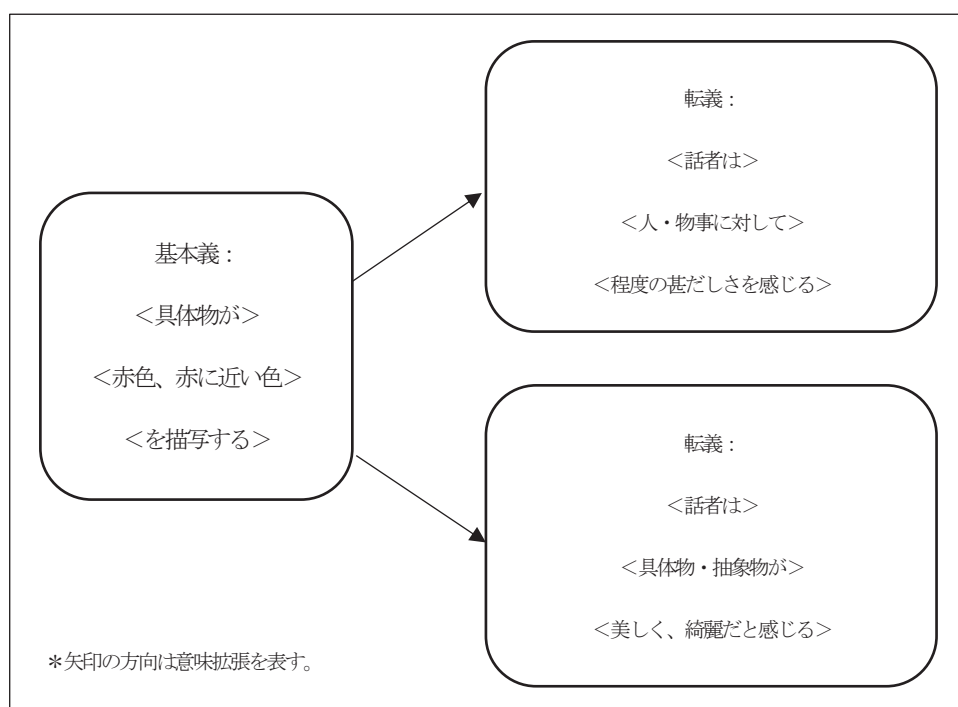


図12 「赤・赤い」の意味拡張

次に、「赤々」の用法と意味解釈を考察し、基本的な意味用法がどのように引き継がれるかを論じる。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）における「赤々」の意味を取り上げる。

赤々：物が真っ赤に見えるさま。非常に赤いさま。

（『小学館日本国語大辞典第2版』2001:115）

『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）では、「赤々」は「赤」または「赤い」と異なり、視覚による具体的な物の色を表す意味が掲載されていない。色はどのようにはなはだしいのか、

詳細な内容があまり記述されていない。すなわち、「赤々」の意味がどのように変わってきたのかは単なる辞書の意味からでは分からない。以下では、『BCCWJ』から収集した「赤々」の用例を用い、意味用法を考察する。

(21)a. 窓の外には、赤々とした炎になった夕暮れが、どこまでも燃え広がっていた。(BCCWJ LBj9\_00009:水上洋子『月がくれた愛人』1995)

b. 青空に太陽が赤々と輝いている。(BCCWJ LBm1\_00030:末木文美士『「碧巖録」を読む』1998)

(21)は視覚を通じる描写表現であり、あるひと続きの状態である「炎」、「太陽」を描写するが、「赤色」を表しつつ、<程度のはなはだしいさま>という抽象的な意味も含まれる。

また、「赤々」は話者が特定の状況、出来事に対するイメージをより強くするため、目の前の状況・場面がどの段階にあるかという「動的描写」を修飾することが可能である。『BCCWJ』では、(22)の例が挙げられる。

(22)a. 夜は暗闇、夜明けになると空が青く色づき始め、正午に向かって太陽が赤々と照って  
いきます。(NLT:七星陣 風水マルチパワー パワーストーンの専門サイト 開運なび)

b. 今年は夏の猛暑と、その名残からか冬でもまだまだ暖かい日が続いているお陰で、12月も中旬になると言うのに紅葉が赤々と燃え盛っています。(NLT:コリアタウンから副都心へ)

(22)は目の前にある具体的なものの色を描写する表現である。「赤々」は視覚による修飾対象の色を描写する基本的な意味で用いられている。(22a)は視覚を通じ、正午に向かって太陽が<程度のはなはだしいさま>を表す。(22b)は視覚を通じ、12月も中旬になると、紅葉が<程度のはなはだしいさま>という意味を表す。基本義<赤色>から転義<程度のはなはだしいさま>へ意味拡張において「赤々」は「色相」だけではなく、目の前にある指示対象の状態を描写することになる。以上、述べてきたように同じ「赤」語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図13のように整理する。



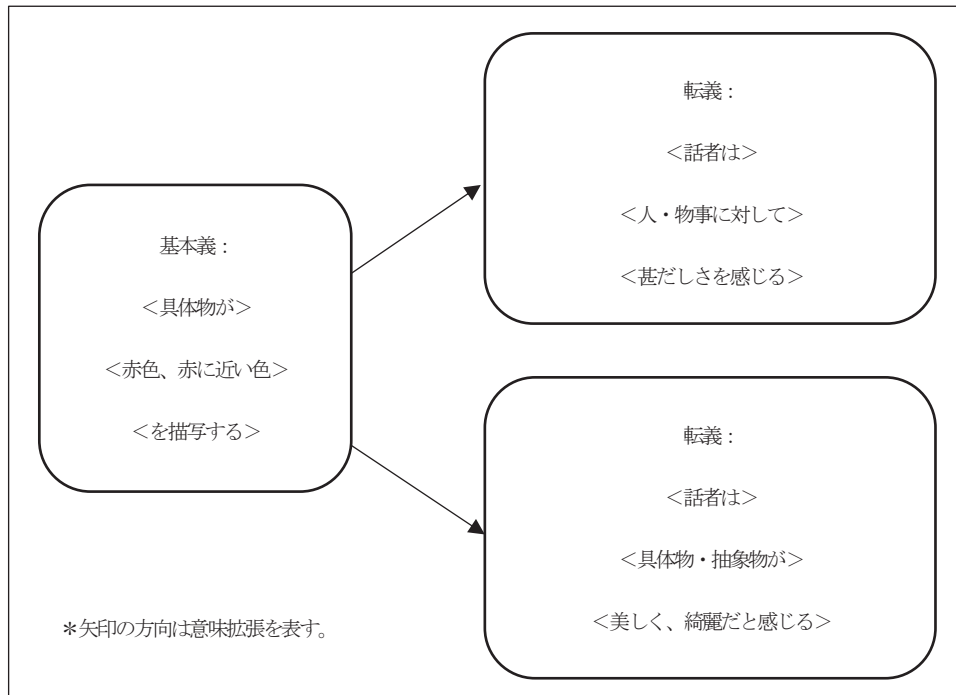


図13 「赤・赤い・赤々」の意味拡張

次に、「赤々しい」の用法と意味解釈を考察し、基本的な意味用法がどのように引き継がれるかを論じる。『小学館日本国語大辞典第2版』（2001）では、「赤々しい」の意味が記述されていないため、以下では、コーパスから収集した「赤々しい」の用例を用い、意味用法を考察する。

『NLT』と『BCCWJ』を調べたところ、「赤々しい」の用例は2つしかなかった。2つの用例を見て、「赤々しい」はどのように使われているかを考察する。

(23)かれらもまた、大火をまえに双肌ぬぎ、赤あかしく潮焼けしていたにちがいない。(BCCWJ LBF7\_00035:倉本四郎『鬼の宇宙誌』1991)

(24)初代『夕暮れ時の赤レンガ倉庫・・・』葉留佳『赤々しいとはまさにこのことですネっ』初代『ここにキングゲスラが現れたのかー』(BCCWJ 0Y14\_52192:「Yahoo!ブログ」2008)

(23)と(24)はもとに視覚を通して色(赤色)を描写する表現である。さらに、「Yahoo!JAPAN」から実際の用例を収集したところ、(23)と(24)と同様な用法が見られた<sup>314</sup>。例えば「苺、肉、

<sup>314</sup> 検索日は2021.10.25である。用例は約118件である。

建物、彩り、鳥居、紅葉……」など様々な名詞が挙げられる。いずれも視覚による物の様子や外見を描写する用法であることが明らかになった。

「赤々しい」はどのような意味を表しているか、また「赤々」の意味と関わっているかはまだに解明されていない。それらを解明するために、日本人母語話者母語話者を対象として「赤々しい」に関する意味や使用などを調査する必要がある。(25)と(26)における「赤々しい」は「赤々」に置き換えられるかどうか、置き換えると意味が変わるかどうか、そして、実際に「赤々しい」を使うことがあるかどうかなどについて5人の日本人母語話者に確認した。

(25)かれらもまた、大火をまえに双肌ぬぎ、赤あかしく潮焼けしていたにちがいない。

- a. 意味が同じであるから「赤あかしく」は「赤々と」に置き換えられる。
- b. 意味が異なるから「赤あかしく」は「赤々と」に置き換えられない。
- c. 文中における「赤々しい」の意味が分からないから答えられない。
- d. その他：\_\_\_\_\_。

(26)初代『夕暮れ時の赤レンガ倉庫・・・』葉留佳『赤々しいとはまさにこのことですネっ』初代『ここにキングゲスラが現れたのかー』

- a. 意味が同じであるから「赤あかしく」は「赤々と」に置き換えられる。
- b. 意味が異なるから「赤あかしく」は「赤々と」に置き換えられない。
- c. 文中における「赤々しい」の意味が分からないから答えられない。
- d. その他：\_\_\_\_\_。

まず、意味の調査を見てみる。(25)に対して、5人とも(a)と回答した。全員は「赤々しい」と「赤々」の意味が同じであるため、「赤あかしく」は「赤々と」に置き換えられると回答した。(26)に対して、5人のうち2人は(a)と回答した。二人は「赤々しい」と「赤々」の意味が同じであるため、「赤あかしく」は「赤々と」に置き換えられると回答した。残りの3人は(d)と回答した。三人は文中における「赤々しい」の意味がぼやけているから答えられないと回答した。以上の回答により、(26)に比べて(25)の方は意味が分かりやすく、連想しやすいことが分かった。(25)は小説作品から引用した用例であり、(26)は「Yahoo!ブログ」から引用した用例である。(25)においては、小説作家は大火の猛烈な勢いを読者に読んでもらって共感してもらうために描写している。一方、(26)においては、「Yahoo!ブログ」の作家は独自の解釈を加えて意見や考えなどを描写している。つまり、(25)は(26)より分かりやすいのは「赤々しい」を表

す意味とは関係なく、文書の機能が異なるためである。

次に、実際に「赤々しい」を使うことがあるかどうかなどについて5人の日本語母語話者に聞いてみた。5人とも「赤々しい」を使うことはないと回答した。「赤々しい」の使用について、小説では見たことはあるが、日常生活では使った場面を見たことはないとのことだった。以上の回答により、「赤々しい」は日常生活ではあまり使われていないことが明らかになった。

「赤々しい」が一般的に使われていない理由は「赤々」と大きく関わっている。「赤々」は基本的な意味を引継ぎ、<程度のはなはだしいさま>という強調の意味を表す。「赤々」は「強調」という新たなイメージが作り上げられたが、視覚による認識の範囲がより狭くなった。認識の範囲は修飾する対象と同じ、「赤々」は他の語と共起することによって、新たな意味に拡張していくことが困難である。「赤々」は新たな意味として認識しない限り、「赤々しい」という畳語を使用する必要もないと考えられる。

以上、語基「赤」を含む基本色彩語と畳語を表す意味関係を考察し、「赤・赤い・赤々・赤々しい」における意味的拡張が確認できた。以下では、認知意味論のイメージ・スキーマを用い、日本語母語話者が持つ視覚による「赤・赤い・赤々・赤々しい」の表現がどのような意味変化を遂げ、どのようなイメージを作り上げていくかを考察する。

前述したように、「赤・赤い・赤々・赤々しい」に見られた体系的な意味拡張は同一語基の類似関係によって動機付けられている。具体的にみると、「赤鬼」、「赤肉」、「赤い花」、「赤い文字」などは視覚による具体物の<赤色>を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「静的描写」と名付けることができ、「赤・赤い」の一般的な用法として考える。話者が「静的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の基本形式「赤・赤い」を使用する。そして、「太陽が赤々と照っていく」といった視覚による時間軸への認識が付け加えられた例である。これらは視覚を通じ、特定の時間帯に対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「動的描写」と言うことができ、「赤々」の一般的な用法として考える。話者が「動的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の畳語「赤々」を使用する。意味の背景にある視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから時間感覚へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。また、「赤々しい苺」、「赤々しい肉」なども視覚による具体物の<赤色>を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。この表現を「静的描写」と名付け、「赤々しい」の一般的な用法として考えられる。「赤々しい」は視覚により、他の語と共起することによって何らかのイメージを作り上げ、新たな意味に拡張することが見られなかった。「赤々しい」は新たな

意味として認識しない限り、基本色彩語の疊語「赤々しい」を使用する必要がないと考えられる。また、辞書による「赤々しい」の記述が見つからなかった。よって、「赤々しい」は「黒々しい」と同様に、日常生活の中ではほとんど使われていないと言える。

以上の考察により、「赤・赤い・赤々・赤々しい」の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、疊語化することによって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。考察した結果、視覚のメタファー的転義の結果は図14にまとめられる。

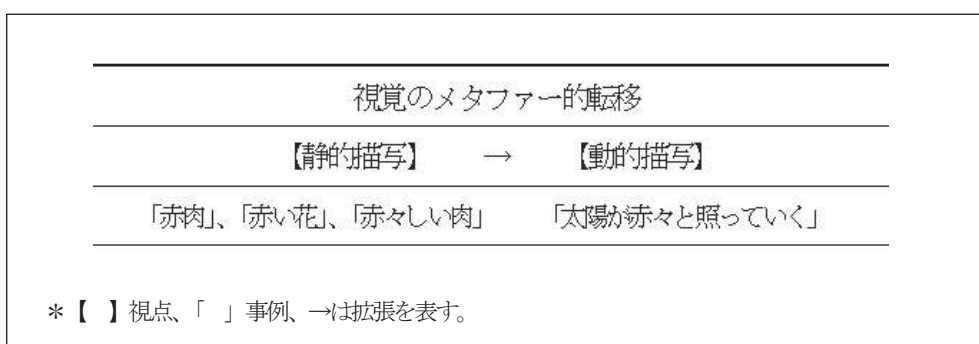


図14 視覚による「赤・赤い・赤々」の認知プロセス

一方、中国語における“红 (hóng)・红红 (hóng hóng)・红彤彤 (hóng tóng tóng)”にも図14のような視覚のメタファー的転義を介した意味関係が見られるかを考察する。

『現代汉语词典第7版』(2016)では、“红红 (hóng hóng)”の意味が記述されていないが、“红 (hóng)”は6つの意味、“红彤彤 (hóng tóng tóng)”は1つの意味があると記述されている。ここでは、『現代汉语词典第7版』(2016)における“红 (hóng)”と“红彤彤 (hóng tóng tóng)”の意味の分類と記述について、ある特定の専門家や仲間内だけで通じる言葉や専門用語は除いている。その他の意味は同類のものをまとめ、異類のものを抽出する。抽出した意味に基づき、『CCL』で検索された“红红 (hóng hóng)”の意味を付け加えると、次のようにまとめられる。

(27) <同類のもの>

a. 赤い色である。血の色。【红・红红・红彤彤】

(28) <異類のもの>

a. 順調だ、幸運だ、人気がある。【红】

b. 慶事を象徴する赤い布、赤い絹。【红】

c. 革命である。【红】

d. 真っ赤である。【红红・红彤彤】

(27) <同類のもの>の場合は“红 (hóng)”と“红红 (hóng hóng)”の意味が類似しているものであり、(28) <異類のもの>の場合は“红 (hóng)”と“红红 (hóng hóng)”の意味が類似していないものである。よって、“红 (hóng)”と“红红 (hóng hóng)”には使い分けがあることが分かる。

さらに、(27) と (28) の意味用法には、色を描写するものと、色を描写しないものに大きく分けられる。まず、具体物の色を描写する (27a)、(28b) は<赤色>という意味にまとめられる。そして、具体物・抽象物の色を描写しない (28c)、(28d) は<程度のはなはだしいさま>という抽象的な意味にまとめられる。また、具体物・抽象物の色を描写しない (28a)、(28b) は<順調で、人気がある>が挙げられる。その中で、<赤色>という意味が基本色彩語“红 (hóng)”と“红红 (hóng hóng)”と“红彤彤 (hóng tóng tóng)”には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプの意味 (基本義) だと考えられる。基本義<赤色>から転義<程度のはなはだしいさま>へ拡張で、“红 (hóng)”は「色相」ではなく、「思想」、「行動」を描写している。さらに、目の前にある好ましい状況への描写をすることになる。以上、述べてきたように同じ“红 (hóng)”語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図 15 のように整理する。

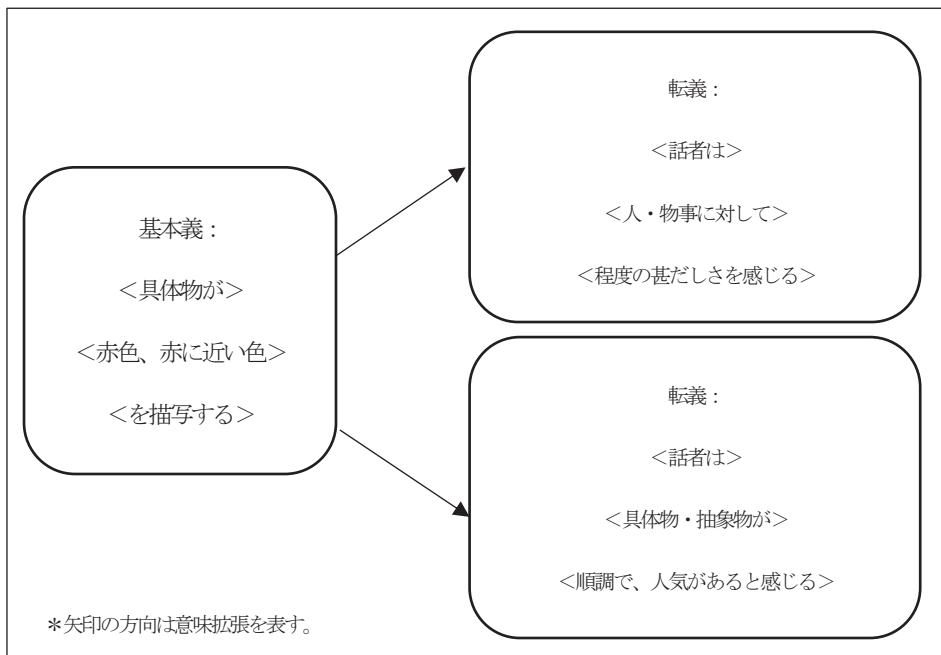


図 15 “红・红红・红彤彤”の意味拡張

以上、語基“红(hóng)”を含む基本色彩語とその疊語を表す意味関係を考察し“红(hóng)”と“红红(hónghóng)”と“红彤彤(hóngtóngtóng)”における意味的拡張が確認できた。以下では、認知意味論のイメージ・スキーマを用い、中国語母語話者が持つ視覚による表現がどのような意味変化を遂げ、どのようなイメージを作り上げていくかを考察する。

前述したように、“红(hóng)”と“红红(hónghóng)”と“红彤彤(hóngtóngtóng)”に見られた体系的な意味拡張は同一語基の類似関係によって動機付けられている。“红旗<sup>315</sup>(hóngqí)”、“红辣椒<sup>316</sup>(hónglàjiāo)”“红红的火炬<sup>317</sup>(hónghóngdehuǒjù)”などは視覚による具体物の〈赤色〉を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「静的描写」と名付け、“红(hóng)”と“红红(hónghóng)”と“红彤彤(hóngtóngtóng)”の一般的な用法として考えられる。話者が「静的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の基本形式とその疊語を使用する。そして、“当红<sup>318</sup>(dānghóng)”といった視覚による時間軸への認識が付け加えられた例である。これらは視覚を通じ、特定の時間帯に対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「動的描写」と名付け、“红(hóng)”の一般的な用法として考えられる。話者が「動的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の基本形式を使用する。意味の背景にある視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから時間感覚へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。さらに、“一片红彤彤<sup>319</sup>(yīpiànhóngtóngtóng)”といった視覚による空間への認識が付け加えられた例である。視覚に基づき、特定の時間帯及び空間に対象の特徴を直接把握できる表現である。この表現も「動的描写」と名付け、“红彤彤(hóngtóngtóng)”の一般的な用法として考える。話者が「動的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の疊語“红彤彤(hóngtóngtóng)”を使用する。

以上の考察により、“红(hóng)・红红(hónghóng)・红彤彤(hóngtóngtóng)”の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、疊語化することによって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。考察した結果、視覚のメタファー的転義の結果は図16にまとめられる。

<sup>315</sup> 「赤い旗である。」(筆者訳)

<sup>316</sup> 「赤い唐辛子である。」(筆者訳)

<sup>317</sup> 「赤いトーチである。」(筆者訳)

<sup>318</sup> 「最近の流行りである。」(筆者訳)

<sup>319</sup> 「一面真っ赤である。」(筆者訳)



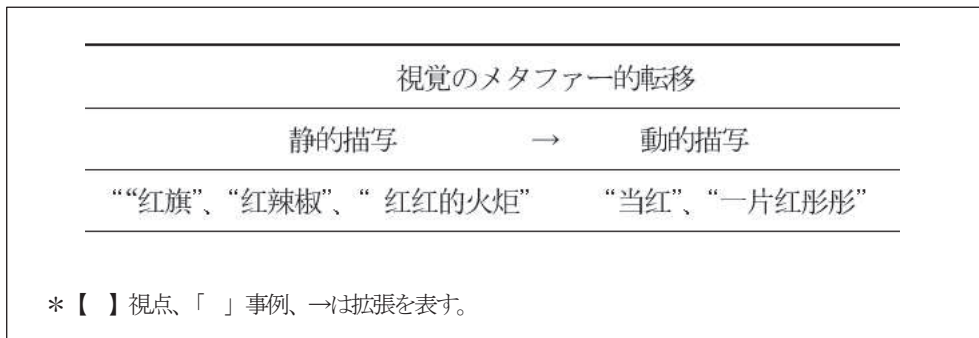


図16 視覚による“红・红红・红彤彤”の認知プロセス

## 6.5 語基「青」を含む日中両言語における基本色彩語とその畳語

『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)では、「青」は10の意味、「青い」は3つの意味があると記述されている。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)における「青」と「青い」の意味の分類と記述について、ある特定の専門家や仲間内だけで通じる言葉や専門用語は除いている。その他の意味は同類のものをまとめ、異類のものを抽出し、次のように整理した。

(29) <同類のもの>

a. 青の色である。緑色などを含めてもいう。【青・青い】

(30) <異類のもの>

a. 青毛。青毛の馬。【青】

b. 植物の葉の青々とした様子。【青】

c. 顔色が青ざめている。血の気がない。【青い】

d. 人格、技能、学問などが未熟である。また、遊芸の道でやぼである。【青い】

(29) <同類のもの>の場合は「青」と「青い」の意味が類似しているものであり、(30) <異類のもの>の場合は「青」と「青い」の意味が類似していないものである。よって、「青」と「青い」には使い分けがあることが分かる。

さらに、(29)と(30)の意味用法には、色を描写するものと、色を描写しないものに大きく分けられる。まず、具体物の色を描写する(29a)、(30a)、(30c)は<青色>という意味にまとめられる。そして、(30b)は<程度のはなはだしいさま>という抽象的な意味にまとめられる。

さらに、抽象物の色を描写しない(30d)は<未熟である>という抽象的な意味にまとめられる。その中で、<青色>という意味が基本色彩語「青」と「青い」には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプの意味(基本義)だと考えられる。基本義<青色>から転義<程度のはなはだしいさま>へ拡張で、「青い」は「色相」ではなく、「思想」、「行動」を描写している。さらに、目の前にある成熟していないものの様子、状態を描写することになる。以上、述べてきたように同じ「青」語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図17のように整理する。

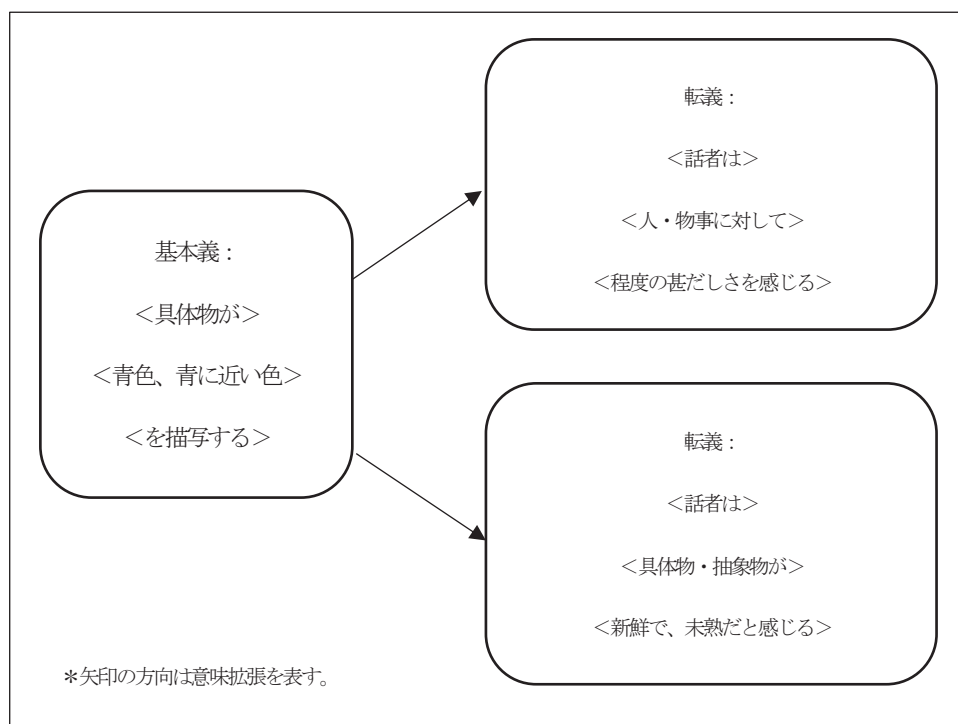


図17 「青・青い」の意味拡張

次に、「青々」の用法と意味解釈を考察し、基本的な意味用法がどのように引き継がれるかを論じる。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)における「青々」の意味を取り上げる。

青々：いかにも青いさま。また、一面に青いさま。

(『小学館日本国語大辞典第2版』2001:78)

『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)では、「青々」は「青」または「青い」と異なり、

視覚による具体的な物の色を表す意味が記述されていない。色はどのようにはなはだしいのか、詳細な内容が明記されていない。すなわち、「青々」の意味がどのように変わってきたのかは単なる辞書の意味からでは分からない。以下では、『BCCWJ』から収集した「青々」の用例を用い、意味用法を考察する。

- (31)a. 眉を落としていたが、いつ見てもその剃りあとが青々としていた。(NLT:上村松園 四条通附近)
- b. 芝生は手入れされていていつも青々としています。(NLT:お勧めします=安達郡本宮町)

(31)は視覚を通じる描写表現である。(31a)は「眉を落としていた」を伴い、剃りあとが<程度のはなはだしいさま>という意味を表す。(31b)は本来であれば、刈った芝生はそのまま枯れてしまうはずであるが、それに反して刈った芝生がいつも<程度のはなはだしいさま>という意味を表す。

また、「青々」は特定の状況、出来事について人間の感覚対象のイメージをより強くするため、目の前の状況・場面がどの段階にあるかという「動的描写」を修飾することが可能である。『BCCWJ』では、(32)の例が挙げられる。

- (32)a. 日差しは明るく、空は青々と晴れていた。(BCCWJ PB45\_00119: 岡崎祥久『すばる』2001)
- b. 岡山県東区の沼と古都にある弊社の杜仲畑では、約200本の杜仲茶の木を栽培しており、毎年7~8月頃の葉が青々としてきた頃、収穫の時期を迎えます。(NLT: AGRI ブロードカントリー株式会社—商品説明—)

(32)は目の前にある具体的なものの色を描写する表現である。「青々」は視覚による修飾対象の色を描写する基本的な意味で用いられている。(32a)は視覚を通じ、時間の経過と共に<程度のはなはだしいさま>を表す。(32b)は毎年7~8月頃、杜仲茶の葉が<程度のはなはだしいさま>という意味を表す。基本義<青色、青みを帯びた色である>から転義<程度のはなはだしいさま>へ意味拡張において「青々」は「色相」だけではなく、「指示対象の状態」を描写している。こういった「青々」は視覚を通じ、修飾する対象の特徴は「静的描写」から「動的描写」へ拡張した。基本義<青色>から転義<程度のはなはだしいさま>へ意味拡張において「青々」

は「色相」だけではなく、「指示対象の状態」を描写している。以上、述べてきたように同じ「青」語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図 18 のように整理する。

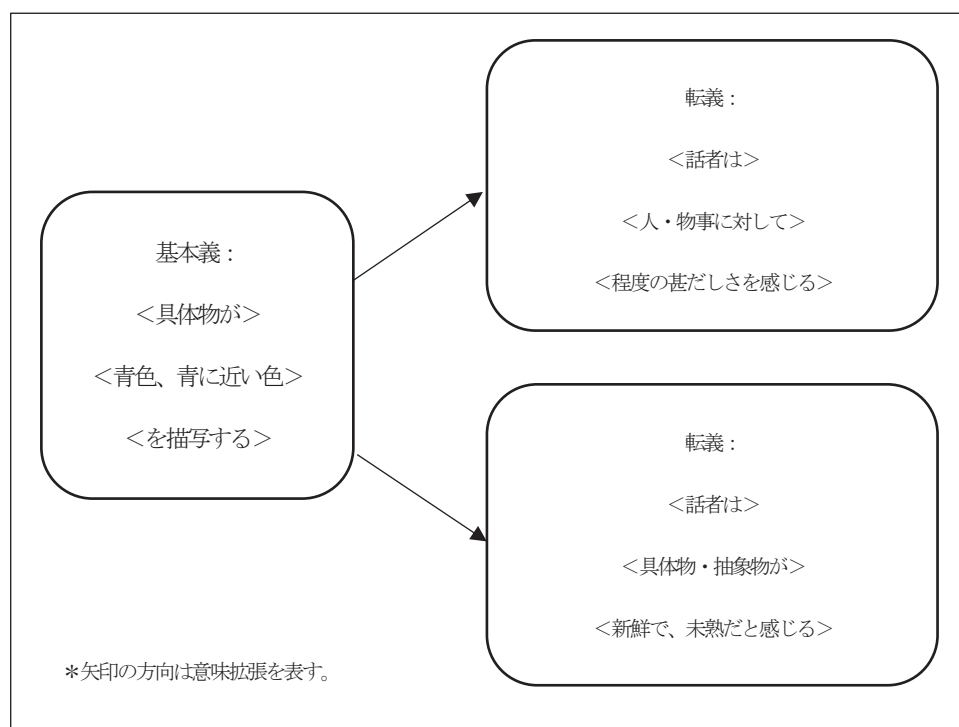


図 18 「青・青い・青々」の意味拡張

次に、「青々しい」の用法と意味解釈を考察し、基本的な意味用法がどのように引き継がれるかを論じる。ここでは、『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)における「青々しい」の意味を取り上げる。

青々しい：①いちじるしく青い。いかにも青い様子である。また、一面に青い。②(まだ熟していない果実などが青いところから)未熟である。また、新鮮である。

(『小学館日本国語大辞典第2版』2001:78)

『小学館日本国語大辞典第2版』(2001)では、「青々しい」は「青・青い・青々」と異なり、視覚による具体的な物の色を表す意味が記述されていない。色はどのようにはなはだしいのか、詳細な内容が掲載されていない。すなわち、「青々しい」の意味がどのように変わってきたのかは単なる辞書の意味からでは分からない。以下では、『BCCWJ』から収集した「青々しい」の

用例を用い、意味用法を考察する。『NLT』と『BCCWJ』コーパスを調べたところ、「青々しい」の用例は2つしかなかった。2つの用例を見て、「青々しい」はどのように使われているかを考察する。

(33)たべられる草買物袋に半分ほどあおあおしいよめなが入っている。(BCCWJ 0V2X\_00071:広部英一『広部英一詩集』2000)

(34)今夜は月明りで庭の葉のついた桜樹が青々しい。(BCCWJ PB49\_00271:早坂倫太郎『毒牙狩り』2004)

(33)と(34)は視覚を通じ、<青色>を表す用法である。コーパスでは、「未熟である。また、新鮮である」として「青々しい」の用例が見つからなかった。ここからは、「青々しい」はどのような意味を表しているか、また「青々」の意味とどのように関わっているかまだ解明されていない。そのため、(33)と(34)における「青々しい」が「青々」に置き換えられるかどうかを見てみる。

(35)たべられる草買物袋に半分ほど青々としたよめなが入っている。

(36)今夜は月明りで庭の葉のついた桜樹が青々としている。

5人の日本人母語話者母語話者に確認したところ、全員は(33)と(34)は(35)と(36)と同じ意味を表すと回答した。「青々しい」は「青々」と同様に、<いかにも青くて、際立っている>意味を表す。「Yahoo!JAPAN」から収集した用例を見てみよう。「青々しい」と共起する名詞は様々であり、例えば「苔、緑、景色、木々、海、湖、植物、空……」などが挙げられる。いずれも視覚を通して、物の様子や外見を描写する用法であることが分かった。「青々しい」が一般的に使われていない理由は「青々」と大きく関わっている。「青々」は基本的な意味を引継ぎ<程度のはなはだしいさま>意味を表す。「青々」は「強調」という新たなイメージが作り上げられたが、視覚による認識の範囲がより狭くなった。認識の範囲は修飾する対象と同じ、「青々しい」は他の語と共起することによって、新たな意味に拡張していくことが困難である。

以上、語基「青」を含む基本色彩語と疊語を表す意味関係を考察し、「青・青い・青々・青々しい」における意味的拡張が確認できた。以下では、認知意味論のイメージ・スキーマを用い、日本語母語話者が持つ視覚による「青・青い・青々・青々しい」の表現がどのような意味変化

を遂げ、どのようなイメージを作り上げていくかを考察する。

前述したように、「青・青い・青々・青々しい」に見られた体系的な意味拡張は同一語基の類似関係によって動機付けられている。具体的にみると、「青鬼」、「青野菜」、「青い森」、「青い地球」などは視覚による具体物の〈青色〉を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「静的描写」と名付け、「青・青い」の一般的な用法として考える。話者が「静的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の基本形式「青・青い」を使用する。「草が青々と茂っている」といった視覚による時間軸への認識が付け加えられた例である。これらは視覚を通じ、特定の時間帯に対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「動的描写」と名付け、「青々」の一般的な用法として考える。話者が「動的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の畳語「青々」を使用する。意味の背景にある視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから時間感覚へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。「青々しい苔」、「青々しい景色」なども視覚による具体物の〈青色〉を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「静的描写」と名付け、「青々しい」の一般的な用法として考える。

「青々しい」は視覚により、他の語と共起することによって何らかのイメージを作り上げ、新たな意味に拡張することが見られなかった。「青々しい」は新たな意味として認識しない限り、基本色彩語の畳語「青々しい」を使用する必要がないと考えられる。また辞書による「青々しい」の記述が見つからなかった。よって、「青々しい」は「黒々しい」、「赤々しい」と同様に、日常生活の中ではほとんど使われていないと言える。

以上の考察により、「青・青い・青々・青々しい」の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、畳語化することによって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。考察した結果、視覚のメタファー的転義の結果は図19にまとめられる。

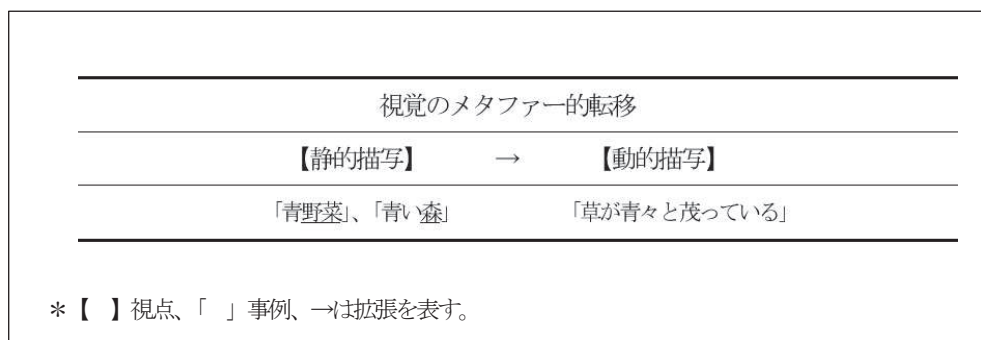


図19 視覚による「青・青い・青々・青々しい」の認知プロセス



一方、中国語における“绿 (lǜ)・绿绿 (lǜ lǜ)・绿油油 (lǜ yóu yóu)”にも図 19 のような視覚のメタファー的転義を介した意味関係が見られるかを考察する。

『現代漢語詞典第 7 版』(2016) では、“绿绿 (lǜ lǜ)” の意味が記述されていないが、“绿 (lǜ)” は 1 つの意味、“绿油油 (lǜ yóu yóu)” は 1 つの意味があると記述されている。ここでは、『現代漢語詞典第 7 版』(2016) における“绿 (lǜ)” と“绿油油 (lǜ yóu yóu)” の意味の分類と記述について、同類と異類のものを次のように整理した。その他の意味は同類のものをまとめ、異類のものを抽出する。抽出した意味に基づき、『CCL』で検索された“绿绿 (lǜ lǜ)” の意味を付け加えると、次のようにまとめられる。

(37) <同類のもの>

a. 植物の葉の青々とした色である。青、黄色からなる色。【绿】

(38) <異類のもの>

a. 青くてつやつやしたさま。【绿油油】

さらに、(37) <同類のもの> の場合は“绿 (lǜ)” と“绿油油 (lǜ yóu yóu)” の意味が類似しているものであり、(38) <異類のもの> の場合は“绿 (lǜ)” と“绿油油 (lǜ yóu yóu)” の意味が類似していないものである。よって、“绿 (lǜ)” と“绿油油 (lǜ yóu yóu)” には使い分けがあることが分かる。

(37) と (38) の意味用法には、色を描写するものと、色を描写しないものに大きく分けられる。まず、具体物の色を描写する (37a) は<青色>という意味にまとめられる。そして、具体物・抽象物の色を描写する (38a) は<いかにも青くて、際立っている>という抽象的意味にまとめられる。その中で、<青色>という意味が基本色彩語“绿 (lǜ)” には文脈なしで最も想起されやすいため、プロトタイプの意味(基本義)だと考えられる。基本義<青色>から転義<いかにも青くて、際立っている>とへ意味拡張において“绿 (lǜ)” と“绿绿 (lǜ lǜ)” と“绿油油 (lǜ yóu yóu)” は「色相」だけではなく、「成熟していないものの様子、状態」を描写している。以上、述べてきたように同じ“绿 (lǜ)” 語基を含む基本色彩語の意味の間には関連性があることが確認できた。図 20 のように整理する。

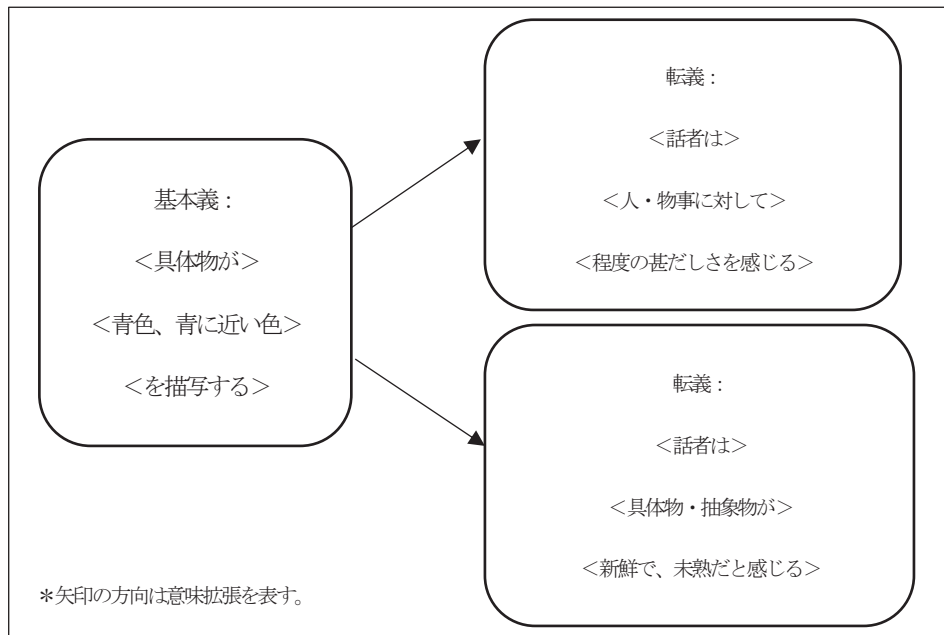


図 20 “绿 (lǜ)・绿绿 (lǜ lǜ)・绿油油 (lǜ yóu yóu)” の意味拡張

以上、語基“绿 (lǜ)”を含む基本色彩語とその疊語を表す意味関係を考察し“绿 (lǜ)”と“绿绿 (lǜ lǜ)”と“绿油油 (lǜ yóu yóu)”における意味的拡張が確認できた。以下では、認知意味論のイメージ・スキーマを用い、中国語母語話者が持つ視覚による“绿 (lǜ)”と“绿绿 (lǜ lǜ)”と“绿油油 (lǜ yóu yóu)”の表現がどのような意味変化を遂げ、どのようなイメージを作り上げていくかを考察する。

前述したように、“绿 (lǜ)”と“绿绿 (lǜ lǜ)”と“绿油油 (lǜ yóu yóu)”に見られた体系的な意味拡張は同一語基の類似関係によって動機付けられている。“绿葱<sup>320</sup> (lǜ cōng)”、“绿地<sup>321</sup> (lǜ dì)”、“绿绿的麦苗<sup>322</sup> (lǜ lǜ de mài miáo)”などは視覚による具体物の<緑色>を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「静的描写」と名付け、“绿 (lǜ)”と“绿绿 (lǜ lǜ)”と“绿油油 (lǜ yóu yóu)”の一般的な用法として考える。話者が「静的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の基本形式とその疊語を使用する。そして、“常绿植物<sup>323</sup> (cháng lǜ zhí wù)”、“绿化<sup>324</sup> (lǜ huà)”といった視覚による時間・空間軸への認識が付け加えられた例である。これらは視覚を通じ、特定の時間・空間に対象の特徴

<sup>320</sup> 「青ねぎである。」(筆者訳)

<sup>321</sup> 「芝生である。」(筆者訳)

<sup>322</sup> 「青々としたムギの苗である。」(筆者訳)

<sup>323</sup> 「常緑植物である。」(筆者訳)

<sup>324</sup> 「緑化である。」(筆者訳)

を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「動的描写」と名付け、“绿 (lǜ)” の一般的な用法として考える。話者が「動的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の基本形式を使用する。意味の背景にある視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから時間感覚へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。また、“绿油油一片<sup>325</sup> (lǜ yóu yóu yī piàn)” といった視覚による空間への認識が付け加えられた例である。視覚に基づき、特定の時間帯及び空間に対象の特徴を直接把握できる表現である。この表現も「動的描写」と名付け、“绿油油 (lǜ yóu yóu)” の一般的な用法として考える。話者が「動的描写」に視点を置くとき、基本色彩語の疊語“绿油油 (lǜ yóu yóu)” を使用する。

以上の考察により、“绿 (lǜ)・绿绿 (lǜ lǜ)・绿油油 (lǜ yóu yóu)” の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、疊語化することによって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。考察した結果、視覚のメタファー的転義の結果は図 21 にまとめられる。

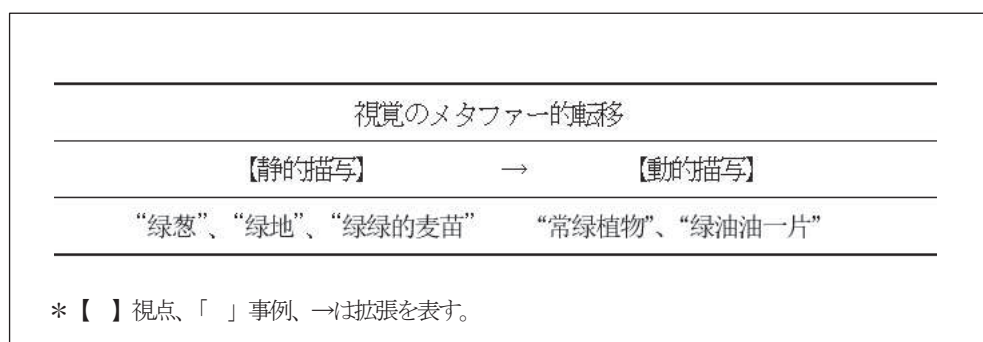


図 21 視覚による“绿・绿绿・绿油油”の認知プロセス

## 6.6 まとめ

本章は事物の様子や在り方を描写する表現の中で基本色彩語とその疊語の意味拡張とその背景にある視覚のメタファー的転義に焦点を絞り、考察を行った。考察した結果は下記のようにまとめられる。

まず、同じ語基を持つ基本色彩語とその疊語の間には意味拡張が確認できた。基本色彩語は色相というプロトタイプの意味（基本義）を表し、指示対象の状態を表す「静的描写」として

<sup>325</sup> 「一面真っ青である。」(筆者訳)

使わせている。プロトタイプ的意味（基本義）である色彩以外の意味領域で用いられる際に、メタファーによって意味が動機づけられていると推察できた。

さらに、日中両言語では、基本色彩語とその疊語の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、疊語化することによって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。以上の考察から、同一語基を持つ基本色彩語とその疊語が意味の拡張と結びついていることから、この場合も、言語形式と意味内容との間の類似関係が認められると考えられる。

上記のように、類似性という観点から取り上げた同一語基を持つ基本色彩語とその疊語の意味拡張を体系的に分析した。これらの意味は視覚のメタファーによる動機づけられるため、話者が視覚による同一語基を持つ基本色彩語の類似性をどのように捉えるかを下記のように記述する。考察した視覚のメタファー的転義の結果は大きく4段階の認知プロセスと2段階の認知プロセスといった2つのパターンに分類できる（図22）。

パターン1の4段階の認知プロセスに属するのは日本語の「白、白い、白々、白々しい」と中国語の“白 (bái)・白白 (bái bái)・白茫茫 (bái máng máng)”である。パターン2の2段階の認知プロセスに属するのは日本語の「黒、黒い、黒々、黒々しい」、「赤、赤い、赤々、赤々しい」、「青、青い、青々、青々しい」と中国語の“黒 (hēi)・黒黒 (hēi hēi)・黒压压 (hēi yā yā)”、“红 (hóng)・红红 (hóng hóng)・红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿 (lǜ)・绿绿 (lǜ lǜ)・绿油油 (lǜ yóu yóu)”である。

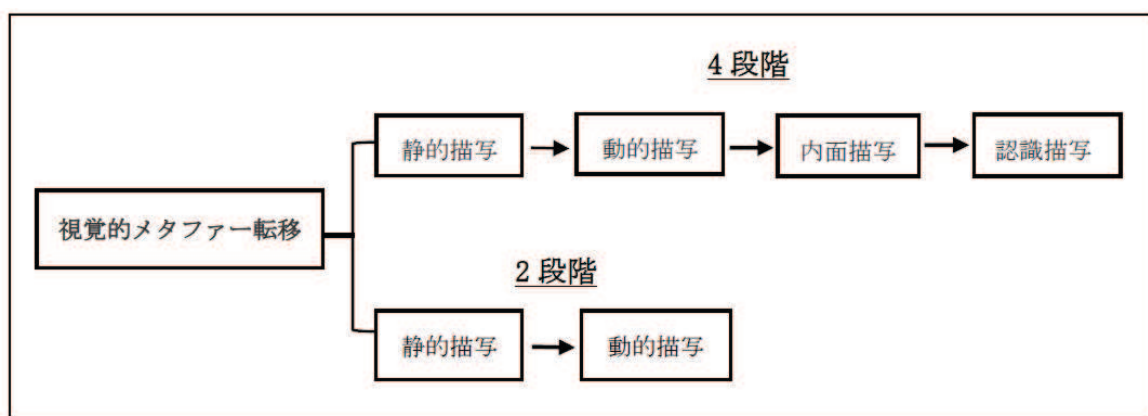


図22 基本色彩語の疊語の視覚的メタファー的転移

すなわち、日中両言語における基本色彩語の中では、「白」を語基とする基本色彩語は他の色彩語より拡張しており、視覚のメタファー的転義が「静的描写」、「動的描写」、「内面描写」、「認

識描写」といった4段階の認知プロセスに分けられる。一方、日本語の「黒、赤、青」を語基とする基本色彩語は「白」を語基とする基本色彩語より拡張しておらず、視覚のメタファー的転義が「静的描写」、「動的描写」といった2段階の認知プロセスに分けられる。中国語の基本色彩語にも日本語の基本色彩語と類似している現象が確認できた。すなわち、中国語の基本色彩語の中では、“黒 (hēi)、紅 (hóng)、緑 (lǜ)”を語基とする基本色彩語はいずれも、視覚のメタファー的転義が「静的描写」、「動的描写」といった2段階の認知プロセスに分けられる。まず、パターン1の4段階の認知プロセスに属する「白、白い、白々、白々しい」を取りあげて説明する (図22)。

図22は基本色彩語とその豊語の比喩的な意味変化の方向性を示すものである。図22に示した4段階の認知プロセスを持つのは日中両言語における「白」を語基とする基本色彩語のみである。まず、話者は視覚による具体物の〈白色〉を描写する際に、基本色彩語の基本形式を使用する。この用法は視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。この表現を「静的描写」と名付ける。そして、話者は視覚を通じ、特定の時間帯に対象の特徴を描写する際に、基本色彩語の豊語を使用する。これらも視覚を通じ、対象の特徴を直接把握され、視覚による時間軸への認識が付け加えられる表現である。この表現を「動的描写」と名付ける。また、視覚をはじめ、視覚を背景化してから時間感覚へという意味拡張の方向性が明らかになった。さらに、話者は視覚に基づく〈何もない〉という具体的な描写場面を背景として、特定の状態にある人間の感覚のイメージを描写する際に、基本色彩語の豊語を使用する。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握しにくい表現である。この表現は人間の感覚のイメージを視覚化する比喩的用法を「内面描写」と名付ける。意味の背景にある視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから話者の内面描写へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。最後には、話者は視覚に基づく〈何もない〉という具体的な描写場面を背景として、社会的及び文化的観点からの動機付け〈マイナスイメージ・好ましくない認識〉を描写する際に、基本色彩語の豊語を使用する。本論文では、この表現を「認識描写」と名付ける。意味の背景にある視覚のメタファー的転義については、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから社会認識へ」という意味拡張の方向性が明らかになった。

次に、図22に示した4段階の認知プロセスを持つのは日中両言語における「黒・赤・青」を語基とする基本色彩語を述べる。まずは、視覚による具体物の〈色相〉を表す例である。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「静的描写」と名付け、基本色彩語の基本形式の一般的な用法として考える。話者は「静的描写」に焦

点を置くとき、基本色彩語の基本形式を使用する。そして、話者は視覚を通じ、特定の時間帯に対象の特徴を描写する際に、基本色彩語の疊語を使用する。これらも視覚を通じ、対象の特徴を直接把握され、視覚による時間軸への認識が付け加えられる表現である。本論文では、この表現を「動的描写」と名付ける。また、視覚をはじめ、視覚を背景化してから時空空間へという意味拡張の方向性が明らかになった。これらは視覚を通じ、対象の特徴を直接把握できる表現である。本論文では、この表現を「静的描写」と名付ける。よって、基本色彩語の疊語「黒々しい、赤々しい、青々しい」、「黒圧圧 (hēi yā yā)、紅彤彤 (hóng tóng tóng)、绿油油 (lǜ yóu yóu) ”は視覚により、他の語と共起することによって何らかのイメージを作り上げ、新たな意味に拡張することが見られなかった。よって、それらの基本色彩語の疊語は新たな意味として認識しない限り、疊語化する必要がないと考えられる。

総括的にいえば、言語形式と意味内容の間に類似関係を認めたいうえで、視覚を介した話者の認知プロセスの分析を通じて、日本語における基本色彩語とその疊語間には2種類の意味拡張が確認できたが、中国語にも類似している現象が見られる。また、日本語では、基本色彩語とその疊語には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっているが、疊語化することによって、基本義から転義へ拡張するパターンは大きく4段階の認知プロセスと2段階の認知プロセスとといった2つのパターンに分類できたが、中国語も同様である。よって、本章の考察により、同一語基を持つ基本色彩語の形式面と意味面において関係性が示されたのみならず、言語表現の背景にある視覚のメタファーによる動機づけが類像的に表されることが確認できた。



## 第7章 本論文の総括

本章においては、1.2 節で挙げた本論文の研究課題に対して、第4章から第6章で行った検証結果を概観し、その結果、それぞれの課題に対してどのようなことが解明できたか述べる。また、この研究成果をもとに、同一語基を持つ基本色彩語とその畳語の関係についてまとめ、さらに今後の課題、将来の展望について言及する。

### 7.1 本論文のまとめ

児玉 (2010) では、語義は、ある意味を軸に、それと異なっても関連した意味に拡大していく際にもとの意味が何であるのか、関連の仕方にどのような体系性があるのかが問われるとしている。そこで、本論文は日中両言語における基本色彩語とその畳語を研究対象とし、語間の意味関係を体系的に論じると同時に、同じ語基を持つ基本色彩語とその畳語が背景に存在する話者の認知プロセスとどのように関わっているのかを明らかにしようとするものである。

1.1 節では、先行研究を踏まえ、畳語の用法はまず大きく「原義を保持しているもの」と、「畳語形式で初めて意味を有するもの」にまとめられる。さらに、「畳語形式で初めて意味を有するもの」は「ものの音を描写する」と「色に関わる状態を描写する」という2つの用法に分けられる可能性を示した。秋元 (2005)、石井 (2007) では、「白々」、「黒々」などの畳語は強調の意に言及したが、コーパスにおける「白々とした秋風の道」のような用例は「非常に白い」の意味を表さないことが分かった。そのため、認知言語学のアプローチに基づき、原義を保持せず、基本色彩語の畳語形式ではじめて形成された意味や特徴について検討する必要があると思われる。

また、野呂 (2016) が述べる言語形式と意味内容の間に類似関係の観点から、基本色彩語の畳語の意味は、合成的解釈から厳密には得られないものであるが、同一語基で、かつ繰り返しの形式と無関係ではないと考えられる。このような理論的基盤を全体として、第4章から第6章まで、同一語基で、かつ繰り返しが日中両言語における基本色彩語の畳語の研究にどのように貢献しているかを考察した。

本論文で挙げた研究課題は以下の3点であった。

【研究課題1】日中両言語における基本色彩語の疊語の使用実態（構造的特徴、文法機能、使用特性）に相違点はあるのか。

【研究課題2】日中両言語において知覚者が基本色彩語の疊語をどのように概念化しているのか。

【研究課題3】日中両言語における基本色彩語とその疊語に関連性があるのか。同じ語基を持つ基本色彩語とその疊語の間には意味拡張があるのか。母語話者は視覚を介した認知プロセスにおいて、同一語基を持つ基本色彩語とその疊語の関連性をどのように反映させているのか。

以下、課題ごとにまとめていく。

第4章では、形式上の類像性の観点に基づき、基本色彩語の疊語について、構成要素との関連性や類似表現との相違点についての考察を行いながら、構成要素などから十分に予測できない使用実態を記述した。以下に実例とともに使用実態を示す。

まず、基本色彩語の疊語のうち、同一語基の繰り返すものと同一語基に後接する接辞を付け加えるものを比較した。日本語では、同一語基の繰り返すものの方が、形式的には、後接助詞である「と」を用い、副詞の機能で連用修飾の用法として出現しやすいという点で特異な特徴を持つと言える。中国語では、同一語基に後接する接辞を付け加えるものの方が、形式的には、後接助詞である「的」を用い、形容詞の機能で連体修飾、補語用法、述語用法の用法として出現しやすいという点で特異な特徴を持つと言える。以上の考察から、日中両言語における基本色彩語は同一語基の繰り返しによって形成された疊語においては、カテゴリー内の成員の異なりを喚起する表記形式の差異が見られた。すなわち、基本色彩語のカテゴリーの成員は等しくカテゴリーに所属しているわけではなく、典型と異なる各種の成員があるというカテゴリーの性質が解釈の基盤となっている。

そして、日中両言語における基本色彩語の疊語の使用特性では、書き手が読み手に向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものであるジャンルで多く使われていることが明らかになった。日中両言語における基本色彩語の疊語を用いることにより、読み手の共感を促すとともに、書き手の感情を投射することを示した。

第5章では、基本色彩語の疊語がカテゴリーの拡張と結びついていることから、知覚者と知覚対象の意味との間の相互作用から生まれる2種類の「相互作用的性質」としての関係性を明確にした。1つは対象へ何らかの相互作用を行い、その中から生じた知覚者の心身状態が対象

の性質と認識し直されている。もう1つは知覚者が対象と接する際得られる同じ身体経験の相互作用を行い、ある特定の時空間が対象の性質と認識し直されている。同一語基で、かつ繰り返しの形式上の類像性によって、そのようなカテゴリーの成員の段階性及びカテゴリー内の関連性が生じたことが見られ、言語形式と意味内容との間に類像性が認められる。

山梨 (2010) が提案した外部世界との相互作用に根ざす具体的な経験に基づいて形成されるイメージのレベルを参考にし、日中両言語における基本色彩語の豊語の特徴は外部世界との相互作用を介して形成される知覚的な経験のイメージの変容過程がより詳細に説明する可能性を示した (図1)。

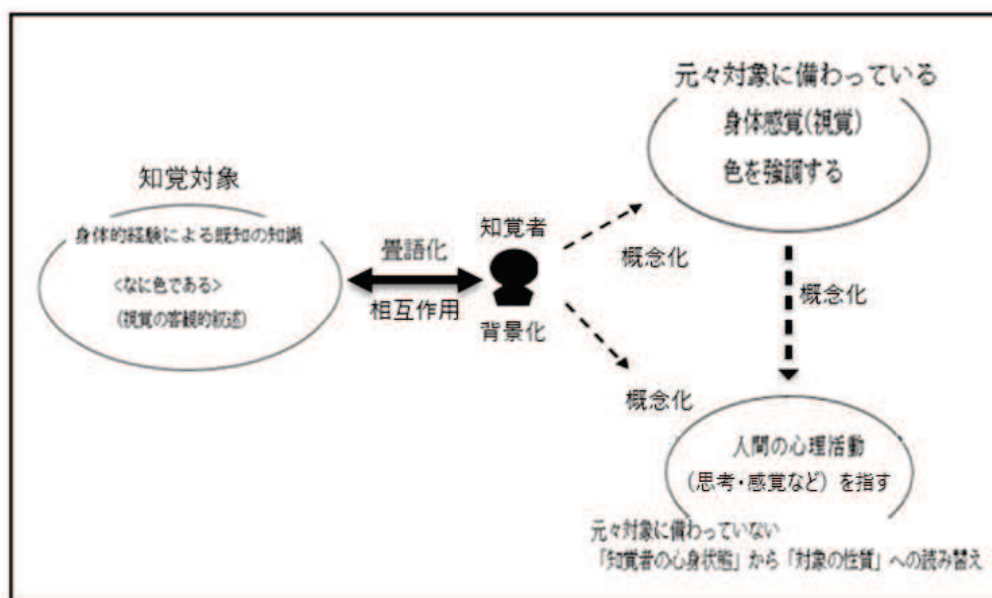


図1 相互作用による日中両言語における基本色彩語の豊語の特徴<sup>326</sup>

この2種類の「相互作用的性質」は、いずれもカテゴリーの周辺例を焦点化する働きをするものであり、カテゴリーの成員に典型的なもの（視覚による客観的な叙述）から周辺のなもの（視覚による主観的な叙述）まで段階性があることが示唆された。すなわち、基本色彩語の豊語化には段階性のあることが明らかとなった。

第6章では、基本色彩語の豊語について、構成要素である基本形式との意味拡張についての考察を行いながら、母語話者が視覚による同一語基を持つ基本色彩語の関係性をどのように反映し、視覚を介した認知プロセスを下記のように記述した。

<sup>326</sup> 5.6節の図1を再掲する。

まず、日中両言語における基本色彩語は色相というプロトタイプの意味（基本義）を表し、指示対象の状態を表す「静的描写」として使用される。プロトタイプの意味（基本義）である色彩以外の意味領域で用いられる際には、メタファーによって意味が動機づけられていると推察できた。そして、日中両言語では、基本色彩語とその豊語の表現には、プロトタイプの意味（基本義）が関わっているが、豊語化によって、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。以上の考察から、同一語基を持つ基本色彩語とその豊語が意味の拡張と結びついていることから、この場合も、言語形式と意味内容との間の類似関係が認められると考えられる。

同一語基を持つ基本色彩語とその豊語の意味拡張を体系的に分析し、これらの意味は視覚のメタファーによる動機づけられるため、話者が視覚による同一語基を持つ基本色彩語の関係性をどのように捉えるかを下記のように記述する。

まず、視覚のメタファー的転義は大きく4段階の認知プロセスと2段階の認知プロセスといった2つのパターンに分類できた(図2)。パターン1の4段階の認知プロセスに属するのは日本語の「白、白い、白々、白々しい」と中国語の“白 (bái)・白白 (bái bái)・白茫茫 (bái máng máng)”である。また、パターン2の2段階の認知プロセスに属するのは日本語の「黒、黒い、黒々、黒々しい」、「赤、赤い、赤々、赤々しい」、「青、青い、青々、青々しい」と中国語の“黒 (hēi)・黒黒 (hēi hēi)・黒压压 (hēi yā yā)”、“红 (hóng)・红红 (hóng hóng)・红彤彤 (hóng tóng tóng)”、“绿 (lǜ)・绿绿 (lǜ lǜ)・绿油油 (lǜ yóu yóu)”である。

パターン1は、日中両言語における基本色彩語の中では、「白」を語基とする基本色彩語は他の基本色彩語より拡張しており、視覚のメタファー的転義が「静的描写」、「動的描写」、「内面描写」、「認識描写」といった4段階の認知プロセスに分けられる。それは早瀬 (2008) が指摘している話者による相互作用の成立の流れと一致している。早瀬 (2008) では、まず、対象へ何らかの相互作用を行い、それを話者が知覚・認識することを前提とする。次に、話者が対象物を知覚・認識したうえで、その経験を対象の性質として読み替えていることが窺える。基本色彩語の豊語「白々しい」、「白茫茫 (bái máng máng)”は視覚により、他の語と共起することによって何らかのイメージを作り上げ、新たな意味に拡張することが見られた。よって、「白」を語基とする基本色彩語の豊語の視覚のメタファー的転義として使用されるため、豊語化する必要があることが示唆された。

パターン2は、日本語の「黒、赤、青」を語基とする基本色彩語は「白」を語基とする基本色彩語より拡張しておらず、視覚のメタファー的転義として「静的描写」、「動的描写」といっ

た2段階の認知プロセスにととまっている。中国語の“黒 (hēi)、紅 (hóng)、緑 (lǜ)”を語基とする基本色彩語も日本語の基本色彩語も同様に、視覚のメタファー的転義が「静的描写」、  
「動的描写」といった2段階の認知プロセスに分けられる。基本色彩語の疊語「黒々しい、赤々しい、青々しい」、「黒圧圧 (hēi yā yā)、紅彤彤 (hóng tóng tóng)、绿油油 (lǜ yóu yóu)”は視覚により、他の語と共起することによって何らかのイメージを作り上げ、新たな意味に拡張が見られなかった。これらの基本色彩語の疊語は新たな意味として認識されない限り、さらなる疊語化の必要性はないことが示唆された。

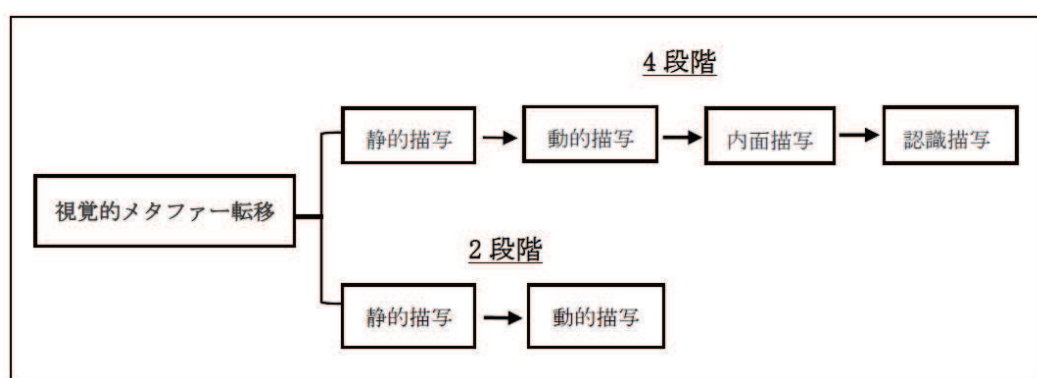


図2 基本色彩語の疊語の視覚的メタファー的転移<sup>327</sup>

以上、第4章から第6章までの考察結果から、日中両言語で見られる同一語基で、かつ繰り返しの形式と意味内容との間に関係性が認められた。また、個別の基本色彩語とその疊語についての形式的特徴及び意味的特徴を詳細に分析しながら、カテゴリーの成員に典型的なもの（視覚による客観的な叙述）から周辺的なもの（視覚による主観的な叙述）まで段階性があることが確認できた。すなわち、基本色彩語の疊語化には程度差のあることが明らかとなった。さらに、言語形式と意味内容の間に類似関係を認められ、視覚を介した話者の認知プロセスの分析を通じて、日中両言語における基本色彩語の表現の認知に一定の規則性を見出すことができた。本論文の考察により、同一語基を持つ基本色彩語の形式面と意味面において類像性が示されたのみならず、母語話者が視覚による同一語基を持つ基本色彩語の関係性をどのように捉えるかという認知プロセスも深く結びついていることが明らかになった。

<sup>327</sup> 6.6節の図22を再掲する。



## 7.2 今後の課題

本論文では、日中両言語における基本色彩語とその疊語の構造的特徴・文法機能が明らかになり、書き手が読み手に向けて何かの思考や感情などを創作的に表現したものであるジャンルで使用されやすい使用特性が見られた。また、基本色彩語の疊語で表される対象の性質は、認知言語学の「相互作用」の概念に基づき、対象へ何らかの相互作用を行い、元々対象に備わっているものの中から生じた知覚者の心身状態が対象の性質と認識し直されていることもことが示唆された。さらに、日中両言語では、同一語基を持つ基本色彩語とその疊語の表現には、基本的に1つの比喩的な意味が関わっていることが明らかになった。プロトタイプ的意味（基本義）である色彩以外の意味領域で用いられる際に、視覚のメタファー的転義によって意味が動機づけられ、複数の比喩的な意味が関わる用法が存在することが確認できた。一方で、次のような課題が残されている。

本論文では、辞書とコーパスの実例に基づき、実証的な研究方法を用いて考察を行ったが、基本色彩語の疊語「黒々しい、赤々しい、青々しい」の用例数は少ないため、十分に考察できず、今後の課題としたい。1.1節で述べたように「(二)疊語形式で初めて意味を有するもの」には「(IV) ものの音を描写する」用法と「(V) 色に関わる状態を描写する」用法という2種類のタイプがある。本論文では「(V) 色に関わる状態を描写する疊語」のみを対象とし、考察を行ってきた。本論で得られた成果は「(IV) ものの音を描写する疊語」にもあてはまるかどうか、今後の実証的研究が必要であると思われる。

本論文で得られた知見は、形式上の類像性の観点に基づき、同一語基を繰り返すものと同一語基に後接する接辞を付け加えるものを研究対象とし、表される意味に何らかの規則が存在することを究明することで、日中対照研究において有意義な示唆を提示することができたと思われる。すなわち、同一語基である「白・白い・白々・白々しい」の意味拡張を解決することができたことで、「真っ白」、「白っぽい」などの接辞を伴う色彩語と「青白い」、「赤黒い」などの他の色を伴う色彩語にも類似性がみられるのではないかと考えられる。

一方、中国の色彩語の研究にも更なる可能性が示された。具体的には、同じく基本色彩語を用いる“雪白雪白 (xuě bái xuě bái)”、“乌黑乌黑 (wū hēi wū hēi)”、“通红通红 (tōng hóng tōng hóng)”、“碧绿碧绿 (bì lǜ bì lǜ)”の2語反復、“红白 (hóng bái)”、“红绿 (hóng lǜ)”、“黑白 (hēi bái)”、“黑红 (hēi hóng)”の組み合わせ形式も研究課題としたい。今後は同一語基で、かつ繰り返り



返しの形式上の類像性という観点に基づき、考察の対象を広げ、日中対照研究の基本色彩語に関する全体像も分析することが望まれる。

以上では、日本語と中国語における基本色彩語とその豊語の特徴を捉えるための対照研究への展開について考えてみたが、日本語教育への貢献を目指す研究という観点から発展の方向性も考えられる。

本論文では、日中両言語における基本色彩語とその豊語を対象とし、同一語基で、かつ繰り返しの形式と意味関係と認知プロセスとの類像性を明らかにすることができたが、教育現場へ応用するために、指導方法について検討を行うということも今後の課題としてあげられる。基本的には、新出語彙を導入する際、豊語の意味だけではなく、その同一語基である基本形式も提示し、定着させるための例文を提示することが望まれる。また、視覚のメタファー的転義による4段階のプロセスが行われる豊語に対して明示的に指導するということが考えられる。具体的な指導例として、豊語「白々」、「白々しい」に関する誤用を防ぐために、習得の初期段階にある学習者に対し、既知語として「白」、「白い」が用いられる入れ替え可能の例文を挙げて教えることや入れ替え不可能の例文を取り上げることなどを提示することができる。ただし、一人一人の学習者に個々の豊語の説明を取り上げることは難しく、同一語基の多義語に関する知識を蓄えるためにどのような指導方法が効率的なのかを一考する必要があると思われる。

## 各章との既発表論文及び学会発表との関連

### 第1章 序論

新規執筆

### 第2章 先行研究及び本論文の位置づけ

新規執筆

### 第3章 理論的枠組みと研究方法

新規執筆

### 第4章 基本色彩語と畳語の使用実態に関する基礎調査

- (1) 陳祥(2018)「「XX(と)」、「XXな」、「XXしい」の構造・文法機能：畳語による生産性について」言語資源活用ワークショップ発表論文集(3), 国立国語研究所, pp. 307-315【会議発表論文(査読付)】
- (2) 陳祥(2020)「基本色彩語の畳語の一考察—コーパスを用いた量的分析—」『日本語教育研究』(66), pp. 21-42.【研究論文(査読付)】

### 第5章 基本色彩語と畳語の意味関係及び認知プロセス

- (3) 陳祥(2015)「反復形容詞と同じ語基を持つ形容詞を中心に」『2015年東アジア地区師生共同研討會—日本語教育與日本論文—』, 政治大學日本語文學系など校共同主辦【口頭発表】
- (4) 陳祥(2018)「既知の派生元形容詞から未知の反復形容詞への意味推測—台湾人日本語学習者を対象として—」『2018年應用日語國際學術研討會』, 國立高雄餐旅大學【口頭発表】
- (5) 陳祥(2019)「日本語の語彙的畳語の意味拡張及び認知プロセスについて—『白・白い・白々・白々しい』を対象として—」『国際日本論文』(12), pp. 307-315, 筑波大学【研究ノート(査読付)】

### 第6章 相互作用による日中両言語における基本色彩語の畳語の相違点

- (6) 陳祥(2018)「日中両言語における重ね型の一考察—重ね型形容詞を対象として—」『東アジアの知疎通と還流』第11回東アジア若手研究者合同研究フォーラム, 韓国高麗大学【口頭発表】
- (7) 陳祥(2019)「色彩語の日中対照研究—「赤・青」の基本形と重ね型を中心に—」『日本語・日本語事情遠隔教育拠点シンポジウム』, 筑波大学【ポスター発表】
- (8) 陳祥(2019)「色彩語の日中対照研究—「黒・白」の基本形と重ね型を中心に—」日中対照言

語学会第 41 回大会, 明海大学【口頭発表】

(9)陳祥(2020) “Linguistic Typology in Reduplicated Words: A Comparison of Japanese, English and Chinese” 第 5 回アジア未来会議 (AFC2020), フィリピン大学ロスバニョス校【英語発表】

(10)陳祥(2019)「日中両言語における部分畳語の一考察—「青々しい」と“ABB 式”を中心に—」『令和時代の日本論文—平成から令和へ—』第 12 回東アジア若手研究者合同研究フォーラム, 北京外国語大学【口頭発表】

(11)陳祥(2020)「現代日本語における語基「白」を含む色彩語畳語の意味拡張—中国語との比較—」「東アジア若手研究者合同研究フォーラム：依存と融合：日本論文の新たな展望」, 第 13 回東アジア若手研究者合同研究フォーラム【口頭発表】

(12)陳祥(2021)「日中両言語における色彩語の畳語の一考察—「黒々」と“黒黒”を対象に—」『国際日本論文』(13), pp. 113-128, 筑波大学【研究ノート(査読付)】

## 第 7 章 結論と今後の課題

新規執筆

(なお、すべての既発表論文および学会発表に加筆・修正を施している。)

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々からご指導とご助力を賜りました。

指導教官の小野 正樹先生には、多くのご指導や激励を賜りました。道に迷ったとき、いつもあたたかく導いてくださいました。常日頃から先生の研究者・教育者としての姿勢に触れられたことに感謝しております。そして、先生のおかげで、博士論文を完成させることができ、研究者として成長できたと実感しております。ここに厚く御礼申し上げます。

論文の副査をお引き受けくださった池田 晋先生、伊藤 秀明先生、チョーハン アヌブティ先生には、いつも懇切丁寧なご指導をいただきました。各先生方の視点から多くのご指摘をいただいたことにより、より良い論文に仕上げることができました。心より感謝申し上げます。

筑波大学での出会いや支援も、私の大きな力となりました。博士後期課程を通して、国際日本研究専攻の先生方に貴重なご指導をいただきました。研究室の友人、先輩、後輩たちには、ゼミなどを通して多くの助言と励ましをいただきました。留学時代にお世話になった久保田ご夫婦、池田ご夫婦には、いつも家族のように温かく見守っていただきました。また、日本文部科学省からは学習奨励費、米山記念奨学会からはロータリー米山記念奨学金、尚友倶楽部からは日本語教育研究者育成奨学金をいただき、研究に専念することができました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

最後に、いつも全力で私を応援してくれた父の陳東園と母の葉淑華と家族に感謝の意を示し、謝辞と致します。

# 参考文献

## 日本語文献

- 秋元美晴 (2005) 「複合語」『新版日本語教育事典』日本語教育学会(編), pp. 241-243, 大修館書店.
- 荒川洋平 (2006) 「認知意味論に基づく重複形容詞の分析」『高見澤孟先生古希記念論文集』, 凡人社, pp. 71-91.
- 安藤正次 (1935) 「疊音・疊語の一研究—特に Reduplicatio suffixa について—」『藤岡博士功績記念言語學論文集』藤岡博士功績記念會 (編), 岩波書店, pp. 7-17.
- イエスペルセン (著); 安藤貞雄 (訳) (2006) 『文法の原理』岩波書店.
- 飯田寿子 (2005) 「形容詞性構成要素からなる重複形容詞について—構成要素の特質をめぐって—」『国語学研究』(44), pp. 80-92.
- 池上嘉彦訳 (1977) 『言語と意味』大修館書店.
- 池上嘉彦 (2003) 「言語における<主観性>と<主観性>の指標(1)」『認知言語学論考』(3)ひつじ書房.
- 池上嘉彦 (2004) 「言語における<主観性>と<主観性>の指標(2)」『認知言語学論考』(4)ひつじ書房.
- 池上嘉彦・山梨正明 (編) (2020) 『認知言語学 I』ひつじ書房.
- 池田晋 (2016) 「中国語 AABB 型重畳形式の多量性と状態性に関する試論」『外国語教育論集』(38), 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター外国語教育部門, pp. 29-44.
- 石井正彦 (2007) 「疊語」『日本語学研究事典』飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺(編), p. 171, 明治書院.
- 石川慎一郎 (2007) 「X々型疊語の構造・使用・意味特性:『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた計量的調査」『統計数理研究所共同研究レポート』(373/374), pp. 55-74.
- 井上優 (2015) 「対照研究について考えておくべきこと」『一橋日本語教育研究』(3), ココ出版, pp. 3-12.
- 内田富男 (2014) 「コーパスと英語教育語彙表における基本色彩語の考察: BNC, JEFLL Corpus, CEFR(-J)を用いて」『明海大学研究紀要・人文学部』(50), pp. 19-32.

- 禹昊穎 (2015) 「疊語の諸機能」『学習院大学人文科学論集』(24), pp. 25-57.
- 小原真子 (2016) 「英語の色彩語について：コーパスのデータを中心に」言語文化学科編『島大言語文化』(41), pp. 47-64.
- 大里彩乃 (2013) 「疊語の研究」『言語文化研究』(22), 東京女子大学言語文化研究会, pp. 1-16.
- 大堀俊夫 (1991) 「文法構造の類像性」日本記号学会 (編)『かたちとイメージの記号論』(11), pp. 95-107.
- 大堀壽夫 (2002) 「Iconicity (類像性、アイコン性)」寺澤芳雄 (編)『英語学要語辞典』, 研究社, p. 318.
- 岡原嗣春 (2018) 「“V光” “白V” の意味説明方法」、『関西大学中国文学会紀要』(39), 関西大学中国文学会, pp. 47-66.
- 岡本恵美子 (2008) 「共感覚の日英比較研究」、『文京学院大学総合研究所紀要』(7), 文京学院大学総合研究所, pp. 43-69.
- 沖森卓也 (2012) 『語と語彙』朝倉書店.
- 小野尚之 (2015) 「構文的重複語形成—「女の子の子した」をめぐって—」『語彙意味論の新たな可能性を探って』, 開拓社, pp. 463-489.
- 小野正樹・李奇楠編 (2016) 『言語の主観性：認知とポライトネスの接点』くろしお出版.
- 郭晨然 (2014) 「色彩語彙に関する比喩的表現のイメージの考察—中国語と日本語の基本色を中心に—」『一橋日本語教育研究』(2), ココ出版, pp. 125-130.
- 郭麗 (2019) 「基本色彩形容詞の意味拡張に関する研究」『日本語教育方法研究会誌』26(1), 日本語教育方法研究会, pp. 36-37.
- 柏野和佳子 (2006) 「研究所報告『分類語彙表』の特徴と位置付け」『Japanese linguistics』(19), 国書刊行会, pp. 143-160.
- 菅野盾樹・中村雅之訳 (1991) 『心のなかの身体：想像力へのパラダイム転換』紀伊國屋書店
- 楠見孝 (1994) 「比喩理解における主題の意味変化—構成語間の相互作用の検討—」『心理学研究』63(3), pp. 373-380.
- 楠見孝 (1995) 『比喩の処理過程と意味構造』風間書房.
- 黒滝真理子 (2019) 『事態の捉え方と述語のかたち：英語から見た日本語』開拓社.
- 計見一雄訳 (2004) 『肉中の哲学：肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』哲学書房.
- 黄慧 (2009) 「日本語のオノマトペに後続する助詞について：『と』および『に』をめぐって」『コーパスに基づく言語学研究報告』(1), pp. 267-285.



- 児玉徳美 (2004) 『意味分析の新展開：ことばのひろがりに応える』 開拓社
- 児玉徳美 (2006) 『ヒト・ことば・社会』 開拓社
- 児玉徳美 (2010) 『いまあえてことば・言語分析・言語理論のあり方を問う』 開拓社
- 小森道彦 (2002) 「多義語の記述とコロケーション」 『英語青年』 研究社
- 近藤研二 (2015) 「形容詞＋形容詞タイプの複合形容詞について」 『文教大学国文』 (44), pp. 20-35.
- 斎藤倫明 (2004) 『語彙論的語構成論』 ひつじ書房
- 坂本真樹・佐野昌弘 (2004) 「色彩語イメージと名詞の共起関係で捉えた色彩語メタファーの創発特徴」 『日本認知科学会第21回大会発表論文集』, p. 188-189.
- 坂本真樹・古牧久典 (2005) 「心理実験とコーパスを用いた色彩語共感覚メタファーの表現効果研究」 『日本認知言語学会第5回大会発表論文集』, pp. 45-48.
- 坂本真樹・内海彰 (2007) 「色彩形容詞と名詞の相互作用による色彩形容詞メタファーの認知効果」 『認知科学』 14-3, pp. 380-397.
- 沢田奈保子 (1992) 「名詞の指定性と形容詞の限定性、描写性について—色彩名詞と色彩形容詞の使い分け要因の分析から—」 『言語研究』 (102), pp. 1-16.
- 澤田治美・仁田義雄・山梨正明編 (2019) 『場面と主体性・主観性』 ひつじ書房
- 譙燕 (2000) 「現代日本語における量語名詞—中国語との比較を中心に—」 『同大語彙研究』 (3), 同志社大学大学院日本語学研究会, pp. 81-91.
- 時衛国 (2015) 「“有点” “有些” の幾つかの用法について」 『外国語研究』 (48), 愛知教育大学外国語外国文学研究会, pp. 51-80.
- 篠原俊吾 (2008) 「相互作用と形容詞」 『ことばのダイナミズム』 森雄一・西村義樹・山田進・米山三明(編), くろしお出版, pp. 89-104.
- 篠原俊吾 (2019) 『選択の言語学：ことばのオートフォーカス』 開拓社
- 周萍萍 (2015) 「基本色彩語「黒」の比喩的拡張における日中対照」 『日本語教育研究』 (61), 長沼言語文化研究所, pp. 67-78.
- 朱徳熙(著) 杉村博文・木村英樹(訳) (1995) 『文法講義：朱徳熙教授の中国語文法要説』 東京：白帝社
- ジョージ・レイコフ(著)；池上嘉彦(他)訳(1993) 『認知意味論：言語から見た人間の心』 紀伊國屋書店
- 晋栄和 (1995) 「現代語量語形容詞の語構造について：「転成」との関連をめぐって」 『東北大学

- 文学部日本語学科論集』(5), 東北大学文学部日本語学科, pp. 49-60.
- 進藤三佳 (2008) 「視覚形容詞から強調詞への意味変化—文法化の対照言語学的研究」『認知言語学論考 No. 8』, pp. 157-189, ひつじ書房.
- 杉村博文・郭修静(2010) 『中国語』吹田:大阪大学出版会.
- 瀬戸賢一 (2001) 「意義関係を記述する」『英語青年』, pp. 9-11, 研究社.
- 戦慶勝 (2016) 『中国語と日本語における目的表現の対照研究』白帝社.
- 蘇洪 (2013) 「色彩語の日中対照研究—赤、黄、黒、白の四色を例として対照する場合—」『日中語彙研究』(3), 愛知大学中日辞典編纂所, pp. 47-62.
- 高橋弥守彦 (2017) 『中日対照言語学概論: その発想と表現』日本僑報社.
- 建石始 (2018) 「第6章 対照言語学的分析」『コーパス演習で学ぶ日本語学 日本語教育への応用』森篤嗣(編)朝倉書店.
- 玉村文郎 (1975) 「和語は造語力が弱いか」波多野完治・西尾寅弥 (編) 『現代日本語の単語と文字』汐文社.
- 玉村文郎 (1988) 「複合語意味」『日本語学』第7巻5号, pp. 23-32.
- 玉村禎郎 (2005) 『日本語学を学ぶ人のために』世界思想社.
- 田村泰男 (1991) 「現代日本語における畳語について: 数概念から見た畳語」『広島大学留学生センター紀要』(1), 広島大学留学生センター, pp. 41-47.
- 田村泰男 (2006) 「現代日本語の複合形容詞・派生形容詞・畳語形容詞について」『広島大学留学生センター紀要』(16), 広島大学留学生センター, pp. 13-20.
- 張恒悦 (2016) 『現代中国語の重ね型: 認知言語学的アプローチ』白帝社.
- 陳祥 (2015) 「基本色彩語「黒」の比喩的拡張における日中対照」『日本語教育研究』(61), 長沼言語文化研究所, pp. 67-78.
- 陳祥 (2018) 「「XX(と)」、「XXな」、「XXしい」の構造・文法機能: 畳語による生産性について」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』(3), 国立国語研究所, pp. 307-315.
- 陳祥 (2019) 「日中両言語における部分畳語の一考察—「青々しい」と“ABB式”を中心に—」『令和時代の日本論文—平成から令和へ—第12回東アジア若手研究者合同研究フォーラム』北京外国語大学.
- 陳祥(2020) 「日本語の語彙的反復表現の意味拡張及び認知プロセスについて—『白・白い・白々・白々しい』を対象として—」『国際日本論文』(12), 筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究, pp. 198-207.

- 陳祥(2021)「日中両言語における色彩語の豊語の一考察—「黒々」と“黒黒”を対象に—」『国際日本論文』(13), 筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究, pp. 113-128.
- 辻幸夫編(2003)『認知言語学への招待』大修館書店.
- 田梅(2014)「現代語豊語・豊語形容詞の構造について:現代中国語、日本語の豊語・豊語形容詞」『大学教育』(11), 山口大学教育機構, pp. 76-87.
- 唐向梅・鷺尾紀吉(2010)「中国と日本における色彩語の対照」『中央学院大学人間・自然論叢』(31), pp. 51-66.
- トニー・マケナリー;アンドリュー・ハーディー著;石川慎一郎訳(2014)『概説コーパス言語学:手法・理論・実践』ひつじ書房.
- 飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版.
- 中野弘三編(2012)『意味論』朝倉書店.
- 中原中也(1981)『山羊の歌』岩波書店.
- 中本敬子・李在鎬編(2011)『認知言語学研究の方法—内省・コーパス・実験』辻幸夫(監修)ひつじ書房.
- 仲本康一郎(1999)「時間認知を反映する形容詞—形容詞の局面的解釈をめぐって—」『言語科学論集』(5), 京都大学総合人間学部基礎科学科情報科学講座, pp. 89-99.
- 仲本康一郎(2014)「現代日本語の形容詞の意味分類」『山梨大学教育人間科学部紀要』16(23), 山梨大学教育人間科学部, pp. 83-91.
- 鍋島弘治朗(2016)『メタファーと身体性』ひつじ書房.
- 西尾寅弥(1988)『現代語彙の研究』明治書院.
- 西口理恵子・吉岡千香(2016)「基本色彩語(赤、白、青、黒)に関する一考察:広島女学院大学での調査から」『国際教養学部紀要』(3), 広島女学院大学国際教養学部, pp. 47-54.
- 野澤元・黒田航・仲本康一郎(他)(2006)「形容詞の理解と意味フレーム:階層的フレームモデルにおける属性」『日本認知言語学会論文集』(6), 日本認知言語学会, pp. 401-411.
- 野呂健一(2016)『現代日本語の反復構文—構文文法と類像性の観点から—』くろしお出版.
- 早瀬尚子(2008)「形容詞か副詞か?—副詞としての形容詞形とその叙述性」『認知言語学論考』(8), ひつじ書房, pp. 125-155.
- ブレント・バーリン、ポール・ケイ(著)日高杏子(訳)(2016)『基本の色彩語:普遍性と進化について』東京:法政大学出版局.
- 深田智(2020)「イメージ・スキーマ」『認知言語学Ⅱ』池上嘉彦・山梨正明(編), 研究社,

pp. 139-167.

深田智・仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ』山梨正明 (編) 研究社.

福井勝義 (1991) 『認識と文化』東京大学出版会.

藤村逸子 (2003) 「色彩名詞と色彩形容詞の対立：新聞と文学のコーパスからわかること」『日本語学習辞典編纂に向けた電子化コーパス利用におけるコロケーション研究中間報告論文集』, pp. 25-48.

本多啓 (2013) 『知覚と行為の認知言語学：「私」は自分の外にある』開拓社.

マイケル・スタッブズ著；南出康世・石川慎一郎監訳 (2006) 『コーパス語彙意味論：語から句へ』研究社.

益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版.

益岡隆志編 (2008) 『叙述類型論』くろしお出版.

丸山直子・星野和子 (2019) 「第7章コーパスを利用した辞書記述の試み」『講座日本語コーパス7 コーパスと辞書』朝倉書店.

三浦佑之 (1996) 「日本神話と色彩」『色彩文化事典』掲載予定原稿 (<http://miuras-tiger.la.coocan.jp/sikisai.html>) .

宮川創 (2014) 「重複語の有契性：言語類型論の視点から」『日本認知言語学会論文集』(14), 日本認知言語学会, pp. 490-496.

靱山洋介 (2014) 『日本語研究のための認知言語学』研究社.

森雄一・西村義樹・山田進・米山三明編 (2008) 『ことばのダイナミズム』くろしお出版.

森雄一・高橋英光編 (2013) 『認知言語学：基礎から最前線へ』くろしお出版.

矢澤真人 (2019) 「第6章コーパスによる辞書の記述内容の検証」『講座日本語コーパス7 コーパスと辞書』朝倉書店.

山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房.

山梨正明 (1998) 「五感と空間認知の言語学—感性から見た言葉と意味」『*Computer Today*』(83), pp. 18-27.

山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』大修館書店.

山梨正明 (2010) 『認知言語学原理』くろしお出版.

山梨正明 (2012) 『認知意味論研究』研究社.

山梨正明 (2015) 『修辭的表現論：認知と言葉の技巧』開拓社.

- 山梨正明 (2016) 『自然論理と日常言語：ことばと論理の統合的研究』 ひつじ書房.
- 山梨正明 (2017) 『推論と照応：照応研究の新展開』 くろしお出版.
- 尤東旭 (2004) 『中日の形容詞における比喩的表現の対照研究：五感を表す形容詞をめぐって』  
白帝社.
- 吉田金彦編 (2000) 『語源辞典 形容詞編』 東京堂出版.
- 吉村公宏編 (2003) 『認知音韻・形態論』 大修館書店.
- 李在鎬 (2010) 『認知言語学への誘い：意味と文法の世界』 開拓社.
- 渡部昇一、楠瀬淳、三下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店

## 外国語文献

- Berlin, Overton Brent; Kay, Paul. (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*, University of California Press.
- David H. Hubel and Torsten N. Wiesel. (1962) “Receptive Fields, Binocular Interaction and Functional Architecture in the Cat’s Visual Cortex” *Journal of Physiology* (160) pp.106-154.
- George Lakoff and Mark Johnson. (1980) *Metaphors we live by*, Chicago: University of Chicago Press.
- George Lakoff. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*, Chicago: University of Chicago Press.
- George Lakoff and Mark Johnson. (1999) *Philosophy in the flesh: the embodied mind and its challenge to Western thought*, New York: Basic Books.
- John Haiman. (1980) “The Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation” *Language* 56(3) pp.515-540.
- Mark Johnson. (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*, Chicago: University of Chicago Press.
- Michael Stubbs.(2001) *Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics*, Blackwell Publishing.
- Otto Jespersen. (1924) *The Philosophy of grammar*, London: George Allen & Unwin.
- Quirk, Randolph et al. (1985) *A comprehensive grammar of the English language*, UK: Longman.
- Ronald W. Langacker. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, Vol.1.1.1. Stanford: Stanford University Press.
- Stephen Ullmann. (1962) *Semantics: an introduction to the science of meaning*, Oxford: Blackwell.

Shanthi Nadarajan. (2006) *A Crosslinguistic study of Reduplication*, *Journal of Second Language Acquisition and Teaching* 13, pp.39-53. The University of Arizona.

Tony McEnery and Andrew Hardie.(2001) *Corpus Linguistics: Method, Theory and Practice*, Cambridge University Press.

Toru Okamura. (1991) *Reduplication in English*: *English Review* 5. Sanshusha Public.

Ungerer,F. and H. J. Schmid. (1996) *An Introduction to the Cognitive Linguistics*, Longman.

李劲荣·陆丙甫 (2016) <论形容词重叠式的语法意义>《语法研究》(4), 华中科技大学中国语言研究所, pp. 10-20.

吕叔湘 (1999) 《现代汉语八百词增订本》商务印书馆.

石镊 (2010) 《汉语形容词重叠形式的历史发展》商务印书馆.

王峰 (2015) <现代汉语单音节形容词重叠 AA 式的原型效应>《関西外国語大学研究論集》(101), 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部, pp. 41-51.

王国栓 (2004) <汉语形容词AA式重叠与量范围>《汉语学习》(4), 延边大学, pp. 24-27.

王力(1985)《中国现代语法》商务印书馆.

王利涛(2008) <現代漢語形容詞重疊研究綜述>《昭通师范高等专科学校学报》(3), 昭通學院 pp. 46-49.

朱德熙(1982)《语法讲义》商务印书馆.

## 辞典・辞典 (年代順)

『現代雜誌九十種の用語用字第一分冊：総記および語彙表』(1962) 国立国語研究所 (編) 国立国語研究所出版.

《北京語言学院出版社现代汉语频率词典》(1986) 北京語言学院語言教学研究所 (編) 北京語言学院出版社.

『学研国語大辞典第2版』(1988) 金田一春彦、池田弥三郎 (編) 学習研究社.

『講談社和英辞典』(1979) 清水護、成田成寿 (編) 講談社.

『岩波日中辞典』(1983) 倉石武四郎、折敷瀬興 (編) 東京：岩波書店.

『岩波中国語辞典』(1983) 倉石武四郎 (著) 東京：岩波書店.

《汉语叠音词词典》(1997) 张拱贵·王聚元 (編) 南京大学出版社.



- 『分類語彙表』(2004) 国立国語研究所(編) 大日本図書.
- 『小学館日本国語大辞典第2版』(2001) 小学館国語辞典編集部(編) 小学館.
- 『日本語表現・文型事典』(2002) 朝倉書店.
- 『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌』(2005) 国立国語研究所(編) 国立国語研究所出版.
- 『講談社中日辞典第3版』(2010) 相原茂(編) 講談社.
- 『大修館中日大辞典第3版』(2010) 愛知大学中日大辞典編纂所(編) 大修館書店.
- 『明鏡国語辞典第2版』(2010) 北原保雄(編) 大修館書店.
- 『新編認知言語学キーワード事典』(2013) 辻幸夫(編) 研究社.
- 『デジタル大辞泉』(2013) 池上秋他(編) 小学館.
- 『小学館中日辞典第3版』(2016) 商務印書館・小学館(編) 小学館.
- 《現代漢語詞典第7版》(2016) 中国社会科学院语言研究所词典编辑室編(編) 北京: 商务印书馆.
- 『岩波広辞苑第7版』(2018) 新村出(編) 岩波書店.

## コーパスデータベース・参照したサイト

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』  
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/BCCWJ-nt/search>
- 『筑波ウェブコーパス』  
<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>
- 『北京大学中国语言学研究中心语料库检索系统: 网络版』  
[http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/)
- 『現代漢語平衡語料庫』  
<http://asbc.iis.sinica.edu.tw/>
- 『Yahoo! JAPAN』  
<https://www.yahoo.co.jp/>

本論文に下記の通り、誤りがございました。

お詫び申し上げますとともにんで謹んで訂正いたします。

また、ご指摘をくださった副査の先生方に心より感謝申し上げます。

正誤表（2022年2月1日現在）

該当箇所	誤	正
p. 46	「白白しい」 > 「シラジラシイ」	「白白しい」 = 「シラジラシイ」
p. 48 表 2	『小学館日本国語大辞典第2版』の読み方は「くろぐろ」、「くろぐろしい」	『小学館日本国語大辞典第2版』の読み方は「くろぐろ」のみ
p. 50	辞書を通し、漢字という表記形式は語基「白」、「黒」、「青」である基本色彩語の疊語が共通して現れている。	辞書を通し、語基「青」である基本色彩語の疊語の表記形式は、語基「白」、「黒」、「赤」である基本色彩語の疊語と同じく、漢字で表記されていることが分かった。
p. 50	「青あお」 > 「青青」	「青あお」 = 「青青」
p. 58	注釈 89 「40代も終わりに近づいてきたが、何も達成されず、39年間を無駄に過ごしてしまった。」（筆者訳）	注釈 89 「40代の始まりに近づいてきたが、何も達成されず、39年間を無駄に過ごしてしまった。」（筆者訳）
p. 60	…面積が大きく、見渡す限り続いている空間を修飾するのは基本的な述語用法として使用されると考えられる。	…面積が大きく、見渡す限り続いている空間を修飾している。 (17a)、(18a)、(18b)、(19b)、(20b) は連体修飾用法、(20a)、(17b) は述語、(19a) は補語として使用されると考えられる。
p. 61	『CCL』では“白白”、“黒黒”、“紅	『CCL』では“白白”のみ副詞の

表 7	“红”、“绿绿”は副詞の文法機能が確認されました。	文法機能が確認されました。
p. 62	使用頻度が最も高いこと…	使用頻度が最も高いこと…
p. 66	本章の考察から、形式上の類像性の観点に基づき、基本色彩語の豊語は他の豊語と類似している…	本章の考察から、形式上の類像性の観点に基づき、基本色彩語の豊語は他の基本色彩語の豊語と類似している…
p. 73	(4)四十六年一月、業火に焼けおちてひと月余り、ほとんど跡片づけは終ってただ荒涼とした空間だけが、冬の陽射しのなかに白々としていた。(BCCWJ LBi2_00012: 河原敏明『天皇家三代の半世紀』1994)	(4)朝日はまださしていないが、ばばのへやの半分あいたカーテンのあいだからは、白々とした景色がのぞいている。(BCCWJ LBmn_00013: 和田登『魔界の使者コウモリ男』1998)

(以上)